

---

# 常闇の魔銃士

鳥居なごむ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

常闇の魔銃士

### 【Nコード】

N9510X

### 【作者名】

鳥居なごむ

### 【あらすじ】

#### 【異世界転生最強モノ】

焼きプリンを食べたという理由で無理心中させられた神崎蓮は、科学の代わりに魔術や魔導力が存在し、獣人やエルフで栄える「グランシエル」という異世界に転生する。魔王との奴隷契約によって最強の魔銃士となった主人公が頑張る話です。

### 【追記】

幕間は本編のバックストーリーを「三人称」で書いています。章ごとの幕間が一つの物語になっている仕様で本編より一話一話が長

めに設定されています。

過去も未来も頭の中にしか存在しない。目の前にあるのはいつも現在だけだ。

ルオ二ト・マギ「ある朝の光景」 鳳凰曆七一年

この世界に生まれて十六年半の月日が流れていた。

この日、俺は運命の再会を果たすことになる。

アラバスタ共和国の南西に広がる砂漠地帯。

大地は見渡す限り赤い砂に覆われている。一部の生命体しか生息できない不毛地帯だ。一陣の風が吹くだけで視界は完全な朱に染まるだろう。そんな砂漠の中を俺は無我夢中で駆け巡っていた。一歩踏み出す度に戦闘用長靴が赤い大地に飲み込まれていく。目標と遭遇してから数分しか経っていないのに息が上がりはじめていた。どうやら砂地での激走は想像以上に体力の消耗が激しいらしい。

「巨大砂蚯蚓も倒せないようにやら、<sup>サンドワーム</sup>単独で世界を旅するにゃんて夢のまた夢にゃ」

大きな岩の上に腰を下ろした猫系獣人族の女　ハシユシュ・ミラケツタは起用に尻尾を使いながら林檎を齧った。胸元と下腹部を布で隠すだけという露出度の高い格好をしている。戦闘不参加の意思表明なのか、それとも別の思惑があるのか判然としない。顔立ちと長身痩躯な体型は魅力的なのだが、頭に生えた猫耳と腰の尻尾、おまけに言葉の節々に「にゃ」と付けるので馬鹿っぽい印象を受ける。元魔銃士の孤児院保母で俺の師匠と呼ぶべき存在だ。

魔銃士。

魔術が封入された魔弾を撃ち出す銃の専門家である。主に中距離から長距離を得意とし、攻撃から補助まで状況に即した行動が可能だ。魔弾には口径によって第一式から第七式までの階級があり、数字が高くなるほど強力な術式が封入されている。第三式までの小口径は両腰に提げた回転式と自動式の魔弾銃を使用し、第四式以上の大口径は背中に担いだ強襲用狙撃魔弾銃アサルトレイターが必要となる。

「砂中から引きずり出さない限り勝ち目はないにや」

「そんなことは言われなくてもわかってますよ！」

俺はハシユシユの助言に文句を返しながら後方を振り返った。赤い砂を舞い上がらせながら標的が地中を猛進してくる。ぎりぎりを見計らって俺は迫る砂塵を横つ飛びで回避。その流れで前方へ一回転して素早く起き上がる。右手で帯革に装着した回転式魔弾銃を引き抜き砂中へ発砲。着弾と同時に封入された第三式の風属性魔術が発動する。

刹那 巨大な砂柱が天へ向かって舞い上がった。俺は六発目を撃ち終えた魔弾銃から空薬莖を排出。風属性の魔弾を専用器具を用いて六発同時に装填する。撃鉄を起こして初弾を薬室へ送り込みながら周辺への警戒を強めた。

不意に近場の赤い大地が大きく盛り上がる。その中から獲物を丸飲みにする巨大な口と無数の牙だけを有した巨大砂蚯蚓の頭部が姿を現した。粘着力の強そうな涎を滴らせながらこちらに敵意を向けてくる。

「ひゅー」

口笛を吹けないのかハシユシユはそれっぽい声で発音する。無言で座っていたら画になる美貌だけに残念だ。俺は魔弾銃を構え直して巨大砂蚯蚓と対峙する。いきなり襲いかかって来ないのは魔物にも本能的な警戒心があるからだろう。

ここは先手を取るべきかもしれないな。

ゆつくりと俺は左手で自動式魔弾銃を帯革から抜き取る。派手な演出を望んでいるわけではなく、魔術を扱えない魔銃士にとって二挺提げは珍しくない。唯一無二の武器である銃と弾薬の数がそのまま生死を分けるからだ。愛銃一丁で魔物に挑むのは銀幕の中の主人公だけでいい。

まずは左手に構えた自動式魔弾銃で火属性の魔弾を放つ。それから右手の回転式魔弾銃の引き金を絞り風属性の魔弾を発砲。中空で術式を展開し始めた火属性の魔弾に風属性の魔弾が絡む。二つの術式は魔術反応を引き起こして紅蓮の炎を錬成。巨大砂蚯蚓の醜悪な容貌を渦巻いた灼熱の炎が焼き払う。

「ブオオオオオオオオオオーッ！」

大地を震わせるような咆哮を発しながら巨大砂蚯蚓は砂中に潜り込む。消火目的か怒りで我を見失っただけなのか判然としない。俺は神経を研ぎ澄ませて警戒に集中する。赤い砂を盛り上げて再び姿を現した標的は、唐突に巨大な口から粘着性の高そうな唾液を吐き出した。

「うおっ！」

今度は俺が悲鳴に近い声を発して逃げることになった。気持ち悪いだけならともかく、巨大砂蚯蚓の唾液には硫酸と似た性質がある。つまり水と混合すると超高熱を発生させるわけで、構成要素の七割が水分の人体には怖ろしく危険な代物だ。

さっきまで俺のいた場所に唾液が撒き散らされる。俺は砂の上を横転しながら作戦を練り直していく。持久戦は体力が持ちそうになるので却下。短期決戦なら巨大砂蚯蚓の弱点である風属性の第五式魔弾を使うべきだろう。経費削減も命あつての物種だ。

俺は立ち上がり回転式魔弾銃と自動式魔弾銃を帯革に差し込む。その代わり背中に担いだ大口径魔弾銃を取り出して両手で構えた。有用と判断したのか巨大砂蚯蚓は再び口内から唾液の塊を吐き出してくる。

超反応で横へ倒れ込んで液体を回避し、俺は砂の上に伏せた状態で大口径魔弾銃の引き金に指をかける。絞り切る直前に両腕下の赤い砂が盛り上がり銃口を撥ね上げられた。尻尾？ 強制的に軌道修正を余儀なくされた第五式魔弾は中空で無数の風による刃を形成して空の彼方へ消えていく。好機と判断したらしい巨大砂蚯蚓は赤色の砂を巻き上げながら距離を詰めてきた。

「糞っ垂れが！」

俺は愚痴りながらも素早く身体を起こした。標的は無数の牙が生えた大口を開いたまま襲いかかってくる。勝利を確信しての怠慢な攻撃なら心外だった。

「悪いな。俺の武器は魔弾銃だけじゃないんだよ」

俺は帯革に提げた手投げ用魔榴弾を巨大砂蚯蚓の口中へ向けて投擲。次いで風属性の魔弾が込められた回転式魔弾銃を抜き取り発砲。強烈な突風が俺と標的の位置を引き離れた。

その直後、標的の体内で第四式魔榴弾が火属性の術式を展開。高熱の炎が瞬間膨張して巨大砂蚯蚓の頭部を吹き飛ばした。周辺に気持の悪い肉片と体液を撒き散らし、指揮系統を失った胴体は鈍い音を立てて砂上へ崩れ落ちていく。舞い上がった赤い粉塵が心なしか俺を祝福しているように見えた。

「ふーっ！」

盛大に息を吐いて俺はその場に座り込んだ。見学していたハシユシユが岩から下りて近付いてくる。猫系獣人族特有の褐色肌としなやかな肉体美が年齢を感じさせない。俺の記憶が正しければ三十路前だが、二十歳と言われても疑う者はいないだろう。師匠は御座りな拍手をしながら感想を口にする。

「この調子にやら期日に旅へ出られるかもしれにゃいにゃ」

そう　俺は一刻も早く大人になりたかった。

この世界では十七歳が一人前の条件とされている。十七の誕生日を迎えれば酒も煙草も賭博も自由だ。世界を股にかけて冒険することも本人の意思に委ねられる。あと半年の辛抱で俺は大人として彼女を探す旅へ出ることができるとだ。

「しかし魔銃士は金がかかり過ぎるのが難点ですよ。節約しているつもりなんですけど、一向に旅の資金が貯まらないんです」

「あたしに愚痴を零されても困るにゃよ。それに各地で賞金のかけ

られた魔物を倒しながら進めば魔弾の補充と旅費くらい出るにやる？」

「他人事ですねえ」

「他人事にやからにや」

俺は師匠の無計画さに懨然としてしまう。恩返しも兼ねて緩んだ頭の螺子を締めてあげたい。

突如 遠くから轟音が聞こえた。アラバスタ共和国内の工業地区なら気にも留めないが、この見渡す限り赤い砂に覆われた砂漠地帯ではそうもいかない。

「なんですか今の？」

「にやにやにや、ひよつとすると不滅竜かもしれないにや！」

「不滅竜？」

俺の疑問を無視してハシユシユは額に手を当てて遠くを見やる。尻尾が上に向かって伸びているので相当興奮しているのだろう。俺は立ち上がり魔弾銃から砂を振り払って背中に担ぎ直した。なんとなく師匠の眺めている方向へ視線を移しておく。

再び遠くで轟音が響いた。

「間違いなさそうにや。不滅竜が暴れているにやよ」

「だから不滅竜ってなんですか？」

「この赤い砂漠の主にや！」

びくびくと耳を動かしながらハシユシユは告げる。相変わらず残念可愛い師匠だ。

不滅竜。

全長五十メートルを超える巨大な砂蛇。不死を連想させる名は討伐しても数日後には目撃されることに由来しているらしい。簡潔に説明を終えたハシユシユは真剣な面持ちで問いかけてくる。

「どうするにゃ?」

「行くしかないでしょう」

「近付くだけでも危険にゃよ?」

「それなら尚更ですよ」

おどけるように俺は肩をすくめた。

大地を突き上げて巨大な体躯が空へ舞い上がる。緩やかな放物線を描いて再び大地へ落下すると不滅竜は赤い砂を巻き上げた。まるで砂の海を泳ぐように進んでいく。数秒の間隔を空けて優雅な跳躍を繰り返していた。

「……すげえ……」

目の前に広がる光景を眺めながら俺は呆然と感想を吐露していた。傍らに立つハシユシユが怪訝そうな表情を浮かべる。

「交戦中かもしれないにゃ」

改めて周囲を確認してから俺は語尾の所為で緊張感の欠片もない師匠に聞き返した。

「それらしい集団は見当たりませんか？」

「そうにやんだけど不滅竜の動きが活発過ぎるんにゃよ」

「普段はもつと大人しいんですか？」

「にゃんとまあ」

俺の質問を完全に無視してハシユシユは素つ頓狂な声を上げた。仕方なく向けられた視線の先を辿ると瞳に人影が映り込む。種族は判然としないが長い黒髪に黒装束を纏っている。魔術あるいは魔導具を使用しているのか、中空を跳ねるような動きで不滅竜を翻弄していた。ひらりひらりと攻撃を避けるだけで反撃に転じるつもりはないらしい。

「どこかへ連れ込んで倒すつもりなんですかね？」

「さあにや、常闇の魔女が考えることにやんてわからにやいさ」

師匠の口から不吉な言葉が零れ落ちる。口調はともかく鋭い眼光が危険を訴えていた。

常闇の魔女　八英傑の一翼を担う闇属性を極めた魔王アーシエス・バラライカの通称である。七日間で世界を闇に葬り去れる魔力を持つと称されているが、これはもう魔王を表現する際の枕詞のようなもので、果たしてどこまで事実在即しているか誰にもわからない。

「師匠は常闇の魔女と面識があるんですか？」

「あるわけににや。神聖イージス王国の祭典で遠目から見たことがあるだけにやよ」

「それじゃあ、初顔合わせということであつておきまますか？」

「ふざけるにや！」

ハシユシユは地団駄を踏んで声を荒げた。しかしそんな怒声さえも語尾の所為で「あら可愛らしい」といった風情である。他愛ない質疑応答を繰り返していると次第に轟音が大きくなってきた。いくから見晴らしのいい砂漠地帯とはいえ、人影が視認できる距離なのだから、おそらく数百メートル程度しか離れていなかったのだろう。

こちらへ向かってくる常闇の魔女とその背中を追う不滅竜。

「早く死んだ演技ふりをするにや！　今から逃げても手遅れにや！」

そう言い残して師匠は事切れたように赤い大地へ突っ伏した。超

残念可愛い。しかしハシユシユの奇怪な行動を楽しんでいる場合ではなさそうだった。俺は背中の強襲用狙撃魔弾銃アサルトライタを取り出して空薬莖を排出。新たに五十口径の大型第五式魔弾を装填。遊底を引きながら俺は死んだ演技中の師匠に歩み寄る。常闇の魔女あるいは不滅竜の脅威が飛び火したら風速百二十メートルの強風を発生させて文字通り逃飛行だ。

しかしその予定は一瞬で変更を余儀なくされてしまう。なぜなら眼前に着地した常闇の魔女。俺と年端の変わらないアーシエスの顔に見覚えがあったからだ。先の尖った耳に彫刻のような造形美と白磁の肌。伶俐な視線でこちらを一瞥した魔女は長い黒髪を揺らして再跳躍の体勢に入る。

「待ってくれ！」

思考するよりも先に俺の口は言葉を紡いでいた。跳躍を保留した魔女は緩やかに顔を上げる。種族がエルフになっても面影は失われていない。やっと 見つけた。十六年半もの歳月を費やしてしまった。いや、たった十六年半で巡り会えたのだから俺は運がいいのかもしれない。

「フオオオオオオオオオオン！」

砂中から顔を出した不滅竜が咆哮する。頭部には硝子の紅玉を詰め込んだような伽藍とした瞳。アーシエスは美貌を歪めて舌打ちした。それから言語とは異なる文字の羅列を紡いでいく。次の瞬間、魔女の左腕から黒煙が発生。魔力解放の影響が顔に悪魔のような蠱惑的な紋様が浮かび上がっていく。

アーシエスは左腕を肩の高さまで掲げた。

「>影縫矢く」  
シャドーバインド

中空に黒い魔術組成式 禍々しい闇の魔方陣が描き出される。  
即時発動型の>影縫矢くは一瞬で不滅竜の影を射抜き拘束した。

「フオオオオオオオオオオン！」

動きを封じられた不滅竜は再び咆哮する。魔女は優雅な所作で両腕を左右に広げた。それぞれに描き出された二つの魔術組成式を頭上に移動させて連結。アーシエスは口の端を上げて悪戯な笑みを浮かべる。

「>亜空間消滅く」  
ダンテ

闇属性の超高位魔術を無詠唱で発動。不滅竜の背後に現れた仄暗い時空の歪みが次第に広がっていく。生み出された円形の無は直径十メートルまで大きくなると強烈な引力を発生。不滅竜の巨軀を赤い砂と一緒に飲み込んでいく。俺は師匠の身体を抱き寄せながら魔法女の腰に手を回して無から生じる引力に耐えた。

これが八英傑と称される魔王の魔術。

無が不滅竜を飲み込む光景は地獄絵図に等しかった。

すべてを無に還すと時空の歪みは消失。

緊張から解放された俺は胸を撫で下ろした。

「私の身体に無断で触れるなんて随分と大胆ね」

「いきなり危なっかしい魔術を使うからだろーが！ 一歩間違えたら俺と師匠まで死ぬところだったぞ！」

蠱惑的な紋様の消えたアーシエスは不思議そうに小首を傾げる。

ほとんど背の高さが変わらないので妙な圧迫感を受けた。

「私を呼び止めたのはあなたでしょう？」

「うぐ」

正論を返されてしまった。確かに俺が呼び止めなければ起こらなかった騒動である。

「まあ、いいわ。私は寛容だから許してあげる」

「……………」

本当に寛容な奴はそんなこと言わないけどな。

「なんとか不滅竜を生け捕りにしたかったのだけど、それはまあ、次回以降の楽しみということにしておきましょう」

アーシエスは赤い大地を見渡しながら呟いた。

「悪かったな。予定を狂わせてさ」

「予定は未定だから楽しいのよ」

俺は苦笑するしかない。少し陰湿そうな性格まで誰かさんと瓜二つだった。

ともかく俺は傍らに立つ魔女を改めて見やる。白銀髪が多いエルフ族の中では珍しい黒髪。八英傑の一角を担う閻属性を極めた魔王。他人の空似というには条件が揃い過ぎている。しかし事実を語り聞かせたところで信じてもらえないだろう。

だから俺は正攻法で気持ち伝えることにした。

「あと半年経つたら俺は旅に出る。世界のどこかで、また会ってもらえるか?」

「どうして私に会いたいのかしら?」

「常闇の魔女に一目惚れしたんだ」

「あら、随分と嬉しいことを言ってくれるのね」

くくくと含み笑いをして魔女は語を継ぎ足した。

「これから一年半後、八英傑の集結する祭典があるわ」

旅に出られるようになってから一年後の世界である。

「その場所へ向かえば会えるわけか?」

「そうね　ただ覚悟は出来ているのかしら?　ほかの八英傑が私のように温厚とは限らない。ただそこにいるという理由だけで殺されるかもしれないわ」

「覚悟なら生まれる前から出来ているさ」

俺は長年抱えていた想いを吐露した。そう　今ここにいることが覚悟の表れだ。

「あなた見込みがありそうね。私と契約して専属の奴隷になりなさい」

黒衣の魔王アーシエスは堂々と宣告した。

「えーっと……意味がわからないのですが?」

思わず敬語になってしまった俺を一体誰が責められよう。

「簡単に惚れたとか言う人族を信用できないわ。でも命をかけられるなら話は変わってくるでしょう?」

宣告者の口元には悪魔のような微笑。俺は傍らで死んだ演技中の師匠を見やる。ハシユシユは寝息を立てながら居眠りしていた。この状況で眠れるとかどんな神経しているんだよ!

しかしまあ、そんな些細な出来事はどうでもいい。  
私と契約して専属の奴隷になりなさい。

理不尽極まりない無茶苦茶な要求。なにより魔王というのが性質の悪さを象徴している。そこだけ避けてくれれば上手くやれる自信はあったのだ。だからこそ俺は確信を持って断言できる。

これが俺と彼女の記念すべき再会だったと。

「わかった。もう好きにしてくれ」

頂垂れる俺に常闇の魔女は満足そうに微笑む。

「ああああ私としたことが あなたの名前を聞いていなかったわ」  
「ロンだ。ロン・ラズエル」

まずは十六年半前 今となつては昔話にしかならない出来事を  
語るとしよつ。

人生。

神が創造した多人数同時参加型の世界。

もし人生をMMOに例えるなら、次のような長所が挙げられるだろう。

- 一つ、すべての登場人物が深い人間性を持っている。
- 一つ、グラフィックが綺麗でBGMも無限大。
- 一つ、信じられないくらい複雑で洗練された物語。

しかし人生にはゲームとして致命的な欠陥があった。

- 一つ、性別を選択できない。
- 一つ、容姿の選択あるいは造形ができない。
- 一つ、初期状態に圧倒的な差がある。

かなり極端な例を挙げれば、働かなくても暮らせる国と、四秒に一人死んでしまう国が存在する。どこに割り振られるかは無作為で選択の余地はない。くだらない理由でくだらない差別が発生し、搾取る側と搾取される側が明確に分けられた世界だ。

だからこそ「人」が「生きる」だけで物語が成立するのかもしれない。

「それでさ、次、どれにする？」

ふわふわと思考の波を漂う俺に神と名乗る声が再び問いかけてき

た。なにも存在しない真っ暗で穏やかな空間。知覚とは異なる感覚が脳に直接情報を送り込んでくる。様々な世界の設定や参加人数。その中に『人生』も含まれていて、俺は拍子抜けを通り越した虚無感に苛まれていた。

「あの、一つ質問してもいいですか？」

俺は姿を確認することもできない神に声をかける。

「構わんよ」

「俺と一緒に死んだ『桐原彩奈』という女性はどの世界を選択したんですか？」

数瞬の沈黙。やがて神の声は世界の名称を告げた。

「どうやら『グランシエル』を選んだようだな」

曰く科学ではなく魔術と魔導の発展した世界。エルフ族が栄える神聖イージス王国、人族と猫系獣人族が共存するアラバスタ共和国、大柄な熊系獣人族と妖精族が築いたアルマダ連邦、三国は覇権を争いながらも世界平和のために同盟を結んでいる。なぜならそこは魔物が跋扈する混沌とした世界だからだ。

魔術には土・水・風・火・氷・雷・光・闇と八つの種類が存在し、それぞれの頂点に属性を極めた英傑と呼ばれる魔王が君臨しているらしい。八英傑の持つ魔石をすべて集めた者はどんな願い事でも三つだけ叶えてもらえるという。

うーん、どうして彩奈は『グランシエル』を選択したのだろうか？ 剣と魔法のファンタジーに興味があるとは思えないし、おそら

く「どんな願い事でも叶う」という文言が肝なのだろう。

しかしまあ、そんなことはどうでもいい。彩奈が選択した世界に転生する。この点に関して俺の辞書に躊躇の二文字は存在しない。それに『人生』と比べれば『グランシエル』は目的達成が明確だ。八つの魔石を集めて世界を救済し、生まれ変わった彩奈と幸せに暮らす。三つも願い事が叶えられるのだから、それまでに会っていなくても大丈夫だろう。

「俺もその『グランシエル』にします」

「ふむ。先に言っておくが『人生』の記憶は初期化されるぞ？」

いきなり出鼻を挫かれた。とはいえ考えるまでもない。

「それでも行き先に変更はありません」

「承知した。必要事項に記入を済ませれば新しい世界の始まりだ」

頭の中に質問と選択肢が表示される。どうやら動作する必要はなく、思考するだけで選択肢が消えていく。このグランシエルという世界は、人生に比べると初期設定が自由だった。まず性別と種族に所属する国家を選び、その結果を受けて基礎能力値が決定、そこから伸ばしたい分野に与えられた数値を割り振る。俺は迷うことなく「知能」に全数値を振り込んだ。勉強ができるかどうかは別として、やはり根本的な知能は高いほうが望ましい。

最後に現れたのは能力を選択してくださいという指示だった。

ゆらゆらと思考の波を回遊しながら俺は一覧表に目を通していく。なにやら「特技」と「特性」の二種類があって、前者は「使用」するもので後者は「常時発動」らしい。とりあえず頭の中に流れてい

る膨大な情報から一つを選んで閲覧した。

特技>川越スマイルく。

キメ顔を作ると料理の味以前に美味しいと言わざるを得ない雰囲気醸し出すことができる。

「料理は上手くならないのかよ！」

つつい突っ込んでしまう俺がいた。とうかこれ訴えられても文句を言えない能力名と効果だぞ。とはいえ損する要素はないから候補の一つだな。

特性>修造スタイルく。

攻撃力と俊敏性が大幅に上昇する。ただし周りが引くほど熱い漢になってしまう。

おお、この能力は悪くないな。しかし固有名詞使い過ぎだろ。どっだけ俗世に塗れた神だよ。

「配慮したつもりなんだがな。意味のわからない言葉で説明されるより『人生』で親しみのある単語を用いたほうが理解しやすいだろ？」

「心の声が聞こえている！」

「まあ、ここは我の世界だからな」

ふむ。そう言われると納得するしかない。

しかも冷静に考えれば確かに気の利いた配慮である。能力名だけである程度の予測が可能だし、なにより映像として瞬時に想像できるからな。俺は思考の海に潜り情報を取捨選択していく。もっとこう、はつきり使い勝手のいい能力はないものだろうか？

特性>テンプレーション<。

不思議な香りを発して同性を虜にすることができる。

「頼むから異性を魅了してくれ！ 残念過ぎる！」

特技>アンリミテッド<。

発動することで限界突破の力を得られる。ボルトよりも速く走れるし、ブブカよりも棒なしで高く飛べる。

「おおーっ、この能力使えるな」

\*ただし使用する度に正気度が下がる。

「いきなり使えなくなったーっ！」

叫ばずにはいられなかった。

「静かに選べないのか？」と神に怒られる。

「………すみません」

「反省すればそれでいい。あと悩むのは一向に構わないが、どんな能力を選んだかは記憶に残らないからな。才能を無駄にする可能性は『グランシエル』も『人生』も一緒だ」

確かに趣味や目指したものが才能と一致する確率は天文学的な数値だろう。

それにしても前回の俺はなぜ『人生』なんて過酷な世界を選択したのだろう？ ほかに楽しめそうな世界なんていくらでもある。もし回答を得られる機会があるというのなら、それはそれで大きな変

化の一つになるのかもしれないな。

さてと閑話休題。

俺には大学進学を機に同棲を始めた、高校二年から丸三年付き合っている彼女がいた。しかし順風満帆に進んでいた日々は唐突に終止符を打たれる。事件はあの日、俺が冷蔵庫の中にある焼きプリンを食べたことで発生した。

深い闇の中で目を覚ました。

「……………」

ぼんやりと意識が回復した後頭部に痛みを覚え始める。患部に触れようとしても腕が妙な位置に固定されていて動かせない。どういう状況に陥っているのかも理解できないまま時間だけが過ぎていく。周囲は真っ暗で目が慣れても視界は黒から変化しない。しかし置かれていた環境は少しずつ解けてきた。まず俺の身体は四本足の椅子に着席させられた状態で縛られている。両足は左右それぞれ椅子の足と結ばれていて、両腕は背凭れの側面に沿うように固定されていた。

どれくらい経ったのだろう。

室内に光が照らされて明るくなった。特に眩しかったわけでもないのだが、反射的に顔を逸らして瞳を閉じてしまう。そんな俺を嘲笑うかのように声が降り注がれた。

「あらあら、こんなところで一体なにをしているのかしら？」

「正直なところ俺自身が一番よくわかっていない」

俺は声の主になまなま感想を返した。木製の椅子に身体を固定されているので、いつものように肩をすくめることさえできない。俺を監禁した犯人は長い黒髪がよく似合う美少女だった。

「そろそろ俺の置かれている状況を説明してくれないか？」

「そうね」

言いながら身動きの取れない俺の姿を楽しむように声の主はゆっくりと周辺を巡回する。こういう弱者を虐げる状況を楽しめる奴の思考もよくわからなくて怖いのだが、どちらかと言えばそういう演出が似合い過ぎていることにより強い恐怖を覚えてしまう。露骨に胸を強調した服装に身を包んだ美少女は妖艶な笑みを浮かべた。

ちなみにこの美少女 桐原彩奈は俺の彼女である。

「ぐわっはっは、私は闇の世界から刺客として送り込まれた暗殺者だったのよ」

「そんなご都合主義が許されてたまるか！ というか完全に棒読みじゃねえか！ せめて騙してやるうという意気込みくらい見せたらどうなんだよ！」

「あああら、身体を自由を奪われても突っ込みの自由は許されるというわけね」

そんな台詞を紡ぎながら彩奈は俺の背後に立った。もういろんな意味で嫌な予感しかしない。妙な沈黙が不安を煽り立てていく。捕虜の精神状態というのはこういう感じなのだろうか？

「えい」

それはとても可愛らしい声音だった。しかし背中を強く押された俺は抵抗することもできず床に顔を強打する。しかも椅子に固定されているので、その後も額と両膝で身体を支えるという格好だ。なんとか身体を横に倒して話のできる体勢に持っていく。

「……説明もしてくれないのかよ？」

「それは強制膝枕マシンよ」というどうでもいい説明をされた。  
「強制という言葉の所為で膝枕という魅力的な単語がまるで活かされてないぞ！あと木製の椅子にマシンとか機械的な呼び名を付けるな！」  
「そんなことはどうでもいいのよ」

すべてを否定する発言を済ませてから、彩奈は床に転がる俺の頭を持ち上げて膝の上へ導いた。本当に強制膝枕マシンだったらしい。ともあれ飴と鞭を使い分けられている今の状況が本気で意味不明だ。

「意味がわからないという顔をしているわね」

「そりゃそうだろ！この状況を理解できる奴は存在しない！」

喚く俺の頭を撫でながら黒髪の美少女は言葉を紡いでいく。

「冷蔵庫の中で私の帰りを心待ちにしていた焼きプリンを食べたでしょう？」

俺は記憶の引き出しを無我夢中で開け捲くる。

「……確かに食べた。それで俺を拉致監禁したのか？」

「食べ物への恨みは怖いって言葉知ってるかしら？」

「まあな」

そして今現在、激しく体験している。

「二時間も並んで購入した焼きプリンを食べられた私の気持ちがあるか？家に帰るのが楽しみで楽しみで柄にもなくマンションの管

理人さんに『こんばんわ』とか挨拶しちゃったのよ」  
「……………」

返す言葉もない。というか挨拶は普通にしようよ。

「ともかく今度は俺が並んで買ってくるよ。それを彩奈が食べるってことでどうだろう？」

「それは駄目よ。だって蓮に次なんてないんだもの」  
「次がない？」

俺は意図がわからず言葉を繰り返した。一体どういうことだろう？

「文字通りの意味よ」

言いながら黒髪の美少女は椅子ごと俺の身体を起こした。癒しの時間が終了したのかもしれないし、単純に膝枕が疲れただけなのかもしれない。ともかく俺は椅子に着席して拘束されているという初期の状態に戻った。

「蓮を殺して私も死ぬわ」

「いや…………あの…………彩奈さん？」

俺が彩奈の名を呼んだのは発言に文句があつたからではない。なにを思ったのか黒髪の美少女は固定された俺の膝の上に跨ってきたのである。つまり俺の眼前には見事に実った禁断の果実が二つあつた。

「なにかしら？」

結構な金額が発生する大人の店でしか行われていないような過激

な体勢をしているくせに、彩奈は澄ました表情を崩さないまま俺の肩を掴んで身体を後ろへ反らした。

「この体勢は……どうにかならないのか？」

いろんな意味で正常な判断が下せなくなる。しかし黒髪の美少女は気にする様子もなく告げた。ある意味でこいつはとんでもない大物なのかもしれないな。

「最期くらいデレておくべきでしょう？」

「いや、これはもうデレじゃなくてエロだ！」

「デレを一足飛びしてエロということでもいいじゃない？ どうせ蓮の最終目的は『ピーッ！』を『ピーッ！』して『ピーッ！』したいだけでしょう？」

酷い放送禁止用語の連続だった。

「結果より過程が大事なんだよ！」

「その過程が長々と牛歩展開になったら怒るくせに身勝手だわ」

鋭い指摘だった。だがそれがいい にも限度はあるからな。

「……そうですね」

白旗宣言。これはもう勝てる気がしない。所詮俺なんて単なる童貞野郎ですよ。

「俺を殺すのはともかく、彩奈まで死ぬ必要はないんじゃないか？」  
「なにを言っているの？ 蓮のいない世界に未練なんてないわ」

視線を合わせた彩奈の瞳に曇りはない。本当に嬉しいことを言うてくれる。しかしそれならどうして俺の殺す必要があるんだろうね。

「なんか矛盾してないか？」

「そうかも」

随分と気楽な口調が返ってくる。だから俺は説得を試みることにした。

「俺と違って彩奈は両親や親戚がいるんだから、突発的な行動を起こして迷惑をかけないようにしろよ」

「蓮」

俺の名前を呼んでから彩奈は悪戯な笑みを浮かべる。

「こういう常軌を逸した状況で、そういう常識的な発言は非常識だわ」

「……………」

「でもまあ、非常識な提案をしているのは私だから謝る必要なんてないわね」

確かにな。

「それにしても　蓮は死が怖くないの？」

明らかに黒髪少女の声色が変化していた。真剣な質問なのだろう。だから俺は正直な気持ちを吐露しておく。

「桐原彩奈が惚れた神崎蓮は　　こういうとき見苦しく命乞いする男じゃないだろ？」

「なにそれ……超格好いい」

そんな恋する乙女みたい瞳で俺を見るな！ 恥ずかしいだろーが！

「あのさ、自殺とか殺害の方法は考えてあるのか？」

「睡眠導入剤を使って、それから致死量の薬を飲むわ」

即答だった。どうやら準備万端の本気らしい。

「しかしあれだな。焼きプリン一つで殺されるなんて攻略不可能も  
いいところだ」

「あら、その認識は間違っているわ。私は焼きプリンさえ横取りし  
なければ簡単に攻略できるキャラよ。たった一つしか存在しないバ  
ッドエンドのフラグを立てるなんて驚きね」

本当に口の減らない女だった。俺を貶めるためなら自らの価値さ  
え下げるんだよな。

「少し時間を頂戴」

そう言い残すと彩奈は俺の膝上から下りた。そして不敵な笑みを  
浮かべながら隣の部屋へと歩いていく。あーもう今さら感が半端な  
くて切り出し難いのだが、このマンションとは明らかに異なる監禁  
場所は一体どこなんだろーうね？ しばらくして戻ってくると、どう  
いうわけか手に角材が握られていた。

「準備完了よ」

宣言しながら黒髪の美少女は豪快な素振りを披露した。なんか甲  
子園とか普通に連れていってくれそうな雰囲気がある。

「いや、あの、彩奈さん？」  
「なにかしら？」と再び素振りをする彩奈。  
「睡眠導入剤はどこですか？」  
「失礼。睡眠導入材の間違いだったわ」

したり顔の彩奈だった。俺としては全力で突っ込むしかない。

「上手いこと言った感じになってんじゃないやねえよ！ 単に角材で俺を殴り殺すだけじゃないか！ 違うっていうならなにか反論してみろよー！」  
「まあ、それについては否定しないわ」  
「否定しろよ！」

再び突っ込む俺に対して黒髪の美少女は優しく微笑む。

「好き好き大好き超愛してるという気持ちの裏返しで、ついつい他者に対してどれだけ辛く当たれるかを蓮で試してしまうのよ」  
「違う！ 他者に対して辛く当たるための免罪符として好き好き大好き超愛してるとか言ってるだけだ！」  
「……………」と沈黙する彩奈さん。  
「だから否定しろよ！」  
「生まれ変わったら健気な性格になっちゃってたりして？」  
「うーん、それはそれでつまらないかもしれないな」

退屈で堪らなかつた毎日から俺を救ってくれたのが彩奈だからな。

「私の身勝手に付き合わせてごめんなさいね」

ぼそりと消え入りそうな声が聞こえる。それから彩奈は「もし文

芸部の女子高生がスラッガーになったら」とか言い放ちながら俺の後頭部を角材で振り抜いた。それって単純に野球部の男子が自己嫌悪に陥るだけだと無我の極致で突っ込みを入れておく。

こうして俺は人生に幕を閉じた。彼女がこの世界において「未来視」という能力を有していたと知るのはもっともっと先の話である。

しかしなんとというか事故死や病死に比べてれば、愛する人に撲殺された俺は幸せなのかもしれないな。いや、そう考えてしまう時点で根本的な部分が間違っているのだろう。それでもまあ、幸せの形なんて人それぞれということでは理解願いたい。

私が最も怖れるのは汚れなき善意である。

善意によつて引き起こされた不幸な結末ほど手に負えないものはない。

ルオニト・マギ「ある晴れた日のこと」 鳳凰曆七 二年

かくして新たな生命を授かった俺は、母親から一方的な別れを宣告されて橋の下に捨てられた。本来なら覚えているはずのない出来事だが、どうやら俺は『人生』の記憶を引き継いだまま『グランシエル』に転生したらしい。あの適当そうな神なら記憶消去を忘れるとか普通にありそうだから気にもしなかった。

アラバスタ共和国の孤児院に拾われた俺は、成長の過程で言語と国独特の習慣などを覚えていく。このとき『人生』の記憶が役立つこともあれば、また逆に『人生』の記憶が邪魔になることもあった。もつと端的に表現すれば『人生』の経験則を払拭できなかったのである。

例えば思考の過程だ。

おそらく俺は『グランシエル脳』ではなく『人生脳』で物事を考えている。だからと言って特段困ることはないのだが、やはり本能的な反応に違いが生じている可能性は高い。左利きの人が右手を使えるように矯正しても、咄嗟の判断を求められたとき左手が出るような感覚に近いだろう。

孤児院には人族と猫耳と尻尾を生やした獣人族の保育士が数名いて、人族と猫系獣人族の孤児が分け隔てなく育てられていた。魔術の才能を有していなかった俺は、持ち前の知能を最大限に活かしてかなり早い段階から魔導工学の勉強を始める。そもそもアラバスタ共和国は工業の盛んな国で、魔導工学の研究でも人族を中心に他国を圧倒し、天駆ける魔導船「飛空艇」の開発にも成功していた。

中等科を無難に卒業した頃には、アラバスタ共和国の基本的な仕組みを理解していた。人生の記憶がなければ新鮮だったかもしれないが、選んだ種族が人ということもあって、年を重ねることに大きな興味は感じられなかった。違いにしても科学が魔術あるいは魔導力に置き換えられていることくらいだろう。しかしそれも驚愕するような衝撃は受けなかった。飛行機が科学で空を飛ぶのに対して飛空艇は魔導力で空を飛ぶということだけのことである。

そして魔王アーシエスと契約を結んだ俺は、十七の誕生日を迎えるまでの半年間、ハシユシユを伴い賞金を稼ぐ旅に出ることになった。この理由については後述するとして、今現在、俺は孤児院の広間で師匠待ちをしている。部屋の隅に簡素な長椅子が二つ設置されているだけで、だだっ広い空間では保育士が孤児たちと戯れていた。

「うーん、最初は情報収集を行ったほうがいいんじゃないかじゃ？」

幼馴染みである猫系獣人族の少女　ミーシャは尻尾を器用に使って林檎を頬張る。襟首辺りで切り揃えられた髪が焦げ茶色のため、帽子や衣服で猫耳と尻尾を隠せば人族に見えなくもない。手癖が悪く幼少期は俺もよく食べ物を盗まれたものだ。しかし犯行の証拠を突きつけると「にやうにやう」と口籠もり、すぐに「ごめんなさいにやー」と謝る可愛らしさも持ち合わせている。この愚直さが人族と共存できている理由かもしれない。それにしても大事な部分

だけ隠しているという格好なので、ついつい発育のいい胸元に視線が向かったしまうのは男の性だろう。

「にゃにゃ、なにか間違ったこと言っただかにゃ？」

びくびくと可愛らしい耳を揺らしながら、ミーシャは無言の俺に困惑している様子だった。人族に比べて頭が弱い自覚があるらしく、こちらが怪訝そうな表情を浮かべると過剰な反応が返ってくる。ちなみに十七の誕生日を迎えて旅立つとき、まずはなにをすべきかという話題だったので、猫耳少女の発言は最も理に適った行動と言えるだろう。

「いや、そんなことはないよ。俺もそうするつもりだったからさ」

「だったらにゃんで黙るんにゃ？」

ミーシャは不機嫌そうに頬を膨らませる。いや、頬が膨らんでいるのは林檎を頬張っているからだだった。とりあえず軽口でも返しておこう。

「ミーシャの胸の膨らみが素敵だから見とれてただけだよ」

「にゃっはっは、ロンは褒め上手だにゃ！」

けらけらと笑い始める猫耳少女。こういう単純な思考は心を和ませられる。アーシエスに似た台詞を言えば路傍に捨てられた塵を見るような蔑みの視線が返ってきたことだろう。

「そういやハシユシユさんはまだ来ないのかにゃ？」

「旅の準備と魔弾の調達中。俺より各店に顔が利くからね」

「待たせたにゃん」

声に釣られて孤児院の入り口へ視線を移すと、黒と紫を基調としたアラバスタ共和国制式礼服を身に纏った師匠の姿があった。政府に所属する魔銃士として必然の格好なのだろう。しかし正装の礼服は上だけで、下は膝上まで伸びた戦闘用長靴を履いているだけだった。つまり横に編み上げの入った戦闘用長靴に覆われていない太股は完全に露出されている。これはもう普段の全裸に近い格好より逆に艶かしい。

「こつちがロンの魔弾にゃ」

そう言っただけでハシユシユは革袋から取り出した木箱を放り投げた。魅惑の絶対領域に意識を奪われていた俺は慌しく投擲物を受け取り中を確認した。魔導力によって質量を圧縮された第三式以下の魔弾倉が理路整然と詰められている。各属性ごとに百四十四発×三あるので偏った使い方をしない限り半年は十分に持つだろう。

「さすがに第四式以上の魔弾は確保できなかったにゃ」

「半年分の大口徑魔弾を用意できるなんて各国の軍隊くらいですよ」  
「まあ、そんなんだけどにゃ」

鼻先を掻きながら師匠は申し訳なさそうな表情を浮かべる。正式な格好をしていると猫耳が生えていても知的に見えるから不思議だ。ちなみに俺は魔導工学技師が使う帯革に大量の物が収納できる作業着を戦闘用に改良したものを着用している。具体的には防弾防爆仕様で、闇属性の黒に統一した一張羅だ。

「準備完了なら出発するにゃ」

そう促す師匠の視線が俺の右手の甲に向けられた。そこにはアーシエスとの契約によって生み出された闇の紋様が刻み込まれている。

魔銃士を引退したハシユシユが急遽半年間の武者修行を提案してくれたのは、微塵の疑いようもなくこれに起因していて、潜在能力を到達者級まで引き出せるようになった俺を心配してくれているのだ。

曰く「無自覚に実力以上の性能を発揮していたら身体も精神も崩壊するにや」である。つまり今回の旅で習得すべきは魔銃士としての立ち回り方と潜在能力の制御だ。

「いつてらっしやいにゃん」

歩き出した俺をミーシャは手を振りながら送り出してくれる。俺と師匠は右手を軽く掲げて旅立ちの挨拶に代えた。この国では「行ってくる」が「もう戻らない」と同義になるため、故郷を捨てる状況にでも陥らない限り見送られる側は言葉を発しない。

孤児院を出て二人きりになるとハシユシユは深い溜め息を吐いた。

「常闇の魔女との因果は知らにゃいけど、あんな口車に乗るにゃんてロンは馬鹿にゃ」

「俺は力がほしかったわけじゃないですよ」

「じゃあ、なにが目的にゃ？」

白に近い黄色の前髪の下から鋭い眼光が返ってくる。本当に魔銃士としての師匠は凜々しい。だからこそ俺も本音を吐露してしまう。

「大人しく俺に守られるような奴じゃないですけど、あいつの背中をほかの誰かに守られるのは嫌なんですよ。いや、違いますね。艶やかな黒髪も形のいい大きな胸も柔らかそうな太股も俺以外の誰かに舐めさせたくないんです！」

「ただの変態にゃー！」

「師匠、それは誤解です！ 誰彼構わず舐め回したいという奴は変態ですが、たった一人の異性を追い求める行為は純粋な愛です」  
「……とりあえずロンは人前で愛を語らにゃいほうがいいにゃ」

空気が深い哀しみに包まれた五分後。

「本当に命を賭ける価値があるによか？」

「ええ、もちろん」

こうして半年間に渡る武者修行の旅が幕を開けた。その後には繰り広げられる苛烈な冒険に比べれば、おそらく安全の保障された前哨戦に過ぎないのだろうが、それでも俺にとって今後を担う重要な期間になったことは言うまでもない。

「こいつら無限増殖してるんじゃないですか！」

荒々しく聳え立つ山岳地帯の一角。空を舞う魔物にとって、これほど巢作りに適した場所はないだろう。背後に断崖絶壁を控えた横穴で、俺は二挺の魔弾銃を構えながら愚痴を零した。

「知らないにや！ ロンが近場で最高額の魔物を狩るとか言い出すから悪いんにやる！」

短機魔弾銃を構えたハシユシユが正論を返してくる。半年間に渡る武者修行の総仕上げとして、貿易組合キルトが高額賞金をかけている魔物退治を引き受けたのだが、予想を遥かに上回る飛蛇竜ワイアームの数に辟易としていた。

飛蛇竜。

竜の顔に蝙蝠のような翼を持ち、足がないのが特徴的な魔物である。翼を広げた状態でも三メートル、本体は一メートル五十センチ程度しかない。そのため脅威は本家の竜族に遠く及ばないが、徒党を組まれると思いのほか厄介な連中だった。

「来るにや！」「来ますよ！」

俺と師匠の声が綺麗に重なる。次の瞬間 滞空していた飛蛇竜の一匹がハシユシユに襲撃。それを機に複数の飛蛇竜が俺に向かって攻撃を仕掛けてきた。

「こうなったら経費削減とか言ってる場合じゃにやいにや！」

吼えるが早い。師匠は前方回転で飛蛇竜の攻撃を回避。円弧の終わりに第一式の魔弾が込められた弾倉を第三式用と取り替える。俺は二挺の魔弾銃で突っ込んでくる飛蛇竜を乱れ撃ち。発動した氷の刃が魔物の頭部や胴体を貫き絶命させていく。準備を終えたハシユシユは氷属性の第三式魔弾を短機魔弾銃で乱射。けたたましい銃声が横穴に鳴り響く。加えて大量に排出された空薬莢が硬質な足場に落下して甲高い金属音を奏でる。そこへ飛蛇竜の断末魔が重なり狂想曲を演出した。

しかし弾幕を逃れた飛蛇竜の鋭い牙が師匠の左腕を引き千切る。ハシユシユは短機魔弾銃を落として声にならない悲鳴を上げた。反射的に俺は回転式弾倉シリンダーを回して氷属性から闇属性の魔弾へ変更。それから回転式魔弾銃を連続発砲することで、先行展開する闇術式に氷属性の魔弾が絡み魔術反応を引き起こす。液化した空気から不純物を取り除き酸素と窒素に強制分離。練成された氷点下百九十六度の液体窒素が飛蛇竜と師匠の左腕を凍結させる。

次いで俺は背中に担いだ強襲用狙撃魔弾銃アサルトライターを手に取り光属性第五式魔弾を装填。氷結させた師匠の左腕を飛蛇竜から切り離してハシユシユへ駆け寄る。即座に魔弾を射出して第五式回復系魔術を発動。傷口部分の血液が泡立ち始めたところで切断された左腕を合わせる。新たに形成された骨、血管、筋繊維、神経組織が自然と結合していく。

「ギャース！」

奥からぞくぞくと現れた飛蛇竜が雄叫びを上げた。しかも数が把握できないほどの共鳴が起こる。このまま無益な消耗戦が長引けば、こちらが先に力尽きるかもしれない。ここへ到達するまでにも随分

と魔弾を消費しているし、なにより致命傷を治癒できるほどの高位回復魔弾は数が限られているからだ。

「糞っ垂れが！ 本当に際限がないな」

そう吐き捨ててから俺は回転式魔弾銃の引き金を絞る。氷の刃に身体を貫かれた飛蛇竜は断末魔を上げて地面に落下。しかし一匹倒したところで連中の波状攻撃は止まらない。巣を荒らす侵入者の排除に躍起になっているからだ。

「ギヤーツ！」

正面から突っ込んでくる飛蛇竜を撃ち落としながら、俺は身体を反転させて背後から襲ってきたもう一匹に蹴りを入れる。その反動を利用し地面に倒れ込んで第三の攻撃を回避した。三回の横転中に回転式魔弾銃の空薬莖を排出。一括装填。素早く起き上がり低空飛行で距離を詰めてきた飛蛇竜の牙を跳躍で避ける。

「どつやら少し知恵が回るらしい」

俺は誰にでもなく独りごちた。重力に従い落下するところへ三方向から狙いを定めてきた飛蛇竜が襲いかかってくる。一匹に的を絞った俺は対峙する標的へ発砲。残った二匹に右足と左横腹を食い干切られる。本来なら致命傷だが、もちろんそうはならない。負傷した俺の身体は黒煙を発しながら霧散していく。あとに残されたのは閻属性魔弾の空薬莖。俺は悠然と飛翔する飛蛇竜を後頭部から撃ち抜いた。

「経費削減は諦めると言っただろう？」

怒濤の波状攻撃が収まり横穴に静謐が漂う。闇雲に突っ込むだけでは勝てないと防衛本能が悟ったのかもしれない。とはいえ見逃してくれるつもりはないようだった。俺を遠巻きに取り囲んで退路を塞いでいる。

「師匠、まだ動けませんか？」

「いや、もう完治してるにや」

「それじゃあ、契約書の処理をお願いします」

俺は短機魔弾銃を手に取り立ち上がる師匠へ告げた。

「ロンはなにをするつもりにや？」

「もちろん飛蛇竜の殲滅ですよ」

言い残して俺は横穴の最深部を目指して駆けた。風属性の魔弾を逆方向へ射出して加速。途中で襲撃してきた飛蛇竜はすべて無視を決め込む。行き止まりまで到達した俺は風属性魔弾を斜め前方へ撃ち込んで急制動。最深部に控えた飛蛇竜の群れと追跡してきた連中を合わせれば六十数匹が残っている。俺は迷うことなく第六式魔榴弾を選択して投擲。

直後に瞳を閉じて光属性の魔弾を真上へ発砲。閃光系術式が展開して薄暗い横穴に太陽光が誕生する。俺は薄目を開けて強襲用狙撃銃に跨るような格好で跳躍。身体を中空に浮かせた状態で引き金を絞り風属性の第五式魔術を発動させる。

まるで撃ち出された弾丸のような飛行体験。数瞬で視界が開ける。俺は横穴の入り口付近で交戦しているハシユシユの身体を抱えて一緒に中空へ舞う。

刹那　後方で落雷のような轟音が鳴り響いた。横穴崩壊の衝撃が大気を震わせる。俺と師匠は緩やかな放物線を描きながら下降。岩場に落ちると一巻の終わりなので高度と方角を風属性魔弾で調整しておく。一段落着いたところで俺は師匠に話しかけた。

「契約書は大丈夫ですか？」

「問題にゃい」

言いながらハッシュシユは魔術組成式の施された契約書を手渡ししてくる。予断の許さない空中移動にも関わらず師匠は気だるそうに伸びをしていた。緊張感の無さに辟易するが、まあ、下手に取り乱されるより百倍いい。

俺は契約書に浮かび上がる刻印を確認して安堵した。これは羊皮紙に依頼内容が記述されたもので、討伐対象の血液を滴らせることで魔術が発動。対象固体の絶命または集団の崩壊を認識すると刻印が浮かぶ仕組みになっている。

「やりましたね」

「まあ、にゃんとかにゃ。しかしもう私の出番はにゃいにゃあ」

少し残念そうな表情でハッシュシユはこちらを見やる。気恥ずかしさもあって俺は荘厳な自然が広がる眼下へ視線を移した。過酷な環境だからこそその幻想的な美しさである。その光景とは異なる俗物的な話題が師匠の口から紡がれた。

「本当に賞金を独占していいによか？」

「もちろん。旅の軍資金だけでもらうとして、あとは師匠が好きに使ってください」

「こついう場合、拒否するのは失礼にゃんだらうにゃあ」

にやうにやう言いながらハシユシユは髪を掻き乱した。この半年間を通じても残念可愛いところはまるで変わっていない。どうやら決心が着いたらしく話を再開する。

「旅立ちの必需品は私が揃えてやるにや。それで余った額は好きに使わせてもらうにやよ」

「最後まで恩に着ます」

落下地点に最適そうな川を視界に捉えたので、俺は師匠に視線で合図を送り着水の了承を得た。明日の誕生日を迎えれば本格的な一人旅が始まる。アーシエスへの想いを馳せながら俺は眼前に迫る水面へ飛び込んだ。

クオン大陸の中央に位置する魔導都市フォルガント。

神聖イージス王国、アラバスタ共和国、アルマダ連邦の三国が公的に認めている独立都市だ。各国の中継点として人が集まるため、各地の特産品や文化が入り乱れている。本国には他種族を嫌悪する風潮が少なからず残っているが、祖国からこの魔導都市へ移り住んできた連中に差別意識はない。むしろ積極的に他種族と交流して異なる文化を楽しもうとしている。もちろん遊び方面だけではなく、各国の技術力や経済情報を得ることも然りだ。

今にも陽が落ちそうな夕刻。

大通りに面した三国公認の換金所には、取引時間の終了間際ということもあって、多くの賞金稼ぎが最新情報を映し出す大画面魔導映像に注目していた。この時間帯の常識とも呼べる光景なのだが、こと換金所の休日前に限ると、飢えた狼たちが羊の群れを探しているようにしか見えない。

「相変わらずですね」

「まあ、ここはあたしが現役の頃から変わってにやいからにや」

ハシユシユは露店で購入したばかりの林檎を齧る。大画面魔導映像は全方位に表示されているので、換金所の大広間を抜ける途中、意図しなくても最新情報が瞳と耳に飛び込んでくる。賞金稼ぎの需要に対して賞金首の供給が少ないわけではない。むしろ賞金をかけられるような強い魔物や悪党がのさばっている世界だ。

「おうおう、魔導映像前は弱者の掃き溜めだな。手頃な賞金首が現れないかと必死の形相で探していやがる。そんなことに時間を費やすくらいなら、己の力を磨いて大物を倒せる技量を身につけたほうが賢明だろ」

わざと聞こえるような大声で人族の青年が皮肉る。その言い分はもつともであるが、努力すれば誰もが優秀な賞金稼ぎになれるわけではない。その点で語を引き継いだエルフ族の青年は冷静だった。

「分相應を弁えているだけ利口じゃないか？ 実力の伴わない自信家ほど早死にする世界だからな」

格好から推測すると大剣を背負った人族が魔術剣士、それらしい得物を持っていないエルフ族が魔術士といったところだろう。大広間の一角に設置された休憩所で祝杯を傾けている。あるいは気付けの一杯かもしれないが、それにしても少しばかり量が多いだろう。

「さつさと換金を済ませにやいと飛空艇の出港時間に間に合わなきゃよ」

師匠に促されて俺は二人の青年から視線を外した。それからハシユシユの背中を追いかけて奥へ進む。大量の現金を保管しているわけではないのだが、重要な情報を管理しているためか、奥へ向かうほど警備が厳重になっている。

「やあオルガン、久しぶりだにやあ」

「おお、ハツシユじゃないか！」

巨体に威めしい顔を乗せた熊系獣人族の中年男がハシユシユの姿を見るなり嬉しそうに微笑む。豪快な笑い方が似合いそうなのに、

どういうわけか控えにしか笑わない。

オルガン・ベルベット。

元格闘士で現在は換金所の所長を勤めている熊系獣人族の中年男だ。俺とも初対面ではなく、一ヶ月前にここで顔合わせしている。

「なにか収穫でもあったのか？」

「ヨランオラン山脈に根城を張っていた飛蛇竜ワイアームにやよ」

「ヨランオラン山脈の飛蛇竜と言えば、半年くらい前、イージス王国の騎士団一個小隊が討伐に出向いた奴らか？」

伝えられた情報に俺は驚きを隠せない。それはつまり 騎士団一個小隊の全滅を意味しているからだ。己の生命より誇りを大切に  
するエルフ族の騎士に敗退の二文字は存在しない。

「手強い連中だったにや」

オルガンの質問にハシユシユは肯定の動作。それを聞いた所長が苦笑する。

「……冗談で紹介したんだがな」

「まあ、にゃんとかにやると判断したから乗り込んだんにや」

師匠と所長は雑談を交わしながら移動を始める。向かう先は高額賞金首専用の窓口だった。自動昇降機で地下一階に降りると魔導映像前からは想像もできない静寂に包まれる。薄暗くコンクリート壁が剥き出しにされた内装は、さながら廃屋か地下駐車場のようで、美観もなにもあったものではなかった。先客がいる様子もないので、俺と師匠はそのまま受付へ向かう。

「気が早いな。ちょっとは俺の話相手になつてくれよ」

「長居させたいのにやら、大理石で地面を舗装したらどうにゃ？」

「無茶を言うな。滅多に人が来ない場所に金をかけるなんて愚の骨頂だぜ」

他愛ない世間話をしているうちに専用窓口へ到着。

「いらつしゃいませ、本日のご用件はなんでしょうか？」

換金所指定の制服に身を包んだ女性　いや、女の子と称すべき年齢の少女が俺たちを出迎えた。オルガンの姿を確認すると、少女は「あ」と口を開き慌てて一礼する。

「知っている顔を見つけたただけだ。普段通りに対応してくれて構わない」

「あ、はい。わかりました」

「それじゃあ早速」

所長の相手をハシユシユに任せて、俺は刻印の浮かんだ契約書を窓口で提出した。少女は受け取った契約書を専用の魔導具で読み込む。やがて必要な情報が端末画面に表示されたのだろう。

「ハシユシユ・ミラケツタ様とロン・ラズエル様ですね。ただいま共同名義の口座に　」

送金を完了致しました。

そう繋がるはずの言葉が途中で止まる。おそらく『【生息地・ヨランオラン山脈】【種族・飛蛇竜】【一団の名称・バジル】【賞金額・三億ダラス】【処理済案件】』と表示された画面に驚愕したのだろう。なぜなら三億ダラスは普通の勤め人が生涯に稼ぐ金額を凌

駕しているからだ。

「なにか問題でも？」

「あ、いえ、すいません。ただいま共同名義の口座に送金を完了致しました。またのご利用をお待ちしています」

慌てながらも少女は飛び切りの営業用愛想笑いを顔に貼り付けて一礼する。俺が手続き完了を告げると、ハシュシュはオルガンの話を制して歩き始めた。所長は寂しげな表情を浮かべて師匠との別れを惜しむ。俺は「時間があるときに三人で飲みましょう」「みたいな社交辞令を返しておく。こういう年齢に相応しくない行動も『人生』の記憶が残っている悪影響だろう。」

あと本当にどうでもいい話だが、ハシュシュは野生的な異性に死ぬほど人気が高い。

夜の空に浮かぶ豪華な飛空艇。

魔導船内は複数の層で構成されていて、後部は主に各種店舗や居住区、前部は音楽隊が美しい音色を奏で酒が振舞われる社交場だった。その一角にある卓へ着いて、俺と師匠は酒杯を重ねる。アラバスタ共和国の首都シルビアまで約十二時間に及ぶ長旅だ。

「誕生日にアラバスタへ凱旋帰国、翌日また旅に出るにやんて正気の沙汰じゃにやいにや」

麦酒を飲みながらハシュシュは焼き林檎を齧る。俺は苦笑いを浮かべながら仔牛肉の包み焼きに箸を伸ばした。卓の上には南海秋刀

魚の塩焼き、野兔の網焼き、人参と芋と糸蒟蒻の煮物、アルマダ風茸鍋、野菜の盛り合わせなど多品種が並んでいる。それらを食べる道具も「箸・匙・肉叉」と揃っていた。平和な世界とは呼び難いのだが、グランシエルの食文化は随分と栄えている。

「ただ祭典に間に合えばいいというわけではありませんからね」  
「まあ、そりゃそうにゃんだろうけどさ」

穏やかな旋律と美味い食事が時間の流れを緩やかにする。

食事を進めながら半年間の成功談や失敗談に花を咲かせた。

これが最後とわかっているからこそ、どうでもいいような話ばかりしてしまう。

赤茶色の髪に猫耳を生やした女客室乗務員が追加の麦酒と葡萄酒を運んでくる。妖艶な色香を漂わせた妙齡の美女なのだが、俺の場合、その美貌を素直に楽しむことができない。これも『人生』の影響なのか猫耳と尻尾に変な先入観があつて、ちゃんとされればされるほど可笑しくなってしまうのである。

「じゅっくり」

女客室乗務員は一礼して隣の卓へ移動した。その直後に可愛らしい子供の声上がる。

「注文してないのに牛乳ミルクを出すなーっ！」

声に釣られて振り向くと牛乳を差し出された女の子が女客室乗務員に反抗的な態度を見せていた。幼児体型というより幼稚園児にしか見えない容姿をしている。しかし本当の子供ではなく、アルマダ連邦に多い妖精族だ。

「あら失礼。ご注文は？」

「……牛乳で」

「頼むのかよ！」

思わず突っ込んでしまった俺を一体誰が責められよう。

「私のことも構ってくださいよお」

金髪を二つ括りにした妖精族の幼女は俺の服を引っ張りながら要求を口にする。俺の突っ込みの速さに感動したらしく、よくわからないままに随分と懐かれてしまった。食後に甲板で夜景を楽しむという予定は滞りなく実行されているわけだが、思わぬ連れができてしまったことは素直に喜べる状況ではない。

フィリア・ハートレット。

見た目の可愛らしさとは裏腹にアルマダ連邦の高官である。今回の訪問もアラバスタ共和国からの正式な要請で、魔導工学の実験に必要な膨大な魔力供給のためらしい。

「これをやるから少し大人しくしてくれ」

俺は溶けると味が変わる飴玉を革袋から取り出した。こつこつ細工菓子にもアラバスタの技術力の高さが活かされていて、他国へ持ち込むと本国で売られている三倍の価格でも簡単に捌ける。もっとも商売になるとなれば話は別で、大量の物資を遠方へ運ぶ手間や費用を計算しなければならぬ。高く売れても利益が生まれなければ商売は成り立たない。

「味が林檎から蜜柑に変わりました!」

フィリアは嬉々とした表情を浮かべる。どうやら子供や女性が甘い食べ物に目がないのは万国共通らしい。ちなみに手順前後で申し訳ないのだが、傍らで飴玉を舐めている幼女は俺が突っ込みを入れ

た人物ではない。意味がわからないかもしれないが、これは単純な話、幼女には二卵性双生児の姉がいるのだ。

俺に突っ込まれたのが姉　　フィリス・ハートレット。

俺に懐いてしまったのが妹　　フィリア・ハートレット。

つまり双子の姉妹。

そして俺は姉フィリスの怒りが鎮静するまで甲板へ追放されたのだ。ハシユシユが「私に任せるにやよ。酔わせて眠らせればこっちのものにや」と駄目男が言いそうな台詞で送り出してくれただけに不安が残る。

夜の空を飛空艇はアラバスタへ向けて順調に進んでいく。飛行には甲板の左右に設置された特殊な回転翼による揚力と魔導機関で生み出した推力が利用されている。開発者である魔導工学博士はまだ現役らしいが、少なくとも祖国の工業地区で見かけたことはない。

「溶けてしまいました。ロンさん、もう一つ私にください」

フィリアは懇願しながら革袋に手を伸ばしてくる。許可が下りなければ強奪するつもりなのだろう。抜け目ないというか実に子供らしい行為だ。俺は右手で幼女の額を押さえ、距離を保つ。それから左手で飴玉を取り出して交渉の場を設けた。

「フィリスのご機嫌を直すにはどうしたらいい？」

「放っておけば勝手に直りますよ。それよりもっと私を甘やかしてください」

言いながらフィリアは短い腕を精一杯伸ばして革袋を盗み取ろうとする。姉が子供扱いされることを嫌うのに対して、妹は積極的に

子供扱いされたいらしい。なんか面倒臭い姉妹だな。

「それじゃあ、この一件が原因で魔力供給を取り止めるなんて事態は起こらないんだな？」

「国が決定した提携を私情で破棄するなんて不可能に決まってるじやありませんか？ そんな駄々をこねるのは子供くらいです」

だから不安なんだよという言葉をなんとか飲み込む。

嘆息を漏らしながら俺は諦めを知らない幼女の額から右手を離した。勢い余ったフィリアが俺の腹部に抉れるような体当たりを食らわせてくる。こちらにも責任があるので不問にしておこう。

「ともかく飴玉をやるから先に船内へ戻っておいてくれ」

「そうやって簡単に丸め込めると思ったら」

口の中に飴玉を放り込んでやると、幼女は「あ、葡萄味だ」と可愛らしく微笑む。機を逃さず俺はフィリアの小さな掌に飴玉を六つ並べる。

「フィリスと半分ずつだからな」

「はい」

小気味のいい返事をした幼女は、ととて歩きながら船内へ戻っていく。うーん、アルマダ連邦は大丈夫なのだろうか？ そんな思考を一瞬だけ巡らせてから、俺は甲板の端まで移動して壮大な光景が広がる眼下を眺めた。しかし飛空艇の放つ光量だけでは景色を楽しむまでに至らない。所々に建てられている監視塔の灯りが見えるくらいだった。

でもまあ、静寂を楽しむには丁度いいのかもしれない。

俺は瞳を閉じて壁に背中を預けた。心地のいい夜風が頬を撫でて吹き抜けていく。

どれくらい経ったのだろう。

「まだこんにゃとところにいたによか？ フィリスにやら随分前から夢の中にゃよ」

聞き慣れた声が耳に届く。俺は虚ろな意識を呼び戻して声の主へ視線を向けた。

「居眠りしてたによか？」

小脇に酒樽を抱えたハシュシュが小首を傾げる。追加注文が鬱陶しくて樽で渡されたのだろうか？ しかしそれよりも気になる存在が師匠の傍らに立つ美女だった。おそらく二度と目にすることはないだろうと諦めていた衣装を身に纏っている。赤黒い髪を後ろで束ねた妙齡の人族は深紅の生地に桜と市松が描かれた着物姿だった。厳密には異なる民族衣装なのだろうが、着物と酷似した懐かしい衣装に郷愁を感じてしまう。

「師匠の知り合いですか？」

「知り合ったばかりにゃけど知り合いには変わりにゃいかもしれにゃいにゃあ」

「我の名はティア・ノート・ソートによるん」

おそらく語尾はハシュシュの真似をしようとして失敗したのだろう。一人称が「我」で語尾が「によるん」とか許されるわけがない。二人とも適度に酔っているらしく、女同士で腕を絡ませて喜んでい

る。俺は服装を正してから自己紹介を返した。

「ロン・ラズエルです。その衣装はどこで入手されたんですか？」  
「にやんだ？ ロンは衣装に興味があるによか？」

「服に興味があるわけじゃないんですが、懐かしい気持ちになったので聞いてみたんです」

「歴史に詳しいにょろん？ 飲み比べの勝者を見届けてくれるなら  
私の知る滅んだ文明について聞かせてやろう」

着物姿の美女は師匠の頬に口付けするかのよう顔に顔を寄せた。これはこれで画的に悪くないのだが、今はティアの話を優先すべきだろう。俺は恭しく首肯して飲み比べに立ち会うことに同意した。

曰く三国が対立する現在の構図が出来上がる遙か昔。世界は点在する小国が覇権を争う戦乱の時代だった。その中に着物と酷似した民族衣装を身に纏う文明があったという。あのときグランシエルに関する資料を読み込んでいれば記載されていたのかもしれないが、消えると言われた記憶に細かな情報まで詰め込む意味を見出せなかったのは当然のことだろう。

飲み比べは二つ目の酒樽に突入していた。二人とも酒が回り呂律が怪しくなっているが、言動を見る限り倒れるにはまだ時間がかかりそうである。面白い話も聞けたので最後まで付き合うことに異論はない。

しかしそんな状況を一変する出来事が発生した。

鈍い音がして飛空艇が大きく揺れる。甲板に出ていた乗客は姿勢を崩して転倒。各所から悲鳴と動揺のざわめきが巻き上がった。すぐさま数名の客室乗務員が現れて乗客を船内へ誘導する。それと平

行して重々しい鎧を装着した熊系獣人族の大男を筆頭に船内から八名構成の部隊が姿を現した。

有事の際に備えて常駐している護衛団だ。飛空艇本体に魔導力を活かした砲台を設置する案もあつたが、しかしそれを実装することで他国に戦争の準備を進めていると疑われては協力を得られない。つまり飛空艇は乗り物であつて、決して兵器であつてはならないのだ。そんな経緯の末に生まれた案が護衛団の常駐である。

「偵察班は目標の捕捉を急げ！ 魔術班はまず飛空艇に防御結界を張れ！」

怒号に合わせて飛蛇竜ファイアムと大きさの変わらない飛竜ワイバーンに跨つた二名の青年が闇夜へ舞う。エルフ族の女魔術士二名は詠唱を開始して空中に黄緑色の魔術組成式を描き出した。ほどなくして風属性の防御結界バリエールが発動。大気で形成された防御壁が飛空艇を優しく包み込む。

「やれやれ」

初乗船でいきなり緊急事態に遭遇するとは、俺の運の悪さも相当なものかもしれないな。

そんなとき近くで酒杯の重なる音が響いた。

「こんにゃとところで好敵手に出会えるにゃんてあたしは幸運だにゃ」

「我と酒を酌み交わすことは大変な名誉によるん」

「あたしと飲み比べするのも名誉なことによるん」

「ならば我をもつと楽しませるによるん」

この状況で酒を飲んでいられる二人の神経が少しだけ羨ましかつ

た。

「お客様も早く船内へ避難してください！」

若い人族の客室乗務員が血相を変えて叫ぶ。俺は酔っ払い二人を船内へ運ぶ労力と甲板で守る労力を天秤にかけて居残りを選択した。

「問題ない。ここで護衛団の戦闘を見学するのも一興だ」

「しかし我々にはお客様の安全を」

俺は右手の甲を掲げて客室乗務員の言葉を制する。この半年間で知名度もかなり上昇して、今では「常闇の魔銃士カルナバル」という二つ名まであつた。もちろん常闇の魔女に魂を売り渡した糞野郎という意味が込められた蔑称である。しかし強さの証明には便利な代物で、今回も説得の時間短縮に一役買ってくれたわけだ。

「団長、揺れは巨大鳥ロックが船底を掠めたからのようです」

「ふむ。大きさは？」

「翼幅で二十メートル程度ですね」

船上へ舞い戻った偵察班の青年は飛竜クイバーンに騎乗したまま報告を済ませる。鎧姿の熊系獣人は一考してから指示を飛ばした。

「その規模の巨大鳥が飛空艇に襲いかかってくるとは考え難いな。なにかに追われていた可能性が高い。改めて周辺の警戒に当たってくれ」

「はっ！」

偵察班の青年は器用に手綱を揺らして飛竜を再飛翔させた。飛蛇クイア

竜と異なり飛竜は正しく接すれば心を通わせることができるが、主従関係あるいは友好関係を築くまで信頼を得るとなれば容易くない。最近では魔導船や飛空艇の護衛団に必ず含まれている偵察の専門家だ。

俺は甲板を見回して位置関係を確認する。

護衛団は飛空艇の全方向を監視できるよう船首の熊系獣人を起点に菱形を描くように展開。その中心にエルフ族の魔術士二名を配置している。静寂を取り戻した甲板へ二基の巨大な回転翼が騒音を撒き散らしていく。しばらくすると偵察班の二名が無事に帰還した。

「巨大鳥の軌道修正完了」

「周辺にそれらしい魔物は存在しませんでした」  
「解せんな」

団長は低い重低音を発しながら腕を組む。

「巨大鳥の前方不注意が原因だと言っのか？」

「なんとも言えませんが……それらしい魔物がいなかったことも事実です」

「我々は安全が確保されるまで甲板に待機。偵察班は見てきたことを船長に報告してくれ」

「わかりました」

偵察班の二名が飛竜を従えて船内へ戻っていく。直後に鎧姿の熊系獣人がこちらを一瞥した。ちなみに俺たち三人は船首と右翼側の中間くらいに陣取っていたので、その時点では前方へ向き直る行為と区別が付かなかったのだが、直後に描き出された黄土色の魔術組成式と向けられた興味が判断材料となる。



「俺は第三飛空艇護衛団を任されているベイリック・サルファアーテだ。常闇の魔銃士の名も聞かせてくれないか？」

言いながらベイリックは巨大な槍斧の柄を船上に突き立てる。熊系獣人族が戦闘を好むという噂は聞かないが、どうやら眼前の人物は好戦的な性格らしい。引き抜いた魔弾銃を帯革に戻して名乗ろうとしたのも束の間、左翼側の監視に当たっていた護衛が慌しく叫んだ。

「巨大な影が浮上してきます！」

その声に反応した護衛団が左翼側へ集結する。すでに紹介済みの団長とエルフ族の魔術士二名に加えて、軽装な鎧姿の人族二名と露出度の高い革鎧姿の猫系獣人族一名だ。それぞれがどういう役割を担っているかは判然としないが、構成を見る限り魔術士は後方支援敵は前衛主体の攻撃陣で倒すという戦術を選択しそうな印象を受ける。空戦では極めて異例なことだ。本来なら遠距離攻撃に勝る魔術士が攻撃を引き受けて、前衛は詠唱が完了するまでの時間稼ぎを担当することが多い。

「なん……だと？」

眼下を覗き込んでいた団長が渴いた声を絞り出した。ほかの連中も状況に気圧されて二の句が継げないらしい。俺は師匠と着物姿の美女を守る位置へ割り込んでおく。敏捷性に優れた猫系獣人族の回避能力は侮れないのだが、現在の状況を考えると普段通りの動きは期待できないだろう。

「偵察班の奴、警戒範囲を見誤りやがったな」

人族の青年が悪態を吐いた。それに対して各々が反応する。

「叱責はこの状況を乗り越えてからでも遅くはないさ」

「団長の言う通りにや」

「でもまあ、愚痴りたくもなるわね」

「とにかく今は標的に集中すべきだ」

刹那　甲板の雰囲気が一変する。

夜の海から浮上したのは巨大な黒竜だった。頭部から尻尾までの全長が推定二十五メートル、体重は推定二十トン前後で黒色の鱗に全身が覆われている。鰐のような頭部には二本の角を生やし、前肢と後肢のほかに背中から蝙蝠のような翼を生やしていた。巨大な牙や鋭利な爪といった露骨な凶器も怖いのが、この大きさになると長い尻尾による強烈な一振りも無視できない。

「こちらから攻撃は仕掛けるなよ。悠然と通り過ぎてくれるならそれに越したことはない」

ベイリックは気持ちの逸る団員に自重を促した。黒竜は周囲を警戒することもなく飛翔している。史上最強の種族は本能的な怖れを知らないのだろう。

「師匠、なにやら分が悪そうですね？」

「にやにやにやんと、さっさと死んだ演技ぶりをするにやん」

言い終わるとハシユシユは船上に突っ伏した。この危険回避方法がすべての魔物に有効だと考えているらしい。うーん、いつか残念可愛いが流行るといいな。というか酔っ払っているくせに対応の早さは一級品ですね。

「おそらく巨大鳥が急浮上したのはこいつが原因だろうな」

熊系獣人族の団長は忌々しそうに吐き捨てた。防御結界を維持する魔術士二名。前衛陣もいつでも攻撃を仕掛けられるよう臨戦態勢を貫いている。飛空艇と並行飛翔していた黒竜は不意に鰐のような頭部を捻り視線を船上へ向けた。縦長の虹彩が甲板の護衛団を煙たそうに睥睨する。

「どうやら見逃してくれるつもりはないらしいな」

次の瞬間、黒竜の大顎が開かれて灼熱の吐息が紡ぎ出された。超高熱の吐息は大気中の酸素を燃焼させて火炎となる。闇夜を明るく照らした紅蓮の炎は飛空艇に直撃する寸前で風の障壁と衝突。その衝撃だけで船体は再び大きく揺れた。

「あと何回くらい持ちそうだ？」

「どれだけ頑張っても一回が限界ですよ！」

エルフ族の魔術士は悲鳴に近い声を発した。防ぎ切れない熱波が防御結界を侵食し、船体の一部を溶かして泡立てていく。どう転ぶにせよ短期決戦が求められる局面だった。

「戦闘開始だ！ 総員配置に着け！」

熊系獣人族の咆哮が夜の海に響き渡る。



恨めしい雄叫びを上げながら黒竜は夜の海に沈んでいく。やがて視界から完全に消え去る。それを見届けて団長は快活な笑った。

「ぬはははははっ！ 不意を突けばいけるものだな」

「あっさりとか風々障壁バリアルくが破られそうににやっただときは焦ったにや」

「あのときは船内に駆け込んで『お客様の中に高位防御結界を張れる方はいませんか？』って叫びたい気持ちだったわ」

猫系獣人の感想にエルフ族の魔術士は軽口で応じた。すでに戦闘時のような緊張感はなく、護衛団の面々も普段通りの関係に戻っているのだろう。俺は甲板に突っ伏したままの師匠に声をかける。

「師匠、もう大丈夫みたいですよ？」

「にやにやにや」

ハシユシユは顔を上げて周囲を確認した。それから身体を起こして座る。なにか腑に落ちない表情をしているので質問を投げかけておく。

「どうかしたんですか？」

「珍しく勘が外れたにやあと思つてにや」

確かに師匠が死んだ演技ふりを選択するとき、そう簡単に勝てない敵の場合に限られていた。それに比べると今回の黒竜は楽勝過ぎた感が否めない。

「悪いほうへ外れるよりいいじゃないですか？」

「まあ、確かにそうだにや」

ハシュシュは酒樽に空いた杯を潜らせて口へ運ぶ。本当に底が知れない。しかしそれは師匠だけでなく、同席している着物姿の美女にも言えることだった。こちらは黒竜との戦闘中も一人で飲み続けている。

「ロン、新しい酒樽を調達してくるにや」

言いながらハシュシュは空になった酒樽を差し出しってくる。俺は不承不承に引き受けて船内へ潜った。もう少し暗澹とした空気が流れていると思っただが、この程度はよく起こることらしく、墜落するかもしれないと不安に駆られている者はいなかった。俺は適当な客室乗務員を捕まえて酒を補充してもらった。

甲板へ戻ると団長に叱責される偵察班の姿があった。しかし怒鳴り散らされているというより、警戒範囲やその選定方法について説明されている印象。そんな光景を横目に俺は酒を待ち詫びている二人のところへ戻った。

再開した飲み比べの中で飛空艇ならではの話題が生まれる。

「そっぴやティアはどうしてアラバスタに向かうんにや？」

「旧友に会うためによりん」

酒杯を傾けながら妙齡の美女は即答した。単純に人族ということ踏まえれば、同郷で友人と再会することもあるだろう。このときの俺はそれくらいにしか考えていなかった。

「それなら俺たちと似たような目的ですね」

「奇遇によりん。これもなにかの縁かもしれないよろろん」



を仕掛けられては撃ち落とすわけにもいかない。受け流すような対策を選択するしかないのだった。すでに死んだ演技をしている師匠の予感ほ、どうやら最低最悪の方向で当たっていたらしい。

「やれやれ」

呟いて俺は現状打破に思考を巡らせる。師匠を連れて飛空艇から脱出するだけなら簡単だが、それは最終的な手段であって今選ぶべき行動ではない。しかし黒竜の急降下タッチダウンを防げるような魔弾を持ち合わせていないのも確かだ。

「我的好敵手を無下に失うのは惜しい」

ゆらりと立ち上がった着物姿の美女は懐からココリの実とククリの実を取り出して口の中へ放り込む。歯で実を砕いてから服用。アセトアルデヒド脱水素酵素がアセトアルデヒドを酢酸へ分解、さらに水と二酸化炭素へ分解して体外へ排出することで素面へ導く。酒飲みの常備薬みたいなもので、低位の回復魔術と似た効果が得られる。

「によりーん」

不意に着物姿の美女は飛空艇の欄干へ飛び乗った。俺は謎の行動を目で追うことしかできない。悪酔い物質は除去済みなので、なんらかの意図がある行為なのだろう。

「あー！」

呼び止める間もなく着物姿の美女は夜の海へ飛び降りた。護衛団は上空からの攻撃へ備えることに精一杯でこちらを見ていない。真

上に展開された土属性の魔法陣から巨大な盾が具現化され始めている。乗客が落ちたと言ってもどうにかなる雰囲気ではない。

刹那　右翼下方から真紅の鱗に覆われた巨大な竜が空へ昇っていく。この異変には護衛団の連中も振り返る。そして想像を絶する状況に言葉を失うのだった。現場を見ていた俺でさえ意味不明なのだから仕方がないだろう。

「ティアマトだ！」

そんな中でベイリックが真紅竜の正体を叫ぶ。それは火属性を極めた魔王　真紅竜王ティアマトの名だった。戦闘時にしか真の姿を見せないと聞いていたが、なるほど普段は人族に化けているらしい。

真紅竜王は顎を開くと空中に深紅の魔法組成式を描き出した。なにを隠そう魔法はこちら側の専売特許ではない。知能の高い魔物や竜には上手く使いこなせる連中がいる。火属性の超高位魔法フレア＞爆灼フレア閃光フレアくを無詠唱で発動。

深紅の魔法陣から赤い閃光が上空へ向けて放たれる。次の瞬間、上方で灼熱の球体が発生。爆裂と六千度に達する超高温が黒竜を蒸発させた。それから真紅竜王は身体を人族に戻して甲板へ舞い降りる。護衛団は魔法組成式を解除することも忘れて呆然としていた。

超高位魔法フレア＞爆灼閃光フレアくは強引に魔弾で例えるなら存在しない第十式相当で、数少ない修得者さえ「実戦で使える代物ではない」と口を揃える詠唱時間を要するのだ。それを無詠唱で放たれたら開いた口を塞ぐにも一苦労だろう。

「これは　引き分けでいいよりん？」

美女の見つめる先には寝息を立てているハシユシユの姿があつた。反則技の使用と睡眠の時刻が判明しない以上、この飲み比べの勝敗は次回へ持ち越されるべきである。

「ですね」

俺が鷹揚に首肯すると着物姿の美女は柔和に微笑む。

アラバスタ共和国、首都シルビア港。

飛空艇は楕円形に区画された専用の港に着水する。ほとんど滑走を必要としない飛空艇ならではの離着場だ。ここで整備や魔導力の補給、客室乗務員や護衛団の交代が行われる。朝の便として魔導都市へ旅立つのは、もう一つの専用港で待機している別の飛空艇だ。

「常闇の魔銃士、不本意な結果とはいえ感謝している」  
カルナバル

飛空艇から降りる際、俺は団長に声をかけられた。この時点で名乗り損ねていたことを理解し、酒樽を両脇に抱えながら前方を歩く師匠と着物姿の美女を見やる。

「礼なら真紅竜王テイアムトに言うべきでしょう？」

「おいおい、そろそろ誰か感謝を受け取ってくれないか？ このままだと堂々巡りになってしまうからな」

なるほど、すでに真紅竜王や師匠には感謝を伝えたらしい。

「そういうことなら俺で終わりにしましょう。どうもどうも。しかしあのとき 護衛団が黒竜から飛空艇を守る可能性ってどれくらいあったんですか？」

俺の問いに鎧姿の熊系獣人は苦渋の表情を浮かべた。

「まったく被害を出さない確率は半々より少し下くらいだな。とてもじゃないが乗客に飲んでもらえる数字じゃないさ」

どうやら予想以上に最悪の状況だったらしい。  
ふと団長の視線が着物姿の美女へ向けられる。

「一年後に魔王が一堂に会する祭典が催されることを知っているか？」

「ええ、まあ」

「どんな願い事でも叶えられるという魔石が一つの場所に集まるわけだ。なにも起こらなければいいんだがな」

言われて俺は怖ろしい事実を把握した。誰が主催するのか知らないが、そこに思惑がないとは限らない。むしろ魔石を持つ八英傑が集結してなにも起こらないほうが奇跡だろう。そう考えれば火属性を極めた魔王も祭典を迎える下準備をしているのかもしれない。

本当に やれやれだ。

「誕生日、おめでとうにやー」

孤児院の中にある比較的広めな一室。乾杯の音頭を取るミーシャの大きな胸が上下に弾む。健康的な褐色肌に半年間でまた育った感のある巨乳は色気と異なる魅力があつた。祝杯を掲げるハシユシユやティアも美女だし、久々に顔を見た孤児院の先輩や後輩も美少女が多い。そしてどういいうわけか俺の膝の上に座っている幼女も可愛らしい顔立ちをしている。この状況を最も適切な言葉で表現しなさいと問われれば、おそらくハーレムという単語になると思うのだが、どうして俺の心はちっとも晴れやかじゃないのだろうか？

「次は苺が食べたいです」

言われた通り俺は手を伸ばして皿の上に盛られた苺を取る。それをアルマダ連邦の高官　フィリアの口へ運ぶと幼女は餌を与えられた雛のように頬張った。美女二人は戦利品である酒を飲んだくれているだけだし、幼馴染みは俺のために用意されたはずの料理を平らげていく。つまりまあ、祝福されている感じがまったくしないわけだ。

十七歳の誕生日。

大人として扱われる記念日。

「ロンさん、手が止まっていますよ？」

「はいはい、悪うございましたね」

顔を上げて催促してくる幼女に俺は適当な返答をしながら苺を食べさせる。ティアとハートレット姉妹が誕生日を祝ってくれると言ってくれたときは普通に嬉しかったんだけどなあ。どうしてこうなっただらう？

「随分と浮かない顔をしているな。ここは誕生日会場じゃなかったのか？」

振り向くと人族の先輩　ザルイークの姿があつた。やんちゃな風貌は大人になってからも変わらないらしい。その傍らには猫系獣人族の青年　シャルルが立っている。一対九の割合で女が生まれる種族にとって、猫耳と尻尾を生まれ持つ男の存在価値は極めて高い。長身瘦躯と整った容貌は種の保存に従っているのだらう。二人は三年前にアラバスタ共和国を旅立っていて、祖国へ帰ってきたときは必ず孤児院に顔を出していた。

「誕生日会場で合ってますよ。ただ祝福されている気がしないだけです」

「そうか？ 参加者全員、とても幸せそうに見えるぞ？」

ザルイークは室内を見回しながら告げる。その言葉を補足するようにならぬようにシャルルが語を引き継いだ。

「ロンは独特の感性を持っているからね。僕たちの誕生日会でも盛り上げ役に徹して変な感じだったよ。参加者の幸せそうな顔が最高の贈り物なのにさ」

祝われる立場になるまで意識もしてなかったが、なるほど誕生日会で受けた違和感の正体はそれらしい。俺は膝の上に座るフィリアの頭を撫でた。好き勝手にしているように見えた参加者全員、ちゃんと俺のことを祝福してくれていたのである。

「ロン、ちょっといいか？」

振り仰ぐとザルイークが親指で部屋の外を指し示していた。傍らのシャルルに視線を移すと銀色の前髪がかかった瞳を細める。

「渡したい品物があるんだよ」

二人に促されて俺は幼女を膝上から下ろして立ち上がった。部屋を出て孤児院の屋上へ向かう。五階建てだが自動昇降機は設置されていない。階段を上りながら世間話を兼ねて近況を報告する。ザルイークは飛蛇竜討伐の報酬に驚愕し、シャルルは「常闇の魔銃士」になったことを笑い種にした。

「ロンらしいよ」

「どの辺がですか？」

「なにを考えているかわからないところかな」

ふわふわの銀髪を掻き上げながら猫系獣人族の青年は柔和な笑みを浮かべる。ザルイークと一緒にいる所為かもしれないが、本当に儂げで繊細な美しさを持ち合わせている先輩だった。

洗濯物の取り込み時間が過ぎてている屋上には誰もいなかった。

「俺たちは今、運び屋を生業にしているな。今回は依頼の品を届けるために帰ってきたわけだ」

ザルイークは思わせ振りの発言をする。だから俺は敢えてシャルルに問いかけた。

「誕生日の贈り物を渡したいってことですか？」

「相変わらず鋭いのか鈍いのか判断に悩まされるよ」

銀髪の猫耳青年は相棒に許可を求める。同意を得ると黄緑色の魔方陣を描き出し、その中から両手を必要とする横長の木箱を取り出した。手渡された俺は一度地面に置いてから蓋を開ける。中には緩衝材に包まれた漆黒の大口径魔弾銃が入っていた。

「『<sup>ヘルファイア</sup>地獄の業火』という異名を持つ大口径魔弾銃らしい」

「知らない魔銃士がいたら潜りですよ」

俺は軽口を返しながら木箱に収められた漆黒の魔弾銃を手取る。クリフ・スフィールという高名な魔導工学技師が残した「悪魔の遺産」と呼ばれる七挺の一つだ。現在使用している強襲用狙撃魔弾銃<sup>アサルトライター</sup>と比較して、命中補正率、術式展開速度、高位魔弾制御率、すべて

の面において格段に上昇する。特に術式展開速度の向上は高位魔弾による魔術反応を可能にするため、これまでの戦術に新たな選択肢を組み込む手助けになるかもしれない。

「本当に頂いてもいいんですか？」

「届け物だからね。渡さないと契約不履行だよ」

情報屋、運び屋、賞金稼ぎ、それぞれの世界に鉄の掟が存在する。禁を犯した者に待っているのは廃業か死くらいだろう。俺は肩をすくめているシャルルに質問を投げかけた。

「依頼主は？」

「ハシユシユさんだ。半年前に分割で支払うからロンの誕生日までに用意してくれと頼まれたんだよ。運び屋の範疇を超えてるから最初は断ったんだが、どうにも熱意に負けて引き受けちまったんだよな」

相棒より先に応じてザルイークは照れ臭そうに鼻先を掻いた。気を悪くした様子も見せずシャルルは苦笑いを浮かべる。

「機動力と索敵能力しかない僕たちに『悪魔の遺産』を用意しろなんて無茶だよな」

「しかしまあ、引き受けた以上は後に引けないからな。情報網を駆使して金で解決できそうな持ち主を探してたわけだ。ハシユシユさんには『地獄の業火』の購入代金に俺たちの利益を上乗せして請求したんだが、どういうわけか分割払いじゃなく一括で全額振り込まれていたことに驚いたな」

「ロンの話を聞いて理解したけどな」

ザルイークとシャルルの説明を受けて俺は泣きそうになっていた。

つまり師匠は借金覚悟で俺のために「悪魔の遺産」を用意する予定だったのである。

「感動しているところ悪いんだけど、僕たちも仕事だから受領書に指紋もらえる？」

差し出された羊皮紙に俺は左手の親指を押し当てる。魔術組成式が展開して受領確認となる刻印を浮かび上がらせた。俺は大口径魔弾銃を木箱に戻して抱える。

「師匠に感謝を伝えてきます」

「いや、それはやめたほうがいい。わざわざ屋上へ連れ出した理由を考えろ」

「それを見たらほかの皆が贈り物を渡し難くなるからね」

どうやら俺は最高の師匠と仲間に巡り会っていたらしい。

参加者の幸せそうな顔が最高の贈り物 本当にその通りだと実感した。

どこまでも穏やかで優しい気持ちになれる。だからこそ俺は軽口を叩いてしまう。

「師匠、残念可愛いだけが取り柄じゃなかったんですね」

「知らなかったのかい？」

「というか少しは俺たちの仕事にも感謝しろよな」

ザルイークは嘆息を漏らしながら愚痴を零した。

それぞれが満足したところで誕生日会は幕を閉じ、それから俺は師匠と着物姿の美女に引き連れられて酒屋へ向かった。わざわざ場所を変えたのは酒樽が空になったからではなく、ティアの旧友との待ち合わせが今夜だったからである。そんな場に部外者が参加していいのか甚だ疑問だが、師匠と美女が俺の進言を聞き入れるとは思えないので黙っておく。訪れたのはなんとも平凡な大衆店で、まさか火属性の魔王が来るとは夢にも思わないだろう。

「いらつしゃい」

雰囲気のある女店主が上品な声で迎えてくれる。着物姿の美女は店内を見回して目的の人物を見つけたらしく、軽く右手を掲げてから奥の席を目指して歩き始めた。そちらへ視線を向けて俺は驚愕する。長い黒髪を手で押さえながら焼き魚を食べているエルフ族常闇の魔女ことアーシエス・バラライカがそこにいた。

「にやにやにや、世の中は狭いにやあ」

師匠が珍しく的確な表現を口にする。こちらに気付いたアーシエスは薄い笑みを浮かべた。俺は駆け寄るように距離を詰めて疑問符を投げかける。

「どうしてこんなところにいるんだよ？」

「ティアとの待ち合わせがあつたからに決まっているじゃない」

「一年後の祭典で感動の再会を果たすんじゃないのか？ こんな中途半端な時期に会っちゃうし、もつと成長した俺を見せたなかつたのにさー！」

「まあ、そういう細かいことは横へ置いておきましょう」  
「細かくねえよ！ 物事には順序というものがあるんだ！」

つつい俺は声を荒げてしまう。常闇の魔女は澄ました顔のまま告げる。

「急にラズエルくんに会いたくなったのよ」

「……せめてもう少し会いたかった風に頼む」

「ラズエルくん、アイタカツタ」

「より酷くなった！ というかもう会いたいという気持ちを微塵も感じさせなくなってる！」

本当に物語の流れというか空気を読まない奴だ。

「あああら、ラズエルくんは私に会いたくなかったの？」

「会いたかったさ！ でもそれは酒屋で焼き魚を頼張ってるどころじゃなくて、もっとこう感動的な場面で再会を果たしたんだよ！」

「例えば海亀の産卵中とか？」

「違う！ それは感動的な場面が背景にあるだけで感動的な場面じゃない！」

「随分と腕を上げたじゃない」

「ここで褒められても嬉しくねえよ！」

俺とアーシエスの会話を師匠と着物姿の美女は無言で見守っていた。普通に恥ずかしい。それから四人での会食が始まり、アーシエスとティアの再会を祝うことになった。卓の上には麦酒から葡萄酒、度数の高い蒸留酒まで並べられている。料理も肴になりそうな一品が豊富に揃っていた。

飛空艇内のような格調高さが無い分、普段通りに振舞えるのが大衆店の利点だろう。

「酒と一緒に楽しめる仲間がいることは素晴らしい」

「昨日の夜からずっと宴会にや」

「酒を飲むのは構わないのだけど、ティア、例の件は大丈夫なのでしようね？」

上機嫌な着物姿の美女を常闇の魔女が窺める。

「協力には感謝しておるが、彼奴<sup>あやつ</sup>だけは我の手で屠る」

「竜族の裏切り者は竜族で始末するということかしら？」

「そういうことにしておこう」

魔王の魔王による魔王のための意味深な会話だった。

聞き耳を立てるだけならともかく、話に深入りすべきではないだろう。

中略。

頃合いを見て俺は店を出る。しばらくすると常闇の魔女も外へ出てきた。

「魔王同士に繋がりはあるとは思ってなかったよ」

「ほとんどの魔王は縦の関係に強くて横はさっぱりだからね」

夜でも明るい商業地区の通りを歩きながら言葉を紡いでいく。儼かな雰囲気の外灯を電飾が茶化しているような街路だ。

「一年後の祭典、やはりなにかあるのか？」

「なにもないと言えば嘘になるでしょうね。でもそれは魔王側の問題で下僕であるラズエルくんには重要な事柄じゃないわ」

「下僕は塔に巢食う盗賊を倒したり王に頼まれた黒胡椒でも探しておけと？」

「まあ、大体そんなところね」

「否定しろって！」

「冗談よ」

そこでアーシエスは神妙な面持ちになった。こちらも自然と背筋を伸ばしてしまう。

「契約の内容を覚えてる？」

「もちろんだ。忘れられるような内容じゃないだろ？」

潜在能力を極限まで引き出せる代わりに俺の命は常闇の魔女に握られている。しかしこれは性質を考えれば当然のことで、契約者を従わせるための常套手段と呼ぶべきだろう。もし足枷がなければ魔王を裏切るかもしれないわけだからな。

「どうして私に命を預けられたの？」

「アーシエスになら殺されてもいいと思っただからだよ」

実際に俺、前世で一回殺されてるからな。

常闇の魔女は満足そうに微笑む。本当にどこの世界でも変わらないよな。

「一つ質問してもいいか？」

「なにかしら？」

「ティアが竜に変身したみたいに、ほかの魔王も姿を変えたりするのか？」

「私は第三形態まで変身が可能よ」

「すげえ！」

「冗談よ。子供みたいな喜び方をしないで頂戴」

絶対零度の視線が返ってくる。本気で怖い。だから俺は本題を切り出すことにした。

「やるべきことがあるなら教えてくれ」

「それより先に伝えておかなければならないことがあるわ」

「なんだよ？」

問い返す俺の言葉にも緊張が浮かぶ。アーシエスは口の端を上げて囁いた。

「誕生日、おめでとう。これは私からのささやかな贈り物よ」

そう言って常闇の魔女は左手を差し出してくる。左腕から発生した黒煙が掌の上に集まり有形物を形成していく。やがて小柄で耳と尻尾の長い哺乳類と呼べるような存在が誕生した。不意に黒い物体が跳躍する。全体を覆う黒煙は風に揺らめいているが、俺の肩に飛び移ってきた小動物には確かに質量があった。

「こいつは一体？」

「使い魔よ。その子を通じて私からの伝言を一方的に送り付けることができるわ」

「相互通信できるようにしとけよ」

「嫌だわ。そんなことをしたらラズエルくんの声が聞かされることになるじゃない」

「言っと思っただけさ」

俺は首の後ろを伝って左右の肩を行き来する使い魔の頭を撫でる。揺らめく黒煙が毛の役割でもしているのか、撫でたときの触感は大

や猫のそれに近かった。意外と愛くるしい顔をしているので、耳と尻尾が長いことを除けば黒猫みたいな印象を受ける。

「飼育するにしても餌とかどうすればいいんだ？ 俺、動物を飼った経験なんてないぞ」

「なんの心配もいらないわ。ラズエルくんの精気を吸収して勝手に育つ仕組みよ」

「不安で夜も眠れねえよ！ 衰弱死以外の未来が見えないだろーが！」

というかそんな物騒な存在を誕生日の贈り物にするな。

「右手の刻印は飾りじゃないのよ？」

「おお、つまりこの刻印が精気を無限に生み出してくれたりするの  
か？」

俺は感動しながら左手で右手の甲に触れる。アーシエスは視線を伏せて呟いた。

「そう……だと……いいわね」

「絶対にそうじゃないじゃん！ 頼むからこっちを向いて話してくれ！」

「冗談よ。使い魔に殺されるなんてことは起こらないわ」

「洒落にならない冗談はやめてくれ！」

前科があるだけに笑えないんだよ。

「それはともかく私とラズエルくん、昔どこかで会ったことがあるのかしら？」

「どうしてそう思うんだ？」

一般的な反応を返しておく。常闇の魔女は腕を組みながら首を傾げた。

「よくわからないわ。でも話をしていると、とても懐かしい気持ちにさせられるのよ」

「ふむ」

「なにか知っていることがあるなら教えて頂戴」

「なにも知らないよ」

アーシエスは疑いの眼差しを向けてくる。睨まれたと勘違いしたのか使い魔が俺の背中へ隠れた。

「本当に会ったことはないのね？」

「さあ、それはどうだろうな」

鳳凰曆七一五年。

白い紗幕の交差した薄暗い室内。その奥に控える寝台の上には人影があつた。

若干二十二歳にして国王に就任し、僅か五年でラズマタズ教国に革命をもたらした、アレク・デルタ・アシユビーその人である。そこへ忍び寄る別の人影。音を立てないように慎重に歩を進める。寝台の傍らに來ると、懐から小刀を取り出した。すやすやと眠っているアレクにそれを突き立てる。しかし刺さる直前で寝返りを打たれ回避された。

「くっ」

寝具から小刀を引き抜き改めてアレクを狙おうとしたときだった。

「暗殺に二度目はないよ」

アレクは素早い動きで刺客の腕を掴み寝台へ引き込んだ。身体を反転させて馬乗りになる。そのまま激しく抵抗しようとする刺客を制圧した。随分と音を立てたからだろう、室内の異変に気付いた近衛兵が声をかけてくる。

「アレク様、なにか御座いましたか？」

「どうやら鼠が迷い込んで来たらしい。悪いが部屋を明るくしても  
らえるか？」

「ははっ！」

近衛兵が端末を操作すると、寝室内の発光管が青白く輝いた。アレクの顔に驚きの表情が浮かぶ。取り押さえた刺客は黒髪に黒い瞳の若い女だった。よく知らない異国の装束を身に纏っている。

「必要であれば我々が鼠を捕らえましょうか？」

「ありがとう。しかしその必要はないよ」

「了解致しました」

アレクは近衛兵の質問に応じると刺客の観察を再開する。どうも女の格好に見覚えがあるのだ。ぼんやりと思い出した名称を言葉にしてみる。

「遙か東方に位置する国の暗殺と諜報を得意とする忍者　女はく

ノーだったかな？」

「殺しなさい」

くノーは躊躇いもなく言い放つ。それから常套句のような恨み言を紡いだ。

「だけど覚悟しておくことね。あなたが国王である限り新たな刺客が命を狙いに来る」

「僕の心配をしてくれてありがとう」

怜悯な視線を向けてくる女忍者にアレクは柔和な笑みを返した。しかしその瞳には悪意が含まれている。まず女刺客の手首を捻り上げて小刀を放させた。それを足で払って寝台の上から弾き落とす。両手を押さえつけたままアレクは優しい声で宣告した。

「君は僕より己の心配をすべきだね。捕らえられた刺客がどういう

目に遭うかくらい知っているだろう？　しかも君は女だ。あんまり僕の機嫌を損ねないほうがいい」

「卑劣な……それでも一国の王か？」

「一国の王だからこそ温情をかけられるんだよ。君は美しい。素直に従えば飢えた男の群れに裸で放り出すような真似はしないさ」

ゆっくりとアレクはくノ一の唇を奪った。腕力だけでなく脅迫までされては抵抗できるわけがない。しばらくすると若き王は唇を離して囁いた。

「可愛いよ」

言いながらくノ一の腕を押さえていた右手を動かして女の頬を撫でる。それから緩やかに下へ向かい柔らかかな胸に触れた。自然と女の頬が紅潮する。恥ずかしさなのか屈辱なのかは判然としない。アレクの魔の手は忍び装束の中にまで及んだ。思いのほか大きな胸が掌の中で弾む。

「……あ……」

くノ一の唇から甘い吐息が漏れた。アレクは悪魔のような笑みを浮かべる。

「ようやく素直になってきたね」

再び唇を重ねようとしたとき、くノ一の口から冷静な言葉が放たれた。

「ねえ、これってアレクは楽しいの？」

「とても楽しいね」

アレクは押し倒したままの女忍者に微笑みかける。

「レノアは楽しくないのかい？」

「楽しかったわよ。詳細に設定を決めて刺客ごっこをしているときはね」

言い終えるとレノアは深い溜め息を吐く。不満げな態度にアレクは慌てて取り繕った。

「愛する二人にも変化は必要だと思っただよ。特に長女のミシエルが生まれてから、レノアはお姫様の相手ばかりしているからね。もう少し夫である僕も構ってもらいたいのださ」

「それはわかっているんだけど、普段より興奮して鼻息が荒いのはなぜなの？ くノ一の衣装を着ただけなのに、アレクの瞳が爛々に輝いていたのはどうしてかしら？」

「そ、それはだね。えーと……つまり、その、なんだ」

じとつとしたレノアの視線にアレクは超高速で顔を逸らせた。

「そう言えばさ、どうして東方装束がここにあるわけ？ まさかこのために取り寄せたとかじゃないわよね？」

レノアの詰問。アレクは萎縮する。

「国民の血税を自身の欲望を満たすために使うなんて最低を通り越して人族失格よ」

「違う違う！ わかった、正直に白状するよ」

レノアの胸元に差し込んでいた右手を抜いて、アレクは嘆息を漏

らしながら仰向けに寝転がった。枕代わりに頭の後ろで両手を組む。

「東方の国から使者が来てね。貿易船の燃料補給をしたいと言うから許可してやったんだ。そしたら勝手に数種類の民族衣装を置いていったんだよ。それを部屋に放置していたらレノアが着てみたいと言い出して、それでこういうおかしい展開になったんじゃないかな？」

「昔、女諜報員とか女暗殺者に憧れてた時期があったのよ」

数瞬だけ遠い目をしていたレノアの顔が急速に赤くなる。アレクは立場逆転の機会を見逃さなかった。

「せっかく二人きりなんだし、ここは仲直りの意味を込めて夜の営みでもしようか？」

「……少年のような瞳で言わないでよ、断り難くなるから」  
「断る気なんてないくせに」

アレクの意地悪な言葉にレノアは顔を背けて口を尖らせた。

「あらら」

若き国王は失言を認めるかのように鼻先を掻いた。それからご機嫌斜めな妻にとぼけた口調で囁きかける。

「あー、言い忘れていたことがあった」

「……なによ？」

レノアは背中を向けたまま問い返した。その背中にアレクの優しい声が届く。

「愛している、世界中の誰よりも」

かつて大戦の開始に吹かれたという伝説の角笛ギャツラルホルンが描かれた赤い旗　ラズマタズ教国の国旗が最奥の壁に掲げられていた。その下に議場が広がっている。議席には正装の文官や将軍が難しい顔で並び、それぞれ秘書官たちが周囲を慌しく行き交っていた。

「陛下、今なんと仰いました？」

「却下。わかりやすく説明すると『その案駄目だぞー』ってことだね」

玉座から軽口を叩くアレクに、事実上ラズマタズ教国の二番手であるアンタレス教皇は苦々しい表情を浮かべた。隣に座る部下に修正案を作成するように命じる。要人の一人が次の議題について説明を始めた。

「国民の八十八・二パーセントが読み書き可能になっております。

これは五年前に比べ五十パーセントの向上、さらに犯罪発生率の低下にも繋がっております。尽きまして」

「採用」

「陛下！　まだ話の途中ですぞ！」

理不尽な判決が下され続けることに、とうとうアンタレスは立ち上がり抗議していた。高齢の老体とはいえ教皇にまで登り詰めた男の怒声は、要人たちを震え上がらせるほどの苛烈な迫力があつた。しかしアレクは動じない。まるで叱責されたのが他人であるかのような振舞いを見せた。とはいえ返事は必要と判断したのだろう。一

拍後、若き王は悠然と立ち上がり静かに語り始めた。

「軍事力を縮小し、その予算を教育と医療に用いる。僕が五年前に採用した議案だ。あのときのことを思い出してほしい。議会は国民を守れない国家に成り下がると議案に対して猛反対した。二年から三年のうちに他国の干渉を受けるといふ見解もあつたかな。しかし五年経つた今でも我が国は独立国家を維持している」

「陛下、よろしいでしょうか？」

饒舌なアレクに釘を刺す声が上がった。若き国王は視線を声の主へ移してから首肯する。

「もちろんだよ、最高軍事司令官殿」

「陛下の想い描く国家が実現すれば、まさに我々の望む理想郷でありましょう。しかしそれは頭の中で描かれた世界ではありません。安全かつ絶対に傷付かないところで思考された夢の世界。ところが現実とは違います。戦場の最前線に立たされる兵士たちは、いつ敵国に攻め込まれるかと戦々恐々なのです。現状の武力では戦争にもならないでしょう。各国が最新兵器を開発実用化している中、我が国は五年前より退化し続けているのですからね」

「グラットン司令殿、いくらなんでも口が過ぎるのでは？」  
「構わない、続けてくれ」

非難の声を制して、アレクは先を促した。恭しく頭を下げたグラットンは続ける。

「陛下の理想は高く、この国を変える救世主に成り得るかもしれませんが。しかしよくよく考えてもみてください。もし陛下一人で救えてしまうような国なら、それは陛下以外を必要としない糞つ垂れな国だと証明するだけです」

「いい加減にしろ！ そのような暴言許さんぞ！」

アンタレス教皇が机を叩いて激昂した。どよめきが議場に広まる。グラットンの演説は進言の範疇を逸脱しており、明らかに喧嘩を売っているようにしか思われなかったからだ。しかも富国強兵推進派を煽り立て謀反を企てるつもりかと疑われても仕方がない内容である。

「確かにグラットン司令殿の進言は無礼でしょう。しかし苛烈な生存競争を勝ち抜くためには、武力を切り捨てられないのも実情であります。陛下は戦争が起こったとき、武力以外の手段を用いて他国の脅威から国民を守る案をお持ちか否かをお聞きしたい」

要人の一人が口火を切った。耳が痛くなるような静謐を若き国王の声が裂く。

「勝ち目のない戦争はしない」

アレクの瞳には強い意志が宿っていた。しばし気圧された要人だが、それでは解決にならないと反論する。大きく息を吸い込んだ若き国王は決然と言い放った。

「負けるが勝ちという諺がある。戦争を起こした場合、自国と相手国の生産力は極端に低下する。その中で物資や資金を大量に消費しなければならず、結果として第三者たる隣国や同盟国が富むことになる。それに戦争で勝利しても手に入るのは疲弊した領土だけだ。周辺国の脅威に曝されることになるし、終戦直後の国力は戦争開始前を下回る可能性が高い。ここまで異論はないかな？」

要人たちの顔を見回したあと、一人納得したようにアレクは語を

継ぎ足した。

「例えば統治者を挿げ替えるだけで戦争を回避し、現状の暮らしを維持できるとしたら、それはそれである種の勝利にならないだろうか？ 国民視点に立って平和を考えれば簡単なことだ。国民にとって国王が誰であるかは重要なことじゃない。問題なのは安定した暮らしと戦争の起こらない平和な環境だからね。私の命と引き換えにラズマタズ教国を貴国の自治区として扱ってほしいと願いだとしたら。一切の被害を出さず一国が手に入る。戦争による損害を逆手に取れば、案外あっさりと承認される気がするんだよね。自治権を認めても自国の領土が増えることに変わりはないわけだからさ。それでも戦争を起こしたがるような先見の明がない国なら諦めるしかないけど」

「正気ですか？」

鋭い眼光でアレクを射抜いたのはグラットン司令である。

「残念ながら正気だ。私の理想のために皆の命をくれと言つつもりはない。賭けるのは私の命だけで十分だ」

議場の雰囲気が変わった。ざわざわと不穏な空気が漂う。

「それはつまり 我々に陛下を売れと申しているのでしょうか？」

「端的に言つとそうなるな。保身のために王を売るような腰抜け連中なら謀反の心配もないだろうと敵国に安心感を与えられるかもね」

空気が張り詰めた。

「確かに理論的に考えれば敵国に戦争を起こす利益がなくなる」

「一人の犠牲者で現状を維持できる妙案」

議場がアレクの策を認め始めたとき、机を激しく叩いて一喝したのは、憤怒の表情を露わにしたアンタレス教皇だった。

「静まれ馬鹿どもが！ 国王を差し出して保身を図るなど恥を知れ！ 陛下もお戯れが過ぎますぞ？ 我々の命は陛下に預けているのです。どうぞ懸命なご決断を」

恭しく一礼するアンタレス教皇に、アレクは反省の色を微塵も見せずに答えた。

「ならばその預かっていた命を返却しよう。では次の議題に進んでくれ」

呆気に取られた教皇を横目に、要人の一人が次の議題を切り出していた。会議は滞りなく進行し、予定の時刻に終了する。要人たちが退室していく中、アンタレス教皇がグラットン最高軍事司令官を呼び止めた。珍しい組み合わせである。誰かに聞かれると困る内容なのか、皆が出払った議場の隅でアンタレス教皇は切り出した。

「グラットン殿、陛下への発言について教えて頂きたい。なにか意図があつてのことなのか？ それとも」

「陛下を疎んじているアンタレス教皇に忠言されるとは思いませんでしたな」

発言を遮るようにグラUTTONは陰惨な笑みを浮かべた。

「ふざけるな！ どのような人物であろうと主君に忠誠を誓うのが臣下たる務めだ。二心は許さんぞ。返答次第では軍法会議にかける」

怪訝そうにアンタレスの表情を覗き込んで、しかし次の瞬間、グラットンには柔和な笑みを湛えていた。まるで心が入れ替わったかのような変化である。

「どうやら賢しい芝居ではないらしいな」

「当たり前だ！ 一体なにを考えている？」

「王族と教会の不仲は折り紙付きだからな。真意を話すつもりはなかったんだが　まあいい。少しだけ俺の昔話を聞かせてやろう」

遠い目をしてグラットンは顎鬚を撫でた。アンタレスは無言のまま聞き入る。

「戦の最前線は常に非常だ。弱い奴から死んでいく。他人を信じた奴も死ぬ。殺し合いに感情は不要。俺たちは敵国の王を追い詰める駒の如く扱われるだけだった。そこから抜け出す術は一つしかない。武功を収めて上に這い上がる。最前線に立ちたくなければ、後方から指示を飛ばすだけの指揮官になるしかなかった。つまらん人生さ」

グラットンの凄惨な過去にアンタレスは息を飲んだ。人命の尊さを訴える教会が愚かしくさえ思えてくる。眼前の人物が急に大きく感じられた。

「ある日、ふと思ったのだ。俺たちが命をかけて戦っているとき、守るべき王は何をしているのだろうかとね。美味い酒を飲んでいいのか、女を抱いているのか、それとも前線で戦う俺たちを気にかけてくれているのか？ 意味のない詮索だ。答えがなんであろうと俺たちは戦うしかない。王の価値など駒にはどうでもいいことだ」

言ってからグラットンは苦笑する。

「王にとって駒の命などさらにどうでもいいことだろう。アンタレス教皇、俺は知りたいのだ。百万人の命を犠牲してまで守らなければならぬ命など存在するのだろうか？」

アンタレス教皇はなにも答えなかった。いや、答えられなかったのである。

「その逆も然りだ。たった一つの命で救われる百万の命などありはしない。いや、あつてはならないのだ。もしそんなことが可能であるなら、俺は死んでいった仲間たちにかける言葉を失ってしまう。自らの命が国の礎になったと信じている仲間たちに、人の命は等価ではないと残酷な現実を告げるといふのか？」

鬼の形相を象るグラットンに、アンタレスは深い哀しみを覚えた。

「されど貴殿は待ち望んでいたのではないか？ 国民のために自らの命を賭けるような主君を、武力以外で争いを封じられる理想郷を

「

平和という名のもとに世界が一つになることはない。

なぜなら我々は究極的に他者の幸福より不幸を欲しているからだ。  
ルオニト・マギ「アレク・デルタ・アシユビー」国王への返信」鳳  
凰曆七一五年

シルビア中央図書館。

アラバスタ共和国の首都シルビアに存在する国内最大の図書館だ。  
本館と新館で構成されていて、それぞれ三階と五階まで存在してい  
る。蔵書数約七百万冊、魔導端末完備、大抵の情報はここで入手す  
ることが可能だ。この後「そう思っていた時期が俺にもありました」  
と過去形になるのだが、それはまあ、今の時点では判明していない  
秘密ということにしておこう。

「随分とご機嫌だね」

シャルルは魔導端末を操作する俺の隣席に抱えていた大量の魔導  
書を下ろした。それから椅子に腰を落ち着けてこちらを見やる。に  
やあにやあ言わない所為かもしれないが、銀髪から覗かせた猫耳さ  
え凛々しく見えてしまう。

「大切な人たちに誕生日を祝ってもらえたからですよ」  
「なるほどね」

銀髪青年の視線が師匠から贈られた新しい愛銃「地獄の業火」へ  
向けられる。ちなみに強襲用狙撃魔弾銃は孤児院に寄贈している。  
ヘルファイア

穏やかな笑みを浮かべてからシャルルは長机の上で忙しく顔を洗っている使い魔へ視線を移した。

「片恋相手が魔王なんて大変じゃないかい？」

「ん、でもまあ、それは魔王じゃなくても変わらないですからね」

俺の曖昧な返答に銀髪の猫耳青年は苦笑する。男さえ魅了しそうな美貌は、どんな表情を象っても崩れない。うーん、ずっと一緒に旅をしているザルイークはおかしな気持ちになったりしないのだろうか？ いや、そもそもこういう発想がおかしいのだろう。

俺は咳払いをして思考を切り替える。ともあれ名前が出たので聞いておこう。

「ところでザルイークさんは？」

「どうも図書館は肌に合わないらしくてね。次の依頼で必要になりそうな魔導具の調達に行ってるよ」

美貌の青年は積んだ本の山から一冊を抜き出して開いた。かなり古い世界地図である。読書に集中される前に疑問符を投げかけておく。

「古代文明の探索ですか？」

真剣な表情の俺を一瞥して、シャルルは盛大に吹き出した。しばらく身悶えたあとに目尻の涙を手で拭う。なにが面白かったのか意味不明だが、楽しんで頂けたのならそれでよしとしよう。笑いの解説をさせるほど俺は野暮な性格をしていない。

「これは僕の趣味みたいなものだよ。世界は果てしなく広い。まだ

誰も足を踏み入れたことのない未開の地へいつかは訪れてみたいんだよ。今はまだ地図を眺めて想いを馳せることくらいしかできないけどね」

飛空艇や魔導船は安全優先のため、地図に書かれていない場所へ踏み入ることが出来ない。そういう事情もあって、世界の解明は随分と遅れている。確か正確な地図が存在するのはクオン大陸と周辺諸島だけである。もっと的確に地理の実情を語るなら、この世界は全体の七割程度しか把握されていない。残り三割の未開拓地は魔物が棲んでいるか以前に陸か海かさえ不明なのだ。

「どうして運び屋になっただんですか？」

俺は当然の疑問を投げかける。もし未開の地を訪れたいなら財宝トレジ探検屋ヤーハンターのほうが理に適っているからだ。銀髪の青年は笑顔を崩さないまま反論してくる。

「そんなことを言い出したらロンの行動もおかしくなるよ。あれだけ世界を旅すると豪語していたのに、いきなり常闇の魔女に魂を託すなんて馬鹿げてるよね？」

ぐうの音も出ない。魂を託すという行為は自由の放棄と同義だからだ。

つまり普通に考えれば不条理な行動だろう。

しかしまあ、俺の場合、その理由は明白だった。

「俺の場合、それが世界を旅して回りたい理由でしたからね。アーシエスに会えたことで意欲を削がれてしまったのかもしれませんが」「常闇の魔女に仕えるために世界を駆け巡るつもりだったのかい？」

シャルルは大きな瞳を丸くする。驚いた顔さえ整っているのは少し腹立たしい。なにかしら突っ込むべきか考えようとして早々に諦める。

「その表現は正確じゃないですけど、まあ、なんとなくそんな感じだったりはします」

「ロンらしいよ」

穏やかに銀髪青年は瞳を細める。それから本の頁を捲り読書を始めた。それを機に俺も魔導端末の操作に戻る。八英傑の集結する祭典や酒屋での会話に含まれていた単語を検索してみるものの、結果は噂の域を出ない曖昧なものばかりで、常闇の魔女や真紅竜王<sup>ティアマト</sup>が秘密裏に動いている目的は見当も付かなかった。

「まさかとは思っただけど……魔導端末で情報収集してないよね？」  
「え、駄目なんですか？」

問い返すとシャルルに憐憫な眼差しを向けられる。図書館で情報収集すること自体を禁止する制度はなかったはずなので、おそらく個人的あるいは専門的な感覚として哀れまれているのだろう。驚きを隠せない俺に美貌の青年は律儀にも回答を用意してくれた。

「収穫があれば問題ないんじゃないかな」

「うーん、まあ、ミシエル・デルタ・アシュビーが過去の王族ということはわかりましたけどね」

「ミシエル・デルタ・アシュビー？」

俺の紡いだ人名が美声で繰り返される。

「正確に聞き取れたわけじゃないので同一人物とは限らないんです

けど、昨日、アーシエスとティアさんが話している最中に出てきた名前なんです」

シャルルは「ふむ」と呟いて腕を組む。やがて懐から一枚の羊皮紙を取り出して長机の上に置いた。一見するとなにも書かれていない未使用状態だが、なんらかの魔術組成式が施されていると考えるべきだろう。

「これは？」

「魔導都市にあるイリヤ商会の紹介状だよ」

「えーっと？」

意図がわからず間抜けな反応を返してしまう。

イリヤ商会は運び屋の仲介を生業にしている大規模な組合ギルドで、大抵の運び屋はここから仕事を斡旋されて請け負っている。手数料を差っ引かれる損よりも、安定した仕事の確保が優先なのだろう。もちろん依頼者側にも利点があつて、個人契約に比べて圧倒的に安心が保障されている。その期待を裏切らないためにも入会にはそれ相応の試験が用意されていて、つまり運び屋を目指すならイリヤ商会への登録が最初の難関となるわけだ。

しかし紹介状を持参すれば、その試験を免除してもらえる。それだけに本来なら簡単に入手できる代物ではないし、逆説的に考えれば試験以上に吟味されるべきなのだ。

「少なくとも魔導端末の二歩先の情報を得られるよ」

「でもこれ……いいんですか？」

「紹介状の配布権限は発行者　つまりこの場合は僕に委ねられているからね」

しばしの逡巡。しかし考えるまでもないことだろう。

「それじゃあ、お言葉に甘えさせてもらいます」

俺は素直に紹介状を受け取ることにした。一年という限られた時間の中で情報収集をして、その結果に基づいて行動しなければならぬのだから、最初の段階で時間を浪費する事態はできるだけ避けたい。そのためにも苦労しなくて済む制度があるのなら遠慮なく利用すべきだ。わざわざ茨の道を歩く必要はないからな。

「あ」

銀髪の青年は失敗を戒めるように猫耳の生えた頭を小突く。その様子を偶然見たらしい人族の司書が抱えていた大量の魔導書を床に落とした。注目を浴びて我に返ったのか慌しく本を拾い集める。これで何度目だろう？ 周辺の女性が惚けて棚にぶつかったり本を手放したりしたのは。

「念のためザルイークにも許可を取ってもらえるかな？ 僕の一存で紹介状を渡したと根に持たれたくないからね」

「わかりました。それで今、どの店に？」

目的に応じて立ち寄るべき店は限られている。魔導具の調達と一口で言っても内容は千差万別なのだ。たっぷりと時間をかけてシャルルは残念そうな表情を作る。

「おそらくグリッドさんの店じゃないかな？」

美姫の唇から聞きたくない名前が零れ落ちた。

俺は暗転しそつな意識をなんとか踏み止まらせる。

アラバスタ共和国の商業地区。営業時間の真つ最中なので各店舗の前には人集りが出来ていた。戦闘に身を置いていると忘れがちになるが、この世界でも生活の基盤は衣食住で成り立っている。なにかと脚光を浴びるのは魔物を討伐した賞金稼ぎだが、それを支えている職人や支援者、さらには日々の暮らしを維持してくれている生産者にも感謝しなくてはならないだろう。

通りの外れに俺は魔弾から得体の知れない魔導具まで取り扱っている武器店を捉えた。シャルルからの情報によれば、現在ザルイークは店と交渉中らしい。積極的に関わりたいとは思わないが、覚悟を決めて重い扉を開いて中へ踏み込む。

「いらつしゃい！」

店に入ると景気のいい声が響いた。しかし大柄な熊系獣人族である店主は俺の顔を確認するなり落胆する。ただでさえ友好的とは言えなかった関係が、ハシユシユとの二人旅をきっかけに、それはもう右肩上がりでも悪化しているからだ。

「なんだロンかよ……挨拶して損した」

「一度でいいから接客について本気で考えたほうがいいぞ。どこの世界に客に向かって挨拶して損したとか言う店主がいるんだよ？」

店主は両手を腰に当てて無然とした態度を取る。雑多に商品が並べられた店内には客が一人もいない。閑古鳥が鳴いている原因は言わずもなだらう。

「俺は常に客の立場になって考え、真摯に本音を伝えることが最高の接客だと思ってる」

「一見それっぽく聞こえるが、要するに言いたい放題やりたい放題ってことだろ？」

「そんなことはない。客に合わせて接し方を変えているだけだ」

割腹のいい店主は迷惑そうに俺を見据えていた。かけている眼鏡が微妙にずれていることさえ腹立たしく思えてくる。どうしてこの店が潰れないのか本気で理由がわからない。

「それで来店の目的はなんだ？」

問いかけながら店主　グリッド・ハイランドは椅子に座った。俺相手なら立っている必要もないらしい。客である俺が立っているのもおかしい話なので、雑然とした店内の中で腰を下ろせる場所を探した。鉄製の頑丈そうな棚の上に腰を落ち着ける。来店が空振りに終わらない確実な目的を告げておく。

「師匠が発注した品を取りに来たんだよ」

「……なん……だと？」

グリッドの表情が驚愕を象る。意味不明な俺は説明を求めた。

「どうした？」

「それはつまりハシユシユ嬢が店に来ないってことだろ？」

「まあ、そうなるな」

「おお……なんてこった。この世界に神は存在しないのか？」

糞店主の落ち込みが半端ないので俺は話を逸らせることにした。どちらかと言えば、こちらが本題だからな。

「ところでザルイークさんは来てないのか？」

「裏で届いた魔導具の検品をしている。もうそろそろ戻ってくるんじゃないか？」

絶望しながらも言葉を返してくるところは商売人の鑑かもしれない。それにしても熊みたいな巨躯が随分と小さく見える。なんとか熊系獣人族のハシユシユに対する盲目的な好意はアラバスタ共和国の七不思議に認定されるべきだろう。

「お、どうしたんだ？」

店の奥から作業着のザルイークが姿を現した。頭に布を巻いて赤茶色の髪が瞳に入らないように工夫している。特に魔導工学を勉強していた印象はないが、それでも猫系獣人族より重宝されるだから世の中わからない。

「シャルルさんにイリヤ商会の招待状を発行してもらったんですが、あとで揉めないようにザルイークさんの許可も取るように言われたんです」

「ほう、それでわざわざ俺を訪ねてきたわけか？」

ザルイークは雑多に積まれた商品を崩さないよう進んでくる。店主の傍らに立って二言くらい交わしたあと刻印の浮かんだ受領証を手渡していた。どうやら検品による不備はなかったらしい。それから俺の方へ視線を向けて表情を運び屋のそれに変えた。

「孤児院の仲間は家族も同然だ。許可する代わりに説明責任は果たしてもらおうぜ」

「そんな大層なことじゃありませんよ。イリヤ商会なら情報収集に

も適していると紹介されただけですからね」

「ロン、理解していないなら教えといてやる」

やんちゃ風な青年の瞳に厳しさが帯びる。

「お前から近況報告を聞いたあと少し調べたんだ。旅路の当初はハシユシユさんの電撃復帰が話題になるくらいだったが、中盤以降は弟子にすべてを伝授するための旅なんて噂まで立っていたらしい」

俺は苦笑で応じるしかない。注目度優先の噂にしては半年間の旅路が正当に分析されている。

「噂の信憑性に疑問を抱く性格ですが、今回に限っては完全に真実じゃないですか？」

「それが問題なんだよ。貿易組合キルドが超高額の賞金をかけていた『バジル』を討伐しちまったんだぞ？ ロンの力量を利用しようとする連中が現れるかもしれない。ハシユシユさんや俺とシャルルはともかく、孤児院の中には己の身を守れない連中も多い。人質に取られたとき非情な態度を貫けるのか？」

絶句 嫌な汗が背中を伝う。俺は当惑したまま言葉を紡げなかった。やれやれという風にザルイークは両手を挙げる。

「やはりなにも考えてもいなかったみたいだな。世の中には魔導工学の成績だけじゃ計れないこともあるんだぜ？ 特にロンは博識かつ冷静な判断を下せるくせに妙なところで抜けてるからな」

それは『人生』という平和な世界に甘んじていた危機管理能力の欠如の所為だろう。苛烈な戦闘に身を置きながらも、どこかで他人事のような感覚が抜け切れていない。俺は情報収集の目的を素直に

白状した。

「八英傑が集結するらしい祭典について調べようとしていたんです」  
「ほう、そりゃまた壮大な話だな。グリッドはなにか知らないのか？」

話を振られた店主は面倒臭そうに返答する。

「知らない武器商人がいるとしたら、そいつは今日中に廃業したほうがいいだろうな。おかげで各国の組合から商品の注文が殺到している。久しぶりに商魂を揺さぶられたよ。別に世の中が物騒になることを望んでいるわけじゃないんだがな」

間際だと入手困難になることを懸念した連中が先物買いしているのだろう。しかし腑に落ちないことがある。店内を隈なく見回していたザルイークが疑問を代弁してくれた。

「流行っているようには見えないんだが？」

「うちは卸が本業だからな。店そのものは倉庫を兼ねた窓口でしかない」

「まあ、いいさ。それでどんな話になっているんだ？」

「さあな」

グリッドはお手上げの仕種を見せながら首を左右に振る。

「八英傑の情報なんざ武器屋の領分を超えている。余計なことに首を突っ込まないのが長生きするための処世術さ。それに事が公になれば恐怖に怯えた連中の声に押されて政府や組合も動かざるを得ない。多額の賞金がかかれば、あとは猟犬どもの出番ってわけだ」

そして俺自身も猟犬の一匹に過ぎない。違いは求めているものが金でないことくらいだろう。

「話を聞く限り水面下で動きがあるのは確かだな。どうするつもりだ？」

ザルイークの怜悯な視線が俺を見据える。単独なら答えは決まっているが、孤児院に迷惑がかかるとなれば話は別だ。店主は腰を上げて商品の準備を開始する。おそらく沈黙を破るまで三分もかからなかっただろう。しかし随分と長い時間を要したような疲労感だ。

「もし誰かの陰謀が張り巡らされているなら不意打ちを食らうわけにはいきません。俺は魔王アーシエスの下僕ですからね。主を守るために犠牲が必要ななら甘んじて受け入れますよ」

「理解した上での行動なら好きにするさ」

会話の終わりを告げるように店主が魔弾の詰め込まれた木箱を棚の上へ並べ始めた。

「俺とロンの仲だ。検品はいいだろ？」

「俺とグリッドの仲だから検品が必須なんだろうが」

突っ込みながら俺は木箱の中身を確認する。発注通りの魔弾が理路整然と並べられていた。態度はともかく商売人としての誇りだけは失われていないらしい。検品を終えた俺に店主が謎の球体を放り投げてくる。受け取り手の中を確認すると第六式の魔榴弾だった。

「これは？」

「自殺用に持っていてけ」

言いながらグリッドは胸元から取り出した煙草を口に啜える。それから手早く火を点けて紫煙を燻らせた。俺とザルイークはどちらともなく顔を見合わせる。苦笑を浮かべたあと計らずとも同じ台詞を紡いでいた。

「そういう気障つたらしい行動が死ぬほど似合わないという現実についていい加減気付けよ」

刹那　がちやりと鈍い金属音が聞こえる。店主の構えた魔弾銃がこちらを捉えていた。本当に引き金を絞り兼ねない形相でグリッドが睨み付けてくる。俺とザルイークは脱兎の如く店から逃げ出した。

「魔力の供給なんて力の出し惜しみをしなければ時間のかかるものじゃないんです。一泊二日でも任務としては楽な部類ですよ?」

逃げるようにグリッドの店から飛び出した俺は、刻印の浮かんだ受領証をザルイークに託し、夕刻の便で魔導都市フォルガントへ向かっていった。その船内でハートレット姉妹と鉢合わせたのである。社交辞令で「一泊二日なんて大変だな」と労ったところ、姉フィリスに頼んでもいない説明をされているわけだ。ちなみにフィリアは使い魔に興味を抱いたらしく、猫のように俊敏に逃げ回る小動物を追いかけていった。

「ロンさん、どこへ行くんですか?」

甲板へ逃げ出そうとした俺にアルマダの高官は疑問符を投げかけてくる。なんとか子守を回避したかった俺は、ほとんど反射的に護衛団長の名前を告げていた。

「ベイリックさんに挨拶でもしておこうと思ってね」

「第三護衛団の団長ですか?」

問い返されてベイリックがアルマダ連邦所属の熊系獣人族であることを思い出した。高級職に就いている者同士として顔見知りなのだろうか?

「ああ。ひょっとして知り合いだったりするのかな?」

「ええ、まあ。お互い現場好きの異端者でしたからね」

言いながらフィリスは苦笑を浮かべる。見た目が子供にしか見えない所為だろうか、無理に背伸びをしているような仕種にしか見えない。甲板へ向かう俺に付き従いながら幼女は会話を続けた。

「優秀な生成系魔術の使い手でしたが、どうにも指導より戦闘を好む傾向がありまして、あれよあれよという間に護衛団長へ就任していました」

「確かに戦闘好きの印象は受けたな」

曲がりなりにも理由付けはしていたが、やはり乗客に一騎討ちを挑むのはどうかしている。不意にアルマダ連邦の高官は腕を組んで一考し始めた。歩みを止める気配はないのでそのまま進んでいく。

「確か第三護衛団は今夜アルマダ連邦へ到着するはずです。休日を挟んで定例会に出席する予定ですからね」

「ふーん、それじゃあ、この飛空艇に乗船している可能性は零ってことだな」

他愛もない言葉を交わしながら俺たちは甲板へ上がった。視界に広がる光景に思わず感嘆の声を漏らしてしまう。夜の空とは異なり陽が沈む途中の幻想的な色彩が一望できたからだ。ここまで美しい世界は『グランシエル』独特のものかもしれない。もっとも『人生』において秘境や絶景巡りを経験したことがない俺の発言だけに信憑性は皆無である。

「……すげえ……」

単純な感想を漏らす俺にフィリスは憮然とした。

「山脈地帯の多いアラバスタ共和国、魔導都市ファルガント間より

高原地帯の多いアルマダ連邦、魔導都市ファルガント間のほうが美観に優れていますよ？」

幼女は口を尖らせながら解説する。どうやらただの負けず嫌いじゃなかった。

まあ、負けるが勝ちを実行してくる子供は嫌だからな。強がりや見栄っ張りな部分があったほうが可愛い。ふと空を見上げると船室への出入り口となっている場所に少女が鎮座していた。つまり俺とフィリスが抜けてきた扉の屋根部分に腰を下ろしている。

「なにか？」

東方系の軽鎧に身を包んだエルフ族の少女は疑問符を落としてきた。ここで曖昧な返答をしても怪しまれるだけなので、むしろ怪しいのはあなたですよと強気で応じてみる。

「そこでなにをしているんだ？」

「知れたことを聞く奴だな。飛空艇の護衛に決まっている」

腰までありそうな長い白銀髪を後ろで束ねたエルフ族の少女は、鞄に納められた得物を持ち上げて屋根に突き立てる。その態度が気に障ったのかアルマダ連邦の幼女が短い腕を精一杯突き上げて吼えた。

「単なる見張りのくせに偉そうにするな！ 乗客を見下ろしながら説明するなんて護衛団失格なんだぞ！」

子供が駄々を捏ねているようにしか見えないのだが、どうやら白銀髪の少女には訴えるものがあつたらしい。ゆらりと立ち上がり屋

根の上から飛び降りてくる。

「失礼した。不法法を咎められたことは多々あるゆえ、おそらく今回も私の言動に問題があったのであろう」

深々と頭を下げる少女の態度にフィリスは自尊心を保てたらしい。急に大人振って「わかればいいのです」と怒りを鎮めた。このまま別れるのも気まずいので、俺は得意の社交辞令を発動させておく。

「魔導都市フォルガントまでよろしく頼むよ」

「承知している。客人を無事に送り届けることが私の使命だからな」

エルフ族の少女は俺と傍らに立つ幼女の顔を交互に見やる。やがて得心したのか、ぽんつと手を打った。

「不倫旅行だな」

「いろいろ思考を巡らせて一番遠いところを選択してんじゃねえよ！ というか変な噂が立とうものなら俺は常闇の魔女に世界で最も残酷かつ斬新な殺され方をするだろーが！ あと不倫旅行中の二人を見つけても絶対に不倫旅行とか言っちゃ駄目だからな！」

尋常ではない突っ込みで白銀髪の少女と幼女が怯えたように身を引いた。ほどなくして冷静さを取り戻した俺は猛り狂ってしまったことを謝罪する。

「悪いな……凄惨な未来が脳裏を過ぎったものでさ」

「いや、気にするな。私の軽率な発言に問題があったのだろう」

「こういつときは仲直りの印に自己紹介でもしたらどうですか？」

フィリスが似合わない先生口調で提案してくる。とはいえ名案で

あることに疑いはない。俺は幼女に感謝の合図を送ってから傍らに立つ少女へ向き直った。

「ロン・ラズエルだ。こっちはフィリス・ハートレット」

「私は第七護衛団のサクヤだ。家名はない」

家名はない。その言葉に過去が蘇る。生まれて間もない俺に名前だけを残して消えた母親。しかし白銀髪の少女は名前さえ与えられなかったらしい。だからどうしたと言われればそれまでだが、俺は出会ったばかりの少女に随分と親近感を覚えていた。

「不幸自慢をするつもりはないが、俺もアラバスタ共和国の孤児院出身だ」

「不要な気遣いだな」

サクヤの瞳に得体の知れない感情が宿る。不穏な空気を察したのかフィリスが話題を変えようと画策した。アルマダ連邦の高官という肩書きは伊達じゃないらしい。

「ところでほかの護衛団の方は休憩中なんですか？」

「いや、今は私しかない。第七護衛団は交代制なのだ」

「ん、ちよつと意味がわからないぞ？」

俺は直立不動の護衛に問い返した。白銀髪の少女は不思議そうな表情を浮かべる。

「私が休みを取るときは別部隊が乗務し、私が乗務するときは一人で飛空艇を守っている」

「冗談ですよ？」

俺より先にフィリアが反応する。一人で任務に就いていると言われれば、誰もが似たような疑問を口にすることだろう。特に命を預けているような状況なら尚更だ。

「私一人では不服と申すのか？」

「当然でしょう！ 作戦行動は最低でも二人組です！」

その後が発せられた「私でも一人任務なんて任されたことがないのに」という呟きを俺は聞き逃さなかった。しかし口論を制する間もなくフィリスはサクヤに噛み付き始める。

「あなたが一人で飛空艇を守っているなんて信じられません！」

「しかし事実なのだから仕方あるまい」

「責任者はどこですか！ ちゃんと飛空艇を守れる護衛団を要請してきます！」

幼女は精一杯腕を振り上げて抗議していた。負けず嫌いもここまできると逆に清々しいな。しかしそれは受け取る側の問題だろう。そしてもちろんエルフ族の少女はそう受け取らなかった。

「そこまで愚弄されると私も黙っていられぬぞ？」

「へへーんだ！ あなたなんて私の魔術で『ぺぺいっ』ですよー！」

幼女は短い手足を慌しく動かしながら挑発する。というか「ぺぺいっ」てなんだ？

それはともかく段々と雲行きが怪しくなってきた。

「ここで引いては斬魔刀『焰』<sup>ほむ</sup>を所持する者の名折れ」

サクヤは鞘に収められた刀を甲板に突き立てて宣言する。

「フィリス・ハートレット。私と尋常に勝負せよ」

「おいおい」

仲裁に入ろうとする俺をフィリスが押し退けた。もちろん力尽くでどうこうなるわけではないのだが、その意思を汲み取って道を譲るのが筋に思えたのである。

「望むところです！ ロンさんには立会人をお願いしますね」

幼女は俺を一瞥して片目を閉じた。本当にやれやれである。どうして飛空艇に乗船する度に立会人をしなければならぬのだろうか？ 俺は盛大に溜め息を吐きながら首肯した。

飛空艇の前方部分でフィリスとサクヤが対峙している。両者の熱い視線が交錯する中心、そこから後方へ下がった場所に俺。つまり対戦者二人と立会人で三角形を描いている。さらに甲板の後方部分には、どこから聞き付けたのか好奇心旺盛な乗客が集まっていた。演出の一つと勘違いしているのか、酒杯を片手に賭けを行う連中まである。とはいえ護衛団長とアルマダ連邦の高官が私情で決闘するとは考えないだろうから、まあ、乗客を楽しませるための催しと受け取れることは自然な流れなのかもしれない。

「俺が『勝負あり!』と宣言したら終わりだからな。それと間違っても本気を出すなよ。互いに怪我でもしようものなら大問題だからな」

俺は立会人として基本的な事項を述べておく。両者とも素直に首肯する。ここで揉めるようなら試合どころではないので当然だろう。

「心配無用だ。加減は心得ている」

言いながらサクヤは鞘から刀を抜いて正眼に構えた。一人で飛空艇の護衛を任されるくらいなので、てつきり索敵に特化した術者と思っていたのだが、どうやら正攻法の剣術にも覚えがあるらしい。

「ふふーん、本気を出すまでもありません」

アルマダの高官は腕を組んで高笑いしている。見た目が幼女なので強がってるようにしか見えない。とはいえ一国の高位魔術士と護衛団長の戦闘が拝めるのはいい機会だ。対魔物に比べて対人戦は心

理的な駆け引きの勉強になるからな。俺は対峙する二人の顔を交互に見やり最終確認を取る。

「準備はいいか？」

「無論」

「もちろんです」

確認を済ませた俺は中空を手刀で切りながら試合開始を告げる。

「始め！」

次の瞬間、フィリスは水属性魔術「水槍<sup>ペリン</sup>」を詠唱。構えた右手人差し指の先端に小さな水色の魔術組成式が展開。高濃度に圧縮された水を弾丸のように撃ち出す。しかしサクヤは超高速で飛来する水の弾を刀で切り捨てた。本来なら魔術の痕跡が甲板に落下するのだが、どういいうわけか切られた水の弾は跡形もなく霧散する。

「おおーっ！」

最初の攻防だけで観客からざわめきが巻き起こる。無理もない。幼女は高位の詠唱<sup>ファストキャスト</sup>短縮特性を修得しているのか、本来必要な詠唱時間を四割近く省略<sup>カット</sup>しているし、白銀髪の少女は華麗な剣技で攻撃魔術を退けたのだ。

「やりますね」

無邪気に感心しながらフィリスは「水槍」を連続で詠唱していく。ほんの数秒で合計十二発の圧縮弾が発砲されたが、そのすべてがサクヤの斬魔刀によって掻き消された。どうやら斬魔刀「焰<sup>ビシ</sup>」には魔術を打ち消す力があるらしい。存在しない職名を無理矢理に付ける

としたら、魔術剣士ではなく退魔刀士といったところだろうか？

「守ってるだけじゃ勝てませんよ？」

幼女は軽口を発しながら雷属性魔術「ライザー雷迅鞭」を詠唱。紫色の魔術組成式から生み出された紫電の蛇が白銀髪の少女に襲いかかる。誰もが退魔刀士の対応に注目していたが、俺だけはフィリスの不敵な笑みを見逃さなかった。

「ロルカ>氷刃弩<」

展開された魔術組成式から氷の刃が放たれる。そして先に発動されていた「>雷迅鞭」と魔術反応を引き起こす。まず上層と下層の電位差が拡大して空気の絶縁限界値を超えた電子が放出される。放出された電子は空気中にある気体原子と衝突して電離。それによって生じた陽イオンが逆方向に働いて新たな電子を叩き出す。この二次電子が電子雪崩を引き起こし、持続的な放電現象を生み出して稲妻プラズマを発生させる。大電圧と大電流に注意が向けられているが、原形質が引き起こされるほどの熱も油断ならない。

「くっ！」

高速の「>水槍」に対応したサクヤだが、超高速の雷撃を打ち消すことはできなかった。即死級とされる六千六百ボルトを一万倍上回る電圧と電流が直撃。しかし前衛特有の強靱な肉体と緊急時に発動するよう仕込まれていた治癒系魔術による細胞蘇生で一命を取り留める。全身に重度の火傷を残しているが白銀髪の少女は気にする様子も見せない。

観客の歓声が悲鳴に変わる。危険を察知した賢い連中は船内へ避

難していく。

ともあれ俺は驚愕を禁じ得なかった。

まず詠唱を要しない魔銃士の専売特許である魔術反応を魔術士に使用されたことが挙げられる。これは二重魔術ダブルキャストという手法を用いるのだが、理論上はともかく実際に扱える魔術士を初めて見たからだ。次いで不死身を想起させる退魔刀士の生命力と治癒系魔術の組み合わせに唸らされる。これはもう対人戦の域を遥かに凌駕しているだろう。

「次は私の番だな」

言うが早いかサクヤは柄を顔のやや右に持ち上げて構えを八双に変更。どの方向から攻められても対応しやすい反面、素人目にも明らかかな正面の隙が弱点となる。反撃カウンターに徹するかと思いきや甲板を蹴り付けて一気に距離を詰めた。

「花蓮かれん」

退魔刀士の放った一閃に花弁を散らしたような組成式が発生。異形の魔法陣にフィリスは眉を顰ひそめた。白銀髪の少女は身体を反転させて第二の太刀を振るう。

「鳥飛ちよっぴ」

突系の剣技を幼女は風属性魔術>風々障壁バリアールを発動させて防御。竜の吐息さえ凌ぐ風の結界を前にしては強烈な剣圧も無力である。しかし鳥の羽根が舞う組成式が展開し、それから魔術反応を起こしたような現象が発生。炸裂したように大気が瞬間膨張して衝撃波を引き起こした。フィリスは大きな瞳を見開く。どちらかの肩を持つ

つもりは毛頭なかったのだが、ほとんど反射的に俺は把握した情報を口にしてしまう。

「魔術反応を剣技で起こしているのか？」

もし事実なら魔術剣士とは根本的に性質が異なる。魔術を宿らせて技を放つ魔術剣士に対して、サクヤは技を放つことで魔術に似た現象を引き起こしているからだ。そしてそれを連携させることで物理干渉を発生させている。

「ゴ名答。斬魔刀『焰』ほむひは魔術を殺し、私の剣技は魔術を錬成する」

エルフ族の少女は解説しながら悪鬼の如く笑みを浮かべる。次の瞬間、下方から半円を描くように刀を軌道させた。

「かざまつり風祭」

組成式である黄緑色の突風が上空へ吹き上がる。そこから強力な電磁場が発生。魔術反応の規模が明らかに拡大強化されている。おそらく「悪魔の遺産」と呼ばれる魔弾銃で高位魔弾を魔術反応させたような状況に近いだろう。フィリスの表情が子供から高位魔術士のそれに変化した。

「ツキ堅獄檻ク」

雷属性に優位な土属性魔術>堅獄檻クを発動させて防御に徹する。本来なら敵を閉じこめる魔術だが、その堅牢さを臨機応変に利用したのだろう。電磁場によって高密度に集束された電子が共鳴しながら周囲を漂う。それは強力な赤外線レーザーに等しく、触れた者を灼いて溶解させる威力を持つ。

そこでふと俺は我に返った。この戦いは決闘であって殺し合いではない。

「おい、二人ともそこまでだ！」

しかし俺の声は二人に届かない。白銀髪の少女は次の連携技を放とうとしている。アルマダ連邦の高官も迎え撃つ気満々の表情を浮かべていた。とはいえ立会人として放置できる状況ではないだろう。

「糞っ垂れ」

潜在意識を呼び起こした刹那、世界が停止したかのように静まり返る。しかし実際に止まっているわけではなく、俺の処理能力が限界まで加速されているだけだ。ゆえにこうしている間にもサクヤとフィリスの距離は縮まっていく。俺は全力で駆け出して二人の合間に身体を挟み込む。剣技が繰り出される前に漆黒の魔弾銃で刀の軌道を制し、空いた手でなにやら詠唱中らしい幼女の口を塞いだ。実際の時間に換算すれば一秒以下の世界だが、それだけでも心臓にかかる負担は半端ではない。

「二人とも落ち着け。本人は六分の力で遊んでいるだけかもしれないが、観客にとっては命懸けの見学になってるみたいだぞ」

俺は可能な限り気楽な口調で説得した。俺の存在に白銀髪の少女と妖精族の幼女は驚愕の表情を象る。しかし強い自尊心と負けず嫌いな精神がそうさせるのか、それぞれ周囲を確認して、それから本気で戦っていたわけではないという素振りを見せた。

「引き分けで構わないな？」

俺の質問に回答は素直に返さる。じゃあ一件落着くといいやないか  
ておじい。

長旅を終えて魔導都市フォルガントへ到着。三国の入管に比べて怖ろしく簡略化された手続きを済ませて港を出る。まさか二日で舞い戻ることになるとは考えもしなかったが、半年間の武者修行で何度も訪れた土地は今や第二の故郷と呼ぶべきだろう。

まだ薄暗い午前六時の街路を進んでいく。大規模な組合ギルドは二十四時間誰かしら配置しているので、この時間帯から移動を始めても早く着き過ぎたという事態は起こらない。

「待ってくれ」

背後からの呼び声に俺は警戒しながら振り向いた。視線の先に白銀髪の少女を捉える。医療班による手当てを受けたのか重度の火傷が綺麗に回復していた。損傷した軽鎧も新品に着替えたらしく、凛々しい立ち居姿は初見時に戻っている。

「どうした？」

「貴殿には感謝している。もし制止がなければアルマダ連邦の高官を殺めていたかも知れぬからな。私としたことが好敵手を前に我を忘れてしまったらしい」

「俺も人のことを言えない立場だから気にするな」

サクヤの瞳に興味の色が帯びる。次に発せられる言葉はなんとなく予想できた。

「貴殿ともいつか勝負してみたいものだな」

「俺は遠慮願いたいね。それにアルマダ連邦の高官を殺めていたか

も知れないという判断は早計だ。フィリスはフィリスで緊急用の手段を用意していたみたいだからな」

「むむ。それは真か？」

白銀髪の少女は拳を握り締めながら詰問してくる。

「ああ。ファストキャスト リミット 詠唱短縮に制限をかけているみたいだったからな。おそろくリミットブレイク 限界突破すれば高位魔術を即時発動できたんじゃないかと推測している」

ダブルキャスト 「二重魔術にも驚かされたが怖ろしい魔術士だな」

「まあ、ああ見えても一国の高官だからな」

「ふむ。ならば貴殿は命の恩人ということになるな」

「あくまで推測だ。実際にどうなったかなんて誰にもわからないよ。だから命の恩人とかそういうのはなしだ」

俺は肩をすくめて補足説明した。しかしエルフ族の少女は斬魔刀の柄を握り主張する。

「この恩、斬魔刀『焰』ほむ に誓って必ず報いる所存だ」

「それならまず俺の話聞いてくれ」

「ちゃんと聞いているではないか？」

肩を落とす俺にサクヤは不思議そうな表情を向けてくる。しっかりしている印象を受けていたのだが、どうやら若干残念な要素が含まれているらしい。ともかくこの話題を長引かせてもろくなことがなさそうなので俺は早々に方針を変える。

「まあいい。ところで教えてもらいたいことがあるんだが？」

「答えられる範囲ならなんでも聞いてくれて構わないぞ」

「サクヤはイリヤ商会の場所を知っているか？」

「うむ。届け物の依頼か？」  
「いや、ちよつとした情報収集が目的だ」

俺の回答にサクヤは怪訝そうな表情を浮かべる。しかし恩人に根掘り葉掘り聞くべきではないと判断したのか、白銀髪の少女は何事もなかったように話を進めた。

「ともかくイリヤ商会へ辿り着ければいいのだな？」

「ああ」

「承知した。説明は苦手なので直接案内しよう」

わざわざいいよと発しかけたが途中で言葉を飲み込む。案内すること恩を返したと感じてくれるなら、こちらにしても好都合だし、誰かが困るわけでもないので拒否する理由がない。

「よろしく頼むよ」

その声で目を覚ましたのか使い魔は小さな寝袋から顔を出した。しかしまたすぐに顔を引っ込める。どうやらフィリアとの鬼ごっこで相当疲れているらしい。

「いらつしゃい。ご用件は？」

猫系獣人族の受付嬢がにこやかに微笑む。語尾に「にゃ」と付けるのはアラバスタ共和国の方言みたいなもので、他国や魔導都市に移住している猫系獣人族の女性は矯正された言葉を使用する。港区から魔導列車に揺られること一時間、俺はサクヤの案内で目的の場所へ到着していた。

イリヤ商会。

仲介を主要業務としているためか組合内は閑散キルドとしていた。賞金稼ぎで奔ひしめく換金所の混雑を見慣れている所為か、依頼者と運び屋の溜まり場を想像していたのだが、どうやら請け負う業務によって事情が大きく異なるらしい。

「これはここで渡せばいいんですか？」

言いながら俺はシャルルに発行してもらった推薦状を提示する。受付嬢の反応を見て傍らに立つサクヤが首を傾げた。確認のため猫系獣人が後ろへ引つ込むとエルフ族の少女は質問を投げかけてくる。

「珍しいものなのか？」

「どうやらそうらしいね」

「禁制品か？」

「いや、組合に登録するための推薦状だ」

相変わらず変な読みをしてくるサクヤに俺は羊皮紙の正体を告げた。図書館での成り行きを話すうちに受付嬢が席へ戻ってくる。さつきより親しげな雰囲気醸し出しているのは間違いなくシャルル効果だろう。仕掛けを解けば推薦者の情報が表示されるだろうし、そしてなによりあの美貌を見てなにも思わない女性はいないからだ。

「ひよつとして、あなたがロン・ラズエルくん？」

確認報告そっちのけで不躰な質問が飛んでくる。妙齡の受付嬢は俺とサクヤを交互に見やり確信の笑みを浮かべていた。シャルルと世間話をする程度には仲のいいらしい猫系獣人を適当にあしらうわ

けにもいかないだろう。

「ええ。変わり者でお馴染みのロン・ラズエルです」

銀髪の青年が枕詞に使いそうな単語を織り交せて自己紹介を済ませておく。皮肉が受けたのか受付嬢は手で口を押さえて笑いを堪える。しばらくすると業務を思い出したかのように部屋の奥を指し示した。

「とりあえず登録手続きをしないと駄目だから奥の扉から中へ入ってくれる？」

俺は傍らに立つ白銀髪の少女へ視線を送る。その行為で意味を察してくれたらしく、受付嬢は片目を閉じて悪戯な笑顔を寄越した。

「彼女さんも一緒にどうぞ」

嫌な予感しかしなかったが、俺は敢えて突っ込まない道を選択する。掘り起こしたところでもろくな結果にならないことは明確だからだ。指示に従い扉を抜けると受付嬢に妖精族の青年を担当として紹介される。

「八英傑が集結する祭典ね」

案内された部屋は簡素な応接室といった場所で、長机を挟んで三組ずつ椅子が設置されている。一方に俺とサクヤが腰を下ろし、対面にイリヤ商会の担当が着席した。

「なにかわかりますか？」

「歴史的に紐解けば難しいことじゃないさ」

外套に身を包んだ妖精族の青年は端的に告げる。眼鏡を少し押し上げながら思考を巡らせているらしく、体型は子供でもハートレット姉妹と異なり表情に知性が滲み出ていた。

「一定の周期で歴史は劇的な変化を遂げている。その原因は未だに解明されていないが、そのきっかけが魔石に纏わるという伝説は多い。八英傑は俗世とも魔物とも関わらない異質の存在とされているが、果たしてその神話がどこまで信用足るものかも現在では不明だ」

そこまで解説して妖精族の担当は大げさに肩をすくめた。

「おっと、悪いね。歴史の考察をしている場合じゃなかった」

「いえ、それは構いません。ところで有力な情報は得られそうですか？」

「どうか。ここは情報を専門に扱っているわけじゃないからね」

「含みのある言い方に聞こえますが？」

その言葉を聞いて妖精族の青年は愉快そうに微笑む。

「事情はともあれ組合に登録したのだから、一つ我々の仕事を引き受けてくれないかな？ ほかに任せられそうな強者がいなくてね」

「依頼人と宛名を聞いてもよろしいですか？」

「依頼主はアジド・マクベル、宛名はラクシュミ天竺山に棲むシルフイード風の精霊だ」

「風属性の魔王ではないか！」

白銀髪の少女は腰を浮かして叫ぶ。妖精族の担当は肩をすくめるだけで反論するつもりはないらしい。俺はもう一つの疑問を解消することにした。

「アジド・マクベルの詳細は？」  
「アジド・マクベルは僕だ。なにも聞かずにある品を届けてくれるだけでいい」

妖精族の青年は椅子から降りて歩き始める。即答は期待していないということだろう。見計らったようにサクヤが肘で俺の脇腹を小突く。

「話が出来過ぎていないか？」

「どの世界でも出る杭は打たれるからな。それを逆手に実力を証明しておくのも悪くないさ」

「ふむ。ならば私が口を挟む余地はないな」

「そうしてもらえると助かるよ」

道標がない以上、回り道も致し方ない。

「団長には個室が与えられているのだが、団員は基本的に相部屋しか存在しないのだ。状況によれば貸切も可能だが本日はそうもいかないらしい」

「いやいや、予定していた宿に比べれば天と地ほど差があるからありがたいよ」  
「それはよかった」

イリヤ商会でアジドの依頼を引き受けた俺は、その足で風の精霊シルフィードの棲む天竺山ラクシムミへ向かおうとしたのだが、なんの準備もなしに数日間及び登山は困難と制されたのだった。さらに山岳地帯に必要な準備を整えた頃には陽が落ちかけていて、今度は夜間の登山は危険という理由で旅立ちは翌日の朝に持ち越される。そんなわけで宿泊場所を探そうとしたところ、サクヤに護衛団が利用している施設を紹介されたわけだ。

駆け出しの賞金稼ぎが泊まる宿なんてのは、大部屋に複数の寝台が設置されているだけの粗末な場所が多い。要するに眠れればいいわけで、それ以外の設備を求めていないのだ。新進気鋭の若手ならもう少しいい宿に泊まれるのかもしれないが、魔銃士という銭投げ職を選んでしまった以上、贅沢を堪能する前に魔弾や魔弾銃の整備に資金を回さなくてはならない。つまりエルフ族の少女に案内された仕切りのある三人部屋は、無料という悪魔の囁きを含めて極上の待遇だったのである。

「ここから西が大浴場、東は食堂となっている」

「好きな時間に利用できるのか？」

「大浴場は明け方の清掃時間以外は自由だが、食堂は朝昼晩と細か

に時間設定されている。夕食は午後六時から九時までに注文を済ませなくてはならない」

「それなら先に風呂を済ませてから食事だな」

俺は部屋に備え付けの魔導金庫に荷物を収めながら返答する。白銀髪の少女は「承知した」と首肯して退室した。入寮時に余剰客である許可は得ているので、単純に団長用の個室へ向かったのだろう。

「とりあえず移動だな」

施設専用の寝巻きを手に取り俺は大浴場を目指した。途中で擦れ違った数名に会釈を返しておく。わざわざ別部隊の顔を覚えていないのか、あるいは見知らぬ来客に慣れているのか、特に不審がられないこともなく目的地へ到着する。かなり広めの脱衣所で服を脱ぎ始めると背後から声をかけられた。

「おお、常闇カルナバルの魔銃士ではないか！」

振り向くと熊系獣人族の大男が豪快な笑みを浮かべている。アルマダ連邦所属の第三護衛団長のベイリックだ。鎧を着ていないので筋肉隆々の肢体が露にされている。

「ご厄介になります」

「それは構わないさ。しかし誰に紹介されたんだ？」

言いながら団長は巨漢を纏う衣類を脱ぎ捨てていく。俺もそれに倣って風呂の準備を進める。脱衣所は二人きりなので特に隠し事をする必要もないだろう。

「サクヤさんです」

「ほづ。喧嘩でもふっかけられた縁か？」  
「……………」

喉まで出かかった突っ込みをなんとか飲み込む。熊系獣人は眉根を寄せた。

「どうした？」

「いえ、なにも。一騎討ちを挑まれたというより立会人を頼まれたんですよ」

「サクヤに勝負を挑む馬鹿な乗客がいたのか？」

「フィリスさんですよ。確か知り合いなんですよね？」

「ぬははははは、その場に居合わせなかったことが悔やまれる組み合わせだな」

ベイリックは額に手を当てて豪快に笑う。その声を聞き付けたのが大浴場の扉が開いた。白銀髪を頭の上に結び上げた少女が不愉快そうな顔でこちらを見やる。

「もう少し静かに　おお、ベイリック殿ではないか！」

「ぬははははは、サクヤの噂話を聞いていたところだ」

歓談する二人と裏腹に俺は全力で視線を逸らしていた。なぜならエルフ族の少女が生まれたままの姿で仁王立ちしているからである。団長が疑問を呈していないので混合なのかもしれないが、いきなり全裸の女体を目の当たりにしたら平常心を保てない。

「奥にいるのはロンか？」

ゆっくりと足音が近付いてくる。俺は片手で両目を覆い隠しながらも片方の手を左右にぶんぶん振った。

「わわわ、こつちにくるんじゃない！」

「失礼な奴だな。私はロンを心配しているのだぞ？」

「だったらまず胸を隠してくれ！」

「宗教上の制約か？」

「違う！ 道徳的な問題だ！」

「ふむ。見せろと言われたならともかく、隠せと言われて断る理由は存在せぬからな」

一瞬の間を置いてサクヤは「もう大丈夫だ」と告げる。俺は中途半端に脱いでいた服を穿き直しながら少女を振り仰いだ。

「ぐわっ！」

それぞれの胸を左右の手で鷲掴みにして隠すという全裸より扇情的な格好になっていた。俺は即座に顔を逸らして文句を発する。

「腕を使つて隠すとかあるだろ！」

「注文の多い奴だな。しかしロンが望むならやぶさかではない」

「なんでもいいから早く頼む！」

「しばし待たれよ」

なにやらベイリックに確認を取りながら胸を隠しているらしく、その過程で「立派」やら「粗末」という単語が飛び交う度に鼓動が高鳴る。おそらく当人たちはまるで意識していないのだろうが、俺の中では股間に位置する棒状のなにかを想定してしまうからだ。

「常闇の魔銃士、もう大丈夫だぞ」

俺は立派な一物を持つであろう熊系獣人の声に従い振り向いた。

綿織物を身体に巻き付けたエルフ族の少女と視線が重なる。そういう便利な物があるなら最初から使えと突っ込みかけて、やはりそれはこちらの都合だなと言葉を飲み込む俺だった。

「取り乱して悪かったな」

「本当は鍛え上げた肉体美をじっくり見てほしかったのだが、道德上の問題で女体を見られないのであれば仕方あるまい。しかし私がロンの身体を観察することは問題ないのであるう？ 戦闘を制した最後の動きはどのような肉体から生み出されているのか知りたいのだ」

言いながらサクヤは俺の衣服に手をかけてくる。真剣な面持ちをしているがやっていることは痴女と変わらない。俺は下半身を死守しながら助け舟を求める。

「ベイリックさん、なんとかしてください！」

「俺に振られても困るな。それに見られて減るものじゃないだろ？」

「そういう問題じゃないでしょう！ というか俺の場合は夢とか希望が減るんです！」

すでに全裸の熊系獣人は大げさに肩をすくめるだけだった。白銀髪の少女は俺の対応に少し腹を立てたように告げる。

「世の中には裸の付き合いという言葉があるだろう？」

「それは男同士限定の話だ！ 男と女が裸で風呂に入ったら突き合いにしかならねえよ！」

「むむ。その話を詳しく聞かせてもらおうとしよう」

「すいませんでした！ 全面的に俺が悪うございました！」

そこには下劣な猥談を振った直後に最敬礼する俺がいた。これも

『人生』で培った駄目な部分の影響だろう。あの頃は話題の半分が腰から下ということもよくあったからな。

「ともかく続きは大浴場に移動してから話したらどうだ？」

「確かに全裸で話し合っているのは風邪を引くかも知れぬからな」

先行する全裸の熊系獣人と綿織物で身体を包んだエルフ族の少女を見送りながら、俺は脳裏に焼き付いた禁断おっばいの果実をぶるんぶるんと揺らしてみた。半端ないな。そしてこの行為までが不可抗力なのだろうと勝手な結論を導き出しておく。それから俺は手拭いで股間を隠して大浴場へ足を向けた。

岩石で作られた湯船はさながら温泉といった風情を醸し出している。ほかに利用者の姿はなく、広々とした大浴場は貸切状態だった。俺は手桶で身体の汚れを洗い落としてから湯に浸かる。武者修行の旅中は安い宿ばかり選んでいたこともあって、こういう骨休めができる設備の重要性を理解していなかったのかもしれない。

「極楽、極楽」

つつい年寄り染みた台詞が口を衝いてしまう。温かい湯が筋肉だけでなく脳まで弛緩させているのかもしれない。ベイリックやサクヤも俺と同様に表情を緩ませていた。そんな状況とは裏腹に話題は必然的にイリヤ商会で請け負った案件となる。

「ベイリック殿は風属性の魔王について存じておらぬのか？」

「知識としてなら聞いた話がある。風の精霊シルフィードは感情が希薄で好意も敵意も乏しいため、基本的に友好関係や敵対関係へ至ることはないらしい。人族に似た容姿をしているが直接物を動かす力はなく、その代わり風を自在に操り大気と同化可能な能力を持っている。任務中に聞いた話を整理するとこんな感じだな」

「話を聞く限り強敵には思えぬのだが？」

「風の精霊は八英傑の中でも特殊なのかもしれないな」

団長は両手で湯を掬い頭から被る。俺は別視点からの質問を投げかけた。

「アジド氏の届け物について心当たりはありますか？」

「現時点では八英傑より周囲の動向が激しいからな。有力者連中は

誰へ肩入れするかで相当頭を悩ませているらしいぞ。まあ、それさえも噂という可能性を否定できないがな」

「むむ。それはつまり八英傑が対立しているということか？」

「八英傑が積極的に敵対することはないだろうさ。しかし扇動者がいれば話は変わってくる。それこそ三国間の同盟が破棄されるような出来事さえ起こるかもしれない」

「そんなことになれば魔物から国民を守れなくなるではないか！」

少女の瞳には正義の炎が宿されている。熊系獣人はやれやれという風に肩をすくめた。

「俺を責めても仕方ないだろ。それにあくまで仮定の話だ」

「とりあえず依頼をこなしてイリヤ商会の信頼を勝ち取るしかないさそうですね」

「シャルルとかいう小僧に担がれた可能性はないのか？」

「そこから疑い始めたら切りがありませんよ」

団長の言葉に今度は俺が肩をすくめることになった。それからなにかわかったら教えてくださいという流れで話を打ち切る。目指すべき方向が明確なら具体的な推測も可能だが、現段階の材料で知恵を絞り出そうとしても無理があるだろう。湯船を上がり身体を洗おうとする俺にエルフ族の少女が嬉しい申し出を投げかけてくれた。

「背中を流してもいいだろうか？」

振り返る俺にサクヤは語を継ぎ足していく。内容はともかく表情は真剣そのものだった。

「背後からなら肌の露出を見せてしまうこともないだろうかな。しかしそれでも気になるというなら行為中は瞳を閉じてくれればい

い  
」

女の子にここまで言わせて断るのは失礼だろう。俺は「よろしく頼むよ」と応じて椅子の役目を果たしている檜の板に腰を下ろした。

「失礼する」

そう告げてサクヤは手桶に汲んだ湯を俺の背中にかける。それからしばらく間が空いたのは手拭いを泡立てているからだだろう。どんな世界であつてもそこに文化が存在する限り生活は大差ないのかもしれない。そんな高尚な思考を巡らせていると背中に柔らかな感触が伝わってきた。

「うおーい！」

俺は反射的に立ち上がり背後を見やる。そこには胸や腹を泡塗れにした白銀髪の少女のきよとんとした表情があつた。

「な、な、な、なにやっつてんだよ！」

「背中を洗っているだけではないか？」

「どんな特殊浴場だよ！ 普通に背中を流してくれるだけでいい！」

俺は視線を外しながら激しく突っ込む。するとサクヤの不満げな声が聞こえていた。

「ロンは意外と物を知らないな。これは百戦錬磨の女騎士団副団長殿が教えてくれた殿方を喜ばせる方法なのだぞ？ それはもう得意そうな顔で『これをされて嬉しくない男は存在しない』と断言されていた」

「けしからん副団長だな！」

「しかしこの方法が気にいらなとなれば、私にロンの性癖を満足させることは不可能かも知れぬ」

「真剣に悩むのはやめろ！ 俺の価値がただ下がりじゃないか！」

ベイリックは湯船に浸かったまま鼻歌を奏でているし、泡姫と化したサクヤを窘めてくれる存在は皆無だった。ともかくこの気まずい状況を打開するべく俺はエルフ族の少女に声をかける。

「ともかくまずは胸を隠してくれ。それとこつという行為は命の恩人だからという理由ですべきじゃないんだよ」

「気高いな」

ぼつりと白銀髪の少女は呟いた。その言葉が気になり俺は問い返してしまふ。

「どういうことだ？」

「副団長殿はこうも言っておられたのだ。『もし行為を拒絶し窘めてくれる男がいたなら、その男は本物だから絶対に手放してはならない』とな」

「ふーん、ただけしからんだだけの副団長じゃなかったんだな」

「ゆえに私はロンの側室を目指すことに決めた」

「なぜ正室を目指さない！」

「正室は常闇の魔女しかおらぬだろう？ 私は分を弁えているのだ」

「……健気過ぎて扱いに困るだろーが？」

「それを期待しているのだ。副団長殿は優しさに付け込めと仰っていたからな」

「やっぱりけしからん副団長だ！」

とまあ、そんな具合で風呂を済ませた俺は食堂へ向かう。もちろんベイリックとサクヤも一緒だった。質より量を優先した料理を食

べながら雑談。ここでは主に飛空艇での戦闘が話題に上がった。そして団長が二人の戦闘力を冷静に分析し始めたところで雲行きが怪しくなる。

「軽率な行動を批判されるならともかく、戦術面は実戦を見てから判断して頂きたい」

「見なくてもある程度の予測は立つさ。火属性の魔術を使用していない時点でフィリスは本気を出していないからな」

「しかし制止がなければ私の連携技『花鳥風月』が完成していたのだぞ？」

「それは違うな。隙の多い『月光』<sup>げっこう</sup>に合わせて反撃されるだけだ」

白熱する二人に「先に休む」と伝えて俺は部屋へ戻る。サクヤの説明では貸切不可のはずだが、ほかの誰かが入室した形跡は残されていなかった。寝台に寝転がり明日からの登山生活について思考を巡らせる。どこからともなく姿を現した使い魔が俺の腹の上で丸くなった。

どれくらい経つたのだろう。不意に部屋の扉が開いた。

同居人に挨拶しようとして身体を起こすと、使い魔が腹の上から落ちて寝台に転がる。視線の先には施設専用の寝巻きに身を包んだ白銀髪の少女が映る。とりあえず次に発すべき言葉は決まっていた。

「まさかサクヤが同居人なのか？」

「私では不満なのか？ 見知らぬ他者と一緒にならぬよう配慮したつもりなのだぞ」

「それは非常にありがたいのだが、男女で同室というのはどうなんだよ？」

「大浴場の一件でロンの性格を多少は理解したつもりだ。ここで寝巻きを脱ぎ始めるほど私は愚か者ではない」

言いながらエルフ族の少女は仕切りで区分けされた別の寝台へ移動する。それから確定事項を告げるように宣言した。

「私も天竺山ラクシュミへ同行することにした」

「いやいやいや、護衛団の任務はどうするつもりだ？」

「護衛団の仕事は休暇を申請しておいた」

「おいおい、そんな簡単に休める仕事なのかよ？」

「無論そういうわけではないのだが、私の場合、有給の消化を催促されている状況だったからな。もっとも生で魔王を見てみたいという好奇心を否定するつもりもない」

「なるほど。そういうことなら好きにするさ」

俺は改めて寝台に寝転がる。

このときはまだ　これから起きる事態を想像もしていなかった。

ティターン公国の議場は椀のような形になっている。そのため中央で繰り広げられる討論を遠くからでも見学できた。議場の一角、最上段には公族専用の席が用意されている。隔離された個別の部屋になっており、その中に装飾の施された椅子が五つ置かれていた。もちろん真ん中が玉座である。紗幕で覆われているため中の様子は窺えないが、映し出される影によって人数を把握することは可能だった。

「アラカルト王国が我々に勝る武力を持っているとは考えらぬ。開戦を切り札に強気の交渉を進めるべきであろう」

「もし戦争になったらどうするつもりだ！ イオン大国を喜ばせるだけではないか！」

「ラズマズ教国とゲルニア王国の内政干渉に関する証拠を掴まれている限り、不平等な条約に心じてでも穏便に事を運ぶべきだろう」

「一度応じれば更なる無理難題を通そうとしてくるであろう。ここは断固拒否すべきである」

「危惧すべき案件はほかにもある。ゲルニア王国を滅ぼした竜の化身がアラカルト王国に潜伏しているらしいぞ。内政干渉の事実が公に知れ渡れば、我々ティターン公国も無事では済みませんまい。迅速な対策が必要だと思われる」

「対竜討伐兵器と特殊部隊を配置させるべきだろうな。最悪、先手を取って討つべき事態が起こり得るかも知れぬ」

「すでに由々しき事態だ。よりによって」

議場の討論は過熱していた。高官たちが必死の形相で持論を展開している。その様子を最上段から見下ろす影が二つあった。

「ゼノン、この状況を打破する方法はあるか？」

ゼノンと呼ばれた細身の男は冷笑を浮かべる。繊細な刺繍の施された外套は地味なのか派手なのか見る者によって受け取り方が変わるような代物だった。

「例えば竜の化身が一人の奴隷少女を助けたとしましょう。その少女の手引きにより訪れた先で竜の化身は陵辱された日々を思い出すことになる。怒りに任せて現場に居合わせた男たちを全滅させるかもしれません。さてはて、どういうわけかラズマタズ教国とゲルニア王国へ内政干渉していた証拠が出てくる」

「ふむ。しかしそれは困ったことにならないかね？」

隣席に腰を下ろした公族の男は首を傾げる。しかしゼノンは獰猛な笑みを返した。

「例えばその証拠によると内政干渉に加担していたのはアラカルト王国になっている。当然のように龍神の怒りはアラカルト王国へ向かうでしょう。もっとも途上国であるゲルニア王国とは異なりアラカルト王国は一筋縄ではいきません。場合によっては共倒れの可能性もあるでしょう」

「ゼノンよ、面白い例え話だな」

くつくつと笑いながら公族の男は髭を撫でる。ゼノンはあくまでも冷徹に語を引き継いだ。

「最強と謳われた龍神を討つのは至難。ならば掌の上で踊ってもらうのが得策でしょう。私の策を無にした愚かな竜には、真実を知ることもなく無残な最期を迎えてもらわねばなりません」

「そう言えばゼノンの例え話の実現しなかったのはあのときくらい

だつたな」

その言葉に外套を纏った男の表情が険しくなる。

「途上国は永遠に発展途上であればいいのです。我々の搾取に泣き寝入っていれば滅亡することはなかったでしょう。あの者たちは貧困と内紛に甘んじるべきだった。国力を高めて貴重な資源を大量採掘されれば、大陸の経済は確実に崩壊への道を辿っていたことですよ」

「そうならば失業者が増えて国力が落ちる。内紛など起これば尚更だ」

「我々を頂点とした三角形を完成させるためにも、不穏分子は早急に始末しておくのが寛容なのです」

「では私は例え話の実現するまで静かに待つとしよう」

アラカルト王国 首都フォレンツに存在する公邸。

山積みになされた書類を前にルガル・エージェス・アトルガン国王代理は顔を顰<sup>しか</sup>めていた。逃げ出そうとすると傍らに立った眼鏡の似合う美人秘書官が睨み付けてくる。仕方なく書類と向き合い、端正な筆致で文末に肩書きと名前を記していく。一枚書き終えたところで終わりは見えて来ない。三十分ほど同じ作業を繰り返した国王代理は、やはり我慢できなくなって無意味な逃亡を試みようとする。

「ルガル国王代理、職務放棄は許されることはありません。何十万 いえ何百万という国民が職を失い路頭に迷うことになるのですよ？」

眼鏡の奥にある鋭い瞳がルガルを見据えている。長い黒髪は後

るで束ねられ結び上げられている。

「しかしセリシア君、仕事に変化がないのは辛いものだよ？ 机に向かつて肩書きと名前を記入して印を押す。ずっとこれの繰り返しだ。単純作業にもほどがあると思わないかい？」

「お言葉ですがその単純作業をしている国王代理を、一日中、ずっと見張っている私の仕事はさらに退屈でございます」

「せっかく美人で巨乳で眼鏡が似合っているのだから、もう少し破廉恥な秘書官風に叱ることはできないのかね？ そうすれば私の中に存在するやる気上昇成分の分泌が期待できるかもしれない」

「上司の性的嫌がらせを理由に配置転換を申し出ておきます」

「セリシア君がいなくなると私は困ったことになるよ？ どのくらい困るかと言うと午後からの国際会議に服を着忘れて全裸で出席してしまうほどにね」

「私は国王代理に投票した有権者を恨みます」

「それには同意するよ。私も私に投票した有権者の真意がわからない」

ルガールは大げさに肩をすくめた。精悍な容姿とは裏腹に内面はかなり胡散臭い男である。

「ところで会議後の予定はどうなっているのかな？」

セリシアは小型魔導端末を取り出して予定を確認し始める。その振舞いは仕事のできる秘書官に相違なかった。会議後の予定を把握してから発言する。

「各国要人との会食が午後十一時まで入っております。午後九時から午後十時までの一時間が空いておりますので、以前から所望されておられました『みやび亭』に予約を入れてございます。存分に

絶品料理をご堪能くださいませ」

「……セリシア君、ちよつと聞いてもいいかな？」

「どうぞ」

「どうして同じ日に要人との会食を全部入れてしまふんだい？ 私  
はそれほど食いしん坊じゃないんだ。きつと夕方には青い顔をして  
いると思うよ。談笑どころじゃなくなっているだろうね。というか、  
どうしてその日に『みやび亭』の予約を入れるんだい？ もはや味  
もわからない状態で辿り着くことになるかと予想されるのだけど」

そこでルガールは意図を理解した。立ち上がり秘書官と向かい合  
う。

「私への嫌がらせかね？」

「嫌がらせなどという生温いものではありません。報復でございま  
す」

「うん……とりあえずこれからは態度に気を付けるよ」

石化効果さえありそうな視線にルガールは顔を逸らすことしかで  
きなかった。

午後八時、白海亭の特別室。

ゼノンとルガールは長机を挟んで向かい合っていた。隣の席には  
それぞれの秘書官が座っている。さらに護衛と思われる青男が二名  
ずつ机を挟んで座っていた。

「ずいぶんと青い顔をしているが大丈夫かね？」

ティターン公国の要人      ゼノン侯爵がルガール国王代理に尋ね

た。

「胃腸以外は問題ないよ」

「それでは話を始めてもよろしいか？」

「もちろん構わない」

「例えば経済は成長と破綻を繰り返す生き物です。当初は十人でこなししていた仕事も、時が経てば九人で成し遂げられるようになる。事実、多くの組合は能率を上げるように取り組んでいるわけだ。あの段階まではそれでいい。しかし能率を突き詰めていけば、やがて不要な人間が生まれてくる。なぜならば需要と供給は等価でなければならぬからだ。必要以上の物を作っても、それを購入する者がいなくなる。十人で作っていた商品を五人で作れるようになったか라고言つて、これまでの二倍商品を生産すれば、単純に利益も二倍になるわけではないことを理解頂きたい。つまり単純に考えれば五人の不要な人間が生まれたに過ぎない。労働者の余剰、そこから派生する購買力の低下。組合のために一生懸命働いて能率を上げた結果がこれだ。切り捨てられた人間からすれば堪ったものではない。しかし」

「誰にも止められない負の螺旋だね」

ゼノンの言葉をルガールは牽制するように制した。不機嫌そうに外套を纏った男は付け加える。

「経済の発展は多くの犠牲の上に成り立っている。自国を守るためならば隣国に被害が及ぶような苦渋の決断も必要だとは思わな  
いか？」

「こちらの提案した条件を素直に飲むつもりはないらしいね」

「ゆえに新たな提案を用意してきたわけだ」

「それは聞くだけ時間の無駄だから、今回の結論は交渉決裂ということ  
で手を打とう」

ルガールの軽口を聞き流し、ゼノンは平然と言葉を紡いでいく。

「例えば向かいの建物にある自動回転扉で母親を追いかけていた幼児が挟まれて圧死したとしましょう。ルガール国王代理ならどうしますかね？」

「未来ある幼児の死を痛むだろうね。それ以外の行為が存在するのかい？」

「建前は不要です。自動回転扉の危険性が露見されれば、頑なに横開きの安全性と技術開発を主張してきた生産者に受注が殺到することでしょう。大々的になる前に貴殿なら利権を得ようと画策するでは？」

「ゼノン侯爵は遊び心がなくていけないね」

「我々が言葉遊びに興じている間にも多くの命が失われていくからですよ」

外套を纏った男は不敵な笑みを浮かべる。ルガールは気にする様子もなく湯飲みを口へ運ぶ。戦場は最前線以外にも飛び火していた。

命はなによりも尊いと処刑制度に反対する団体が、隣国の飢餓に無関心でいられる理由を私は知りたいのだ。

ルオニト・マギ「悪魔の正体」鳳凰曆七二一年

天竺山ラクシュミの麓ふもとには荒れ果てた街並みが広がっていた。以前はどこかの国の領土として扱われていたのだろうが、様々な条件と天秤にかけられて切り捨てられたのだろう。全体の半数以上の建物が倒壊し、街路に硝子の破片を撒き散らしていた。

「山の中で野宿することに比べれば、幾分か安全と言えるかもしれないな」

「現実じゃないが緩衝区の役割を果たしているからな。魔物は森のほうが快適だろうし、人はこんな朽ち果てた場所に留まらない。両者に好まれない土地が存在することで最前線が比較的平和に維持されているんだろうさ」

廃墟と化した建物の中で俺とサクヤは暖を取っていた。俺は割れた窓から外の光景を眺める。魔導都市フォルガントを出発して、すでに十二時間が経過していた。空に浮かんだ月は廃棄された辺境の地を哀しげに照らしている。

静寂の中、枯れ木の弾ける音が響いた。

どうやら白銀髪の少女が焚き火に新しい薪を焼べたらしい。朽ちた天井には頼んでもいないのに大きな穴が穿たれているし、窓硝子

もすべて粉碎されているので換気の心配はないだろう。

「ところで常闇の魔女とはどこまで進んでいるのだ？」

「一体どこからその話に繋がるんだよ。もう少し他愛もない会話から上手く誘導するとか努力の片鱗を見せてくれないか？」

「では言い直そう。とりあえず明日の予定を聞きたいのだが、常闇の魔女との肉体関係はどうなっているのだ？」

「稀に聞く支離滅裂な会話だな」

「私は誘導尋問が苦手なのだ。それに旅の同行者について詳しく知りたいと思うのは不思議なことではないだろう？」

「そういうものか？」

「そういうものなのだ。魔銃士で常闇の魔女の眷属、ロンについて私を知っている情報はこの二つくらいだからな」

「常闇の魔女についてねえ」

俺は抜けた天井から月を見上げた。それから焚き火を挟んだ先のサクヤへ視線を向ける。

「実は俺もよく知らない」

「むむ？」

白銀髪の少女は眉間に可愛らしい皺を寄せる。俺は焚き火に新しい薪を放り込みながら語をを引き継いだ。

「何度か話をしたただけだからな」

「わけがわからぬ」

「まあ、話せば長くなる事情があるんだよ」

俺の口から溜め息が零れ落ちる。エルフ族の少女は碧色の瞳をこちらへ向けていた。

「聞かせてくれぬのか？」

「どうせ信じないさ」

「そんなことは話してみないとわからないであろう？」

「あとで適当に話をはぐらかされたとか言っなよ」

「承知した」

どこまで真実を話すか考えながら俺は言葉を取捨選択していく。

「こことは違う平和な世界があつて、俺はそこで彩奈と一緒に暮らしていたんだ」

「人名の発音がわからぬ」

「えーっと、アヤナだな。まあ、そこは常闇の魔女に置き換えてくれればいいさ」

「ふむ」

「ともかく俺はその世界で彩奈に救われたんだよ」

退屈な日々押し潰されそうになっていた俺は、あの日、たまたま立ち寄った家電量販店で桐原彩奈と出会った。パソコンソフトを購入しようと棚に近付いたとき、店員を捉<sup>つか</sup>まえて話し込む制服姿の少女を見かけたのである。

「えーっと……VRMMOのソフトですか？」

女店員は小首を傾げながら言葉を繰り返していた。桐原は面倒臭そうに説明を付け加える。

「一度ログインしたらログアウトできなくなってゲームの世界に閉

じ込められてしまっやつなのだけど、どこへ行っても『当店ではそのようなソフトは販売しておりません』と言われてしまうのよ」

「お客様、当店でもそのようなソフトは販売しておりません」

「あれはインターネット上でダウンロードするゲームなのかしら？私の知っている限り店に並んで購入していたのにおかしいわね」

盗み聞きするつもりはなかったのだが、自然と不条理な会話が耳に届いてしまった。技術的に存在していないVRMMORPGソフトを買いに来ようとするのもどうかしてるが、それ以前に「一度口グインしたらログアウトできなくなつてゲームの世界に閉じ込められてしまっやつ」と認識した上で購入を希望するところが意味不明だ。

「桐原、ちよつといいか？」

涙目の女店員を助けるべく俺は同級生の少女に声をかけた。これが桐原彩奈と俺のファーストコンタクトである。それから口を開く度に暴言を発する女を説得して帰路に着かせるのに二時間もかかった。

その間に俺の「寡黙な美少女」という桐原の印象は完全に崩壊した。それどころか可愛い女子と知り合いになつておこうと打算的に動いてしまった二時間前の俺を殺したい気持ちに追いやられたほどである。それにも関わらず翌日の放課後、誰もいなくなった教室で桐原に声をかけられたとき俺は無視することができなかった。いや、正確には望んでいた出来事なのだろう。そうでもなければ帰宅部の俺が最後まで教室に残る理由が世界中を探しても見つからない。

それから放課後に話すことが日課になった。

この日はどういふ流れだったか友人や恋人の話題に移る。広く異

常に浅い人付き合いしかして来なかった俺には怖ろしく難問だった。

「というか桐原ならモテるだろ？」

「ラブレターという代物なら今日も下駄箱に三通入っていたわ」

「ふーん、やっぱモテるんだな」

俺は平静を装いながら答える。しかし内心はリア充を前に動揺していた。

「その態度は私の言葉を信用していないわね？」

「いや、別にそういうわけじゃないけどさ」

「わかりました。嘘か本当か中身を読み上げます」

「待て待て待て！ それは絶対に犯してはならない鉄の掟だろーが！」

俺は鞆から手紙を取り出そうとする桐原を全力で制した。他人事とはいえラブレターを朗読されたときの苦悶は想像に難くない。制服姿の少女はにやにやと悪戯な笑みを浮かべる。

「まさか神崎くんが出したんじゃないでしょうね？」

「違う！ 常識的な見解を述べただけだ！」

「嘘臭いわね。三通のラブレターを読んで確認しましょう」

「わかったわかった！ 出したの俺だから勘弁してあげて！」

こんな性格破綻者にラブレターなんぞを出した三人は直ちに俺の勇気ある決断に感謝してもらいたい。してやっつたりの表情を浮かべて桐原は言った。

「あらそう。とても嬉しいわ。返事は『YES』よ」

「は？」

「あら、ラブレターに犯行予告を書いたわけじゃないでしょう?」「え、あ、まあ、そうだけども」

おそらく「好きです」とか「付き合ってください」とか書いてあるのだろ。そこでふと桐原に上手く誘導されたことを理解した。なにを考えているのか知らないが、俺から告白したように仕向けられたわけである。

「蓮」

「うお!」

「どうしたのいきなり変な声を出して?」

「いや、いきなり名前で呼ばれたら驚くだろ」

「恋人なのだから当然でしょう。蓮も私のことを彩奈と呼んで頂戴」

ああ、ここは普通なんだな。まあ、突っ込まなくていいから楽だけどさ。

「しかし唐突だな」

俺なにかしらの伏線見逃したっけ? うーん。世間話に組み込まれた精巧な伏線なんてあるわけないよなあ。

「ラブレターを寄越す連中は私の見た目しか知らない。直接話したことなんてないんだもの」

「それは確かに頂けないな」

「これまでも私の奇行を目撃した男子は複数いたけれど蓮のようにきちんと受け止めてくれる人はいなかったわ」

受け止めたわけじゃないんだけどな。ただこの世界に退屈している仲間を放っておけなかったのだろ。誰かを助けることで俺自身

を肯定したかったのかもしれない。

「会話は成立していても、どこか空々しくて嘘っぽい。とても同じ言葉で話しているようには思えなかった。個人個人が別の世界に存在していて、そこには共通ではなく似て否なる言語しかない。だから本当は意思の疎通なんて不可能なのに、なんとなくわかったような演技をして日々を過ごしている」

彩奈は言葉を区切って俺を見やる。

「それがとても嫌だったの。でも神崎くんの声は私に届いた」

「買い被り過ぎじゃないか？」

「私は私の心を信じるわ」

ふむ。ならば俺が問うべきことは一つだけだろう。

「俺でよかったのか？」

「わからない。でも今は神崎くんが最初の理解者で本当によかった  
と  
思っているわ」

そう言って微笑む彩奈を見たとき、俺はこの儂げな少女の傍にいてやりたいと思った。

これが後々語られることになる神崎蓮の「メンヘラ上等」宣言である。

「私の理解が足りないだけかもしれないが、ロンが常闇の魔女に惚れている理由がわからぬ。なにか得体の知れぬ魔術をかけられているのではないか？」

俺と彩奈の出会いから日々の出来事を語ったところで、白銀髪の少女は我慢できないという感じで切り出した。指摘が的確過ぎて対応に困る。ともかく俺は常闇の魔女ならぬ前世の桐原彩奈の性格について弁解しておいた。

「でも浮気の心配はなさそうだし、クリスマスに雑煮作ってくれろし、俺以外の人に迷惑はかけないからな。それに大変な苦痛を伴うことがあっても退屈はしない」

「ふむ。本人が幸せなら他人が口を挟むことではないのかもしれないな」

現実とも妄想とも取れる会話にサクヤは思いのほか食い付いてくれた。

「まあ、得体の知れない魔術をかけられていないと断言できないのが辛いところだな」

不意に白銀髪の少女は片膝を立てて唇に人差し指を当てる。状況を把握した俺は左手で自動式魔弾銃を引き抜き水属性魔弾を発砲。手早く焚き火を消してから剥き出しの壁に背中を預けた。窓から外の様子を窺うと遠方に複数の人影が映る。その中の誰かが閃光系魔術を展開しているらしく、外部に比べて集団の周辺だけが仄かに明るくなっていた。

「多いな」

「一個分隊といったところではないか？」

「だな」

こちらが進行方向らしく、集団の姿が徐々に大きくなる。黒鉄色の鎧を身に纏った熊系獣人を先頭に総勢十人の大所帯だ。数そのものに驚きはないが、連中の構成に違和感を覚える。外側に配置された屈強な男たちが四人の少女を取り囲むように移動しているからだ。

「こんな辺境の地で護衛はないよな？」

「うむ。それに護衛なら対象者の安全を考慮して夜間の移動は極力避けるものだ」

建物内に身を潜めながら俺たちは標的を分析していく。距離が詰まるにつれて集団の全容が見えてくる。軽鎧に片手剣を装備したエルフ族の前衛が二人、後衛と思われる軽装の三人はすべて人族だった。魔銃士の不人気ぶりに辟易しながら囲まれている少女たちへ視線を向ける。エルフ族の少女が二人、猫系獣人族の少女が一人、人族の少女が一人の計四人だ。

「奴隷だな」

意見を述べるより先にサクヤの口から不吉な言葉が告げられた。単語の持つ意味は理解しているが、そういう存在がいる事実を受け止められない。表情を読み取られたのか白銀髪の少女は微かに苦笑を漏らした。

「どうやらロンはこの世界でも平和らしいな」

「しかし捕虜や奴隷は三国間の同盟で禁止されているだろ？」

「それは法が法として機能する条件化においてだけであろうか？」

白銀髪の少女は有無を言わせぬ視線を向けてくる。その疑問符に俺は二の句を継げなかった。しばらくして連中が俺たちの潜む建物の前を通り過ぎていく。こんな場所で他者に出会うとは想定していないらしく警戒の大半が山側に集中されていた。

「助けなくていいのか？」

「一時的な救いではなにも変わらない。生涯養うくらいの気概がないなら関わらないほうが無難だ」

即答できない俺にサクヤは苛烈な瞳を向けてくる。

「ロン、偽善は美德ではない。誰も彼も助けようとすれば結果として誰も救えないことがある」

優先順位による取捨選択　ザルイークの発言はこれを意味していたのだろう。頭では十分に理解しているつもりだったが、不幸に陥ろうとしている少女を目の当たりにすると無視できそうにない。世界のどこかで知らない誰かが死んでも気にもならないが、それが目の前で起ころうとしていたら、たとえ見ず知らずの誰かでもなんとかしようと考えてしまうものだ。

「なにを考えているかわかりやすいな。しかし助けようとしたところで奴隷は連中の盾に使われるだけだ。この状況で襲撃しても無事に救出できる可能性は低い」

「だから見逃せつていいのか？」

詰問口調の俺にサクヤは無言のまま首を左右に振った。そこで俺は正論を主張することで眼前の少女に悪役を押し付けようとしてい

ることに気付く。正義を口にすることは容易いが、それが最善である可能性は極めて低い。本当に俺は　　どうしようもない偽善者だ。

「悪い。サクヤにばかり損な役割を任せてさ」

「気にするな」

刹那　　白銀髪の少女は表情を退魔刀士のそれに変えた。釣られるように俺も口を閉じて窓の外へ視線を向ける。その先には闇夜に溶け込むような漆黒の魔物がいた。

「灯りを頼む」

黒鉄色の鎧を装着した熊系獣人は後衛の魔術士へ冷静に告げる。暗闇の中で姿を捕捉し難い魔物と戦うことを嫌ったのだろうし、その判断はおそらく誰もが選択するであろう当然の作戦だった。指示を受けた魔術士は移動用の微弱な閃光を膨らませる。指揮官は周囲を確認してから眼前の標的へ視線を向け直した。

「逸れ者の魔物が一体だけだな」

背中に飛行を可能とする巨大な翼を有し、強靱そうな肉体は人のそれに酷似している。山羊のような頭部からは曲がった角を二本生やし、牙と尻尾、それから両手両足の先には鋭利な爪を所持している。組み合わせられた造形は見紛うことなく悪魔と表現すべきものだった。

「さっさと済ませよう」

言うが早いか鎧姿の熊系獣人は漆黒の魔物に突っ込む。それを機にエルフ族の前衛二人がそれぞれ火属性と氷属性の魔術を片手剣に

宿らせる。離れた属性を使うことで敵の弱点を探り当てる算段なのだろう。奴隷絡みという仕事内容は評価する気になれないが、こと戦闘に関しては基本的に忠実で統率の乱れもない。

漆黒の悪魔は緋色の瞳で仕掛けてくる武装集団を睥睨していた。不意に口を開いて赤色の光線を発する。この時点では魔物の特技か魔術か判然としない。先陣を切っていた黒鉄鎧の指揮官は詠唱を終えた土属性魔術>鋼鉄楯<sup>シールド</sup>を発動。黄土色の魔術組成式から具現化された鋼鉄の盾を取り出して赤色の光線を防ぐ。反撃を予想しての素晴らしい対応だったが、放たれた熱線は分厚い鉄を数瞬で溶解させていく。本能的に援護へ飛び出そうとする俺を白銀髪の少女が制止した。

「救うべきは奴隷少女であって連中ではない」  
「面目ない」

半年間の武者修行で随分と成長したつもりだったが、傍らに立つ少女に比べれば俺の経験値は怖ろしく低いのだろう。自由な一人旅に拘り集団行動の「いろは」を疎かにしたことが悔やまれる。やれやれという風にサクヤは嘆息を漏らしながら髪を掻き上げた。

「ロンの師匠は相当なお人好しだな」  
「ほっとけ」

ハシユシユ・ミラケッタの顔を思い浮かべて俺は苦笑するしかない。最後の最後まで世話を焼いてくれた恩人だが、甘さという単語を導き出すことに苦労しない人物像だからだ。

しかし現在進行形の戦闘はこちらの都合に合わせてくれない。熊系獣人族の指揮官は熱線に侵食された>鋼鉄楯<を手際よく継ぎ足

していく。これは詠唱短縮ファストキャストに頼った早業ではなく、あらかじめ先行詠唱していた魔術である。文字通り鉄壁の防御だった。その隙にエルフ族の前衛が左右それぞれから魔術を宿した剣を標的へ振るう。刃が魔物に衝突した瞬間、鈍い金属音が響き渡った。攻撃を仕掛けた前衛二人だけではなく、盾役の指揮官を含めた全員が険しい表情を浮かべる。

「物理と魔術、両方が無効だと！」

声を上げたのは鎧姿の熊系獣人である。エルフ族の前衛二人は距離を置いて陣形を組み直した。後衛は奴隷を守る一人と戦闘へ参加する二人へ分かれる。足止めに成功した漆黒の魔物は重低音の声を響かせた。

「天竺山ラクシュミを目指しているのは汝らか？」

「魔物風情に答える義理はない！」

鎧姿の熊系獣人は怒号を発し、それを合図に第二回戦が開始された。

「> 槍シグラ土竜く」

黒鉄鎧姿の指揮官は攻撃系土属性魔術を発動。漆黒の悪魔を取り囲むように周辺の地面が盛り上がり土の刃を形成。斜円錐となった土の槍が四方八方から標的に襲いかかる。

次の瞬間、周囲に鈍い音が響き渡った。土の槍は悪魔の身体に傷を負わせることはなかったが、全方位から押し寄せた物量で標的の動きを封じている。それでも反撃に転じようとなにかしらの魔術を詠唱し始めたところにエルフ族の前衛二人が雷属性魔術を宿した剣技を炸裂させた。これは標的を瞬間的に前後不覚に陥らせるもので、溜めの長い特殊技や詠唱中の魔術を中断させる効果がある。

「退避しろ！」

指揮官の指示で前衛二人は左右に散開した。この時点で悪魔は瞬間的な気絶状態から立ち直っているのだが、苛烈な戦闘においてはその一秒以下の時間が生死を分けることになる。孤立した標的に強大な術式を紡ぎ終えた後衛二人が火属性魔術>爆炎轟裂衝パソロミュー覇くを発動。二人で形成した赤色の魔法陣から高位の爆裂魔術を展開させる。得体の知らない魔物に畏怖するわけではなく、強敵と判断したからこそ最大級の魔術で屠るつもりなのだ。奴隷売買に関わらせておくには惜しい連中だなと感心させられてしまう。

土の刃に制された漆黒の悪魔を千二百度の超高熱が蹂躪する。その熱量は竜の吐息に匹敵する高温のため、黒鉄鎧姿の指揮官や前衛二人が手で顔を覆う。臨界点に達した炎は破裂して爆風と煙を巻き

起こした。三流の集団ならここで勝利を確信して油断するのだが、連中は集中力を切らすどころか逆に緊張感を高めている。戦闘に参加していない後衛でさえ奴隷少女を逃さないよう監視しながらも局面を楽観していない。

「標的を目視できた者は報告しろ」

爆煙に包まれた方角を見据えながら熊系獣人族の指揮官が告げる。エルフ族の前衛二人が首肯し、後衛二人は不意の反撃に備えて、風紗幕<sup>シヤ</sup>を詠唱。高位の風属性魔術>風々障壁<sup>バリアル</sup>に比べれば見劣りするが、それでも大抵の物理攻撃と攻撃魔術を防ぐ能力がある。

刹那　爆煙の中から放たれた赤い光線が>風紗幕<を貫通してエルフ族の前衛一人に命中する。本来なら致命傷になる熱線だが、不可視の風による幕が殺傷力を軽減。さらに心臓を直撃する軌道を変更させたこともあって腹部を焼くだけで済む。もっとも重傷には変わりなく、横腹を抉られたエルフはその場に崩れ落ちる。熊系獣人族の指揮官は>鋼鉄楯<sup>シールド</sup><を多段展開。後衛の一人は治癒系魔術を唱えて隊列の立て直しを図る。

「目標確認、無傷に等しい」

煙の中に存在する漆黒の悪魔を視認したらしく、残されたエルフ族の前衛が状況を端的に報告する。これは>爆炎轟裂衝霸<の威力不足ではなく、標的の耐久力が想定範囲を上回る強度なのだろう。この厳しい局面をどう乗り越えるつもりなのか俺は見守ることしかできない。

「防御に特化した魔物のようだな」

傍らに立つ白銀髪の少女が冷静に戦局を分析する。もちろん手の内を見せていないだけかもしれないが、これまでの流れを見る限り攻撃より防御に優れていることは確かだろう。しかも連中の繰り出した高位魔術>爆炎轟裂衝覇<を無傷で凌ぐほどの強度だ。

「標的の情報はないのか？」

「量産型や害をなさない魔物ならともかく、固有の魔物は詳細不明の場合がほとんどだからな。賞金首になって情報共有でもされぬ限り知る由がない」

「これだけの魔物なら賞金首になってもおかしくないけどな」

「うむ。しかし現状で対策がわからなければ意味があるまい」

「防御に特化した類型の魔物情報もなしというわけか？」

「うむ」

「情報屋という仕事が成り立つわけだな」

虎視眈々と戦況を見守る俺にサクヤは視線で肯定の意を示した。

後衛の治癒系魔術によって回復したエルフ族の前衛は片手剣を地面に突き刺して立ち上がる。それを確認した熊系獣人族の指揮官は手早く撤退の指示を飛ばした。剛胆な戦術だけではなく冷静な判断力も兼ね揃えている。正規の護衛団や賞金稼ぎと比べても遜色のない統率能力だ。白銀髪の少女も同様に感じているのか、一つ一つの言動に感心するような素振りを見せている。

「どれくらいかかる？」

黒鉄鎧姿の熊系獣人は>鋼鉄楯<を多重展開しながら撤退に必要な時間を確認。すでになにかしらの魔術を詠唱し始めている後衛二人が顔を見合わせてから応じる。

「二分弱」

「了解」

端的に返して指揮官は完全に防御を優先していた。唯一判明している熱線攻撃に備えていたのだろうが、しかし煙が霧散した場所に悪魔の姿は見当たらない。

「ぐは」

誰かが捕捉するよりも先に吐瀉音としゃが聞こえた。視線を移動させると前衛エルフの胸部が悪魔の左腕が軽鎧ごと貫いている。突き出した左腕から地面へ向けて鮮血が滴り落ちていた。胸部を貫かれたエルフ族の前衛はしばらく痙攣したあと完全に沈黙する。嫌な雰囲気  
を払拭するように熊系獣人族の指揮官は一喝した。

「取り乱すな！ 引き続き退路の確保に全力を尽くせ！」

言い終えるが早いか黒鉄鎧姿の熊系獣人は>槍土竜<を発動。斜円錐となった土の槍が四方八方から標的に襲いかかる。漆黒の悪魔はエルフ族の前衛から左腕を引き抜いて跳躍。土の槍を回避すると同時に中空から熱線を発して反撃に転じた。

「今だ！」

しかし次の瞬間、熱線を待っていたかのように指揮官が吼える。単調で隙の多い攻撃手段を読み切っていたらしく、事前になんらかの方法で合図を送っていたのだろう。腹部の傷が癒えたもう一人のエルフが悪魔の背後を捉えていた。

「死ねええええええええーっ！」

風属性魔術を宿した一閃が放たれる。これも弱点属性を踏まえた上での判断だろう。しかし悪魔の首元に到達した片手剣は鈍い金属音を奏でるだけだった。

「馬鹿……な……」

言葉を紡ぎ終える前に悪魔の手刀が前衛エルフの首を刎<sup>は</sup>ねていた。指揮系統を失った胴体は無残に地面へ落下する。刎<sup>は</sup>ねられた生首が後衛の方向へ転がり奴隷少女たちの身を震え上がらせていた。宙を舞い後衛付近に着地した悪魔は右手で一人の首を締め上げながらも一方へ熱線を放つ。灼熱の光線で心臓に穴を穿たれた人族の魔術士は声を上げることもなく後方へ倒れた。

「天竺<sup>ラクシュミ</sup>山を目指しているのは汝らか？」

漆黒の悪魔は左手に付いた血液を舌で舐め取りながら同じ質問をする。熊系獣人族の指揮官は唇を噛み締めながら答えた。

「そんな場所に興味はない。俺たちは俺たちの仕事をしていただけだ」

首を絞められてもがき苦しんでいた魔術士の動きが止まる。指揮官の瞳に哀しみと怒りの感情が浮かぶ。どういつ関係か知らないが仲間を悼む気持ちは持ち合わせているらしい。

「では魔石を持っておらぬのだな？」

「持っていない」

即答に対して漆黒の悪魔は奴隷少女を監視していた後衛へ熱線を放つ。無防備に突っ立っていた人族の青年は額を焼かれて絶命する。

これで束縛する存在がいなくなったわけだが、しかし奴隷少女たちは身動き一つ取らなかつた。

「もう一度だけ問う。魔石を持つてはおらぬのだな？」

「くどい！」

ゆっくりと悪魔の視線が奴隷少女へ向けられる。意図を察したらしい黒鉄鎧姿の熊系獣人は叫んでいた。

「逃げるんだ！ 殺されるぞ！」

その怒号を機に四人の少女は顔を引き攣らせながら駆け出した。しかし結果は予想を裏切らない。あっさりと追い付いた悪魔は人族の少女の右腕を掴んで引き千切る。同時に口から発した熱線で猫系獣人族の少女の左足を焼いた。それぞれが絶叫を上げながら地面へ転倒する。裂傷や火傷はまるで即死しないように調整されているかのようだった。

「ぶっ殺す！」

無意識のうちに俺は建物から飛び出していた。我を見失ったわけではない。俺は生まれて初めて明確な殺意を持って眼前の魔物を葬り去りたいと思ったのだ。

俺は潜在能力を解放して自動式魔弾銃の弾倉を光属性に交換する。回転式魔弾銃のように回転式弾倉シリンダーを回すだけで魔術属性を切り替えられるような汎用性には欠けるが、同系統の魔術属性を連発する場合は弾数が多く撃鉄を起こす必要のない自動式魔弾銃のほうが遥かに優れているからだ。次いで負傷した奴隷少女に治癒系魔弾を連続発砲。音速を超える弾丸さえ今の俺なら軌道を正確に捉えられる。数瞬間には術式が展開して止血を終わらせていることだろう。損傷した部位の蘇生はあとで専門家に任せるとして、現実問題この状況を俺一人の力で切り抜けることは難しい。なぜなら武器を持たない少女が無事に安全な場所まで移動できるとは考えられないからだ。仮にこの場を逃げ仰せたとしても、魔物に襲われるのが目に見える。

「無理にでも協力してもらえないかな」

俺は傍らで驚きの表情を浮かべている白銀髪の少女の腰に手を回して跳躍。まずは逃げる少女たちの進行方向にサクヤを待機させる。それから背中に担いだ地獄ヘルファイアの業火を手に取り第五式魔弾を詰め込む。即時発砲。一連の流れをこなしたところで俺の心臓が悲鳴を上げて世界が元に戻る。着弾した悪魔は予想外の不意打ちによるめく。視線を移すと奴隷少女の止血も無事に完了していた。

俺は空薬莢を排出して素早く次弾を装填。先行展開している高位風属性魔術に高位火属性魔弾を撃ち込む。虚を突いた連続攻撃は見事に成功して>爆炎轟裂衝バーストシューターに匹敵する爆裂系魔術反応を引き起こした。強襲用狙撃魔弾銃では考えられない次元で漆黒の魔弾銃は高位魔弾を制御している。しかしこの魔術反応が標的に対して有効

と判断したわけではない。

「もう一発」

俺は新たに装填した第六式魔弾を撃ち込む。緊急展開させた術式が爆裂系魔術反応に絡み多重魔術反応を引き起こす。揮発性の低い琥珀色をした油状の液体を練成。無味無臭であるそれは猛毒の霧へと変化する。呼吸器官だけでなく皮膚からも吸収されるため、防衛手段として口を塞いでも効力を期待できない代物だ。また親油性が高く完全に取り除くには専用の魔術洗浄が必要となる。悪魔の遺産と呼ばれる魔弾銃でなければ制御し切れない危険な魔術反応だ。

しかし試すだけの価値はあつたらしく、漆黒の悪魔はこれまでにない苦悶の表情を浮かべる。表面的な強度に特化しているなら内部破壊しかないという判断は以外にも正解だつたらしい。俺は次の攻撃に移る前に白銀髪の少女へ呼びかけた。

「サクヤ、その子たちを頼む」

すでに奴隷少女を支配下に置いている退魔刀士を一瞥し、それから状況を飲み込めていない熊系獣人族の指揮官へ視線を向けた。怪訝な表情を浮かべているが戦意を喪失したわけではないだろう。俺は右手を掲げて甲に刻まれた闇の紋様を見せる。

「助太刀してやる。だから少しは協力しろ」

最悪邪魔さえしなければいいのだが、それを確実にするためにも声をかけておく。闇の紋様を確認した黒鉄鎧姿の熊系獣人は「常闇ルナバルの魔銃士が参戦してくれるんだな」と呟き瞳に復讐の炎を宿した。

次の瞬間、悪魔はこちらへ向けて口を開き赤色の光線を発する。俺は右手で回転式魔弾銃を引き抜いて土属性魔弾を発砲。鋼鉄の盾を生成して悪魔の特殊技を凌ぐ。その間に漆黒の魔弾銃から空葉莖を排出して第五式魔弾を詰め込む。神経系を蝕む毒霧が有効とわかった以上、とことんそこを突いていくのが常套手段である。

しかし標準を合わせるより先に漆黒の悪魔は動き始めていた。俺は再び潜在能力を最大限まで解放する。心臓への負担は懸念すべき材料だが、長期戦でじっくり削り切れる敵とは思えない。ともかく最大火力（今回は猛毒系）で一気に畳みかけて、それで倒す算段が立たなければ退避方法を捻出する。戦術と呼ぶには短絡的だが、直感に逆らうべきではないだろう。

中空へ飛び上がり最短で距離を詰めてくる悪魔に俺は第五式魔弾を放つ。それから背後へ回るように移動しながら次弾を装填。発砲して爆裂系魔術反応を誘引。空葉莖を排出して多重魔術反応に備える。しかし漆黒の魔弾銃を構えようとしたとき心臓の軋みに堪えられなくなった。胸を押さえて地面に片膝を突いてしまう。その一瞬の不備が死を招く大きな隙となる。

刹那 爆炎の中から赤い閃光がこちらへ向けて放たれる。俺が回転式魔弾銃の引き金を絞るより先に土属性魔術>鋼鉄楯シールドの術式が展開。黄土色の魔術組成式から具現化された鋼鉄の盾が灼熱の閃光を防いだ。

「さつさと立ちやがれ」  
「すまない」

熊系獣人族の指揮官に促されて俺は立ち上がる。

「こいつは一体何者なんだ？ お前が苦戦するような魔物なのか？」  
「正体不明の怪物だ。高位の多重魔術反応で生きているくらいだからな」

言いながら俺は地獄の業火の引き金を絞る。多重魔術反応が神経系の猛毒を練成した刹那、地面が歪み斜円錐となった土の刃が四方八方から襲撃してくる。俺は反射的に風属性魔弾を地面に撃ち込んで上空へ避難。熊系獣人族の指揮官は全方位を鋼鉄の盾で塞いで防御。サクヤは一方向の刃を斬魔刀で切り捨て難を逃れていた。左脇には傍らにいたのであるう黒髪の奴隷少女が抱えられている。

俺は一抹の不安を抱きながら他所へ視線を移した。三人の少女が腹や胸を貫かれて文字通り串刺し状態になっている。俺は漆黒の魔弾銃に高位の光属性魔弾を詰め込んで発砲。即時に治癒系魔術を展開するものの効果がない。着地した俺は少女たちのところへ駆け寄る。すでに土の刃が消失しているため、血と涙に濡れた少女の身体は地面に転がっていた。次弾を装填しようとする俺に白銀髪の少女が告げる。

「無駄だ。すでに死んでいる」

どんな魔術を用いても死者を蘇らせることはできない。科学にも魔術にも不可能は存在する。だからこそ俺は無力な者に向けられた不必要な攻撃が許せない。

「貴様あああああああーっ！」

振り返る俺の眼前に巨大な体躯。腹部を貫いた斜円錐の刃は背中へ抜けている。黒鉄鎧の隙間から大量の血液が滴り落ちていた。

「油断するな常闇の魔銃士、その甘さに付け込まれるぞ」

治癒系魔弾を放とうとする俺を瀕死の熊系獣人は首を左右に振り制した。その表情には因果応報を覚悟するような深い哀しみが含まれている。

「どうして奴隷売買になんか関わっていた？ あんたらくらいの能力があれば真つ当な仕事なんていくらでもあつただろ！」

「それは今だから言えることだ。いつ餓死してもおかしくなかった幼少の俺に食事と住む場所を与えてくれた連中の誘いをどうして断れよう」

熊系獣人族の指揮官は少し遠い目をしてそれから地面に崩れ落ちる。不幸が不幸を呼ぶ負の螺旋だ。俺は決意表明として傍らに立つ白銀髪の少女に告げる。

「俺は この世界を救いたい」

それが叶わぬ願いだとわかっているからサクヤは曖昧に微笑むだけだった。

二度に渡る猛毒攻撃を受けた悪魔は酷い形相でこちらを睨み付ける。俺は潜在能力を解放して漆黒の魔弾銃を構えた。こいつだけは今ここで仕留めなければならない。



傍らに黒髪の少女を抱き寄せたサクヤは斬魔刀「焰」<sup>ハムヒ</sup>で土の刃を切り捨てながら告げる。しかしその忠告に俺は従うことができなかった。眼前の魔王は常闇の魔女や真紅竜王<sup>テイヤマト</sup>と異なり明らかに殺戮を楽しんでいる。己の力を理解した上で弱者を鬻り命を奪っているのだ。今ここで屠らなければ同じ悲劇を繰り返すことになるだろう。

四度目の多重魔術反応で神経系の猛毒を練成。俺は胸を押さえて心臓の負荷に耐える。爆炎の中から姿を現した悪魔は鬼のような形相を浮かべて地面に片膝を突いた。確かに猛毒は標的の神経を少しずつ蝕んでいる。こうなればあとはどちらが先に倒れるか根競べだ。

「ロン！」

白銀髪の少女が叫ぶ。しかし俺は耳を貸さず潜在能力を解放して五度目の多重魔術反応を目指す。残りの高位魔弾だけで十数回程程度の猛毒練成が行える。撤退するにしても今はまだ時期尚早という判断を下していた。

漆黒の悪魔は巨大な黄土色の魔術組成式を展開する。俺は自動式魔弾銃の弾倉を手早く抜き取り雷属性に交換。七回ほど引き金を絞る。必ず発生するわけではないが七発のうち一発くらいは瞬間的な前後不覚に陥らせてくれるだろう。神頼みな詠唱中断方法だが、確実な方法がない以上、次善の策としては優秀である。

「くたばれええええええええええええええええええええええーっ！」

気合でどうこうなるとは考えていないが、それでも叫ばずにはいられない心境だった。もう少して押し切れそうな気もするが、すでに俺の心臓も悲鳴を上げて限界を訴え始めている。何発目かの雷属性魔弾が一瞬の気絶状態を引き起こした。詠唱を中断させられた悪



と対照的に巨大な黄土色の魔術組成式が消滅していく。力技とはいえ結果的に魔王の口を閉じさせて詠唱を中断させたのである。

連続攻撃を仕掛けようとしたサクヤは不意に前へ倒れそうになる。斬魔刀を地面に突き立てて踏み止まるが、なぜそのような状況に陥ったのか把握できていない。漆黒の魔弾銃で効果範囲を完全に制御しているとはいえ、刀の届くような至近距離に踏み込めば一呼吸で致死に至る猛毒の餌食だ。体内に仕込んだ治癒系魔術のおかげで意識を保っているみたいだが、もし練成直後の高濃度時に飛び込んでいたら命さえ危なかっただろう。

「小癩な奴だ」

「あ……ぐぐ」

悪魔は片手で襲撃者の首を絞めて持ち上げる。俺が動くよりも先にこちらの方向へ少女の身体を投げ捨てた。反射的に駆け寄りサクヤを抱き起こした瞬間、ぴくんと少女の身体が小さく跳ねて口から血を滴らせる。背中を確認すると軽鎧を溶解させた熱線が肉まで抉っていた。

「我への非礼は死を持って償わせる」

「うあああああああああああああーっ！」

俺は叫びながら地獄の業火の引き金を絞る。単発では無意味と理解していても、その行動を抑制することはできなかった。安易に勝てるかと判断してしまった甘さ、それから仲間を守れなかった弱さ、そしてなにより仲間の忠告を聞き流した傲慢さが情けない。

「早く……逃げるんだ……悪魔の石像は……攻撃力は並だが……耐久力は計り知れない」

「誰かサクヤを助けてください！」

俺は馬鹿みたいに叫びながら光属性魔弾を白銀髪の少女に放ち続ける。しかし瀕死の退魔刀士は俺の手を制して笑顔を浮かべた。

「最期くらい……私の忠告を聞いて……くれてもいいだろう？」

「わかった。わかったからもう喋るな」

「心配する必要はない。二人ともここで死ぬのだからな」

不敵な笑みを浮かべながら悪魔は再び魔術の詠唱を開始した。俺は思考を切り替えて逃走手段を画策する。強大な魔術であればあるほど発動後に生じる隙も大きい。一か八かの博打になるが状況を打開するには最も適した機会だろう。

耳が痛くなるような静謐が訪れた。

「待ちなさい！」

不意の声に魔王は視線を移動させる。建物の窓枠に黒い影を揺らしたような使い魔が仁王立ちしていた。似合わない立ち姿のまま聞き慣れた声が警告を始める。

「ガーゴイル悪魔の石像、今ここでラズエルくんを殺したら許さないわよ。必ず見つけ出して後悔させてあげるわ」

「そんな脅しに我が屈すると思うのか？」

「シルフィード風の精霊の存在に怯えているあなたの台詞とは思えないわね」

「……………」

沈黙する悪魔に二足歩行の小動物が勝ち誇った表情を向ける。俺は空薬莢を排出して漆黒の魔弾銃に高位の光属性魔弾を装填。それを白銀髪の少女に撃ち込みながら話に耳を傾ける。

「そもそも直接的にしる間接的にしる事前に手を下す行為は約定に反しているわ」

「汝も動いているではないか？」

「準備工作と排除を一緒にしないで頂戴」

「なにゆえに眷属の命を欲する？」

「私が先に見つけた玩具を他者に奪われたくないだけよ」

「常闇の魔女も腑抜けたものだな」

捨て台詞を吐いた悪魔の石像は魔術組成式を解除して跳躍。翼をはためかせて闇夜へと消えていく。俺は生死の境を彷徨っている白銀髪の少女へ呼びかける。

「おい、しっかりしろ」

「……心配……無用だ……五分もあれば……起き上がれる」

その言葉に俺は胸を撫で下ろした。それから木陰に隠れたままの奴隷少女に声をかける。

「もう安全だ。心配しなくていい」

「まったくもう」

てくてくと二足歩行でこちらへ歩み寄りながら使い魔は愚痴を零した。

「どうして私の周りには使えない男ばかり集まるのかしら？」

「おいおい、俺以外の男とも契約しているのか？」

「言葉の綾よ。でもそうね、嫉妬してくれるのは嬉しいわ」

「……負傷しているときくらい優しい言葉をかけてくれ」

「そうね、間に合ってよかったわ」

そんなことを言って使い魔は似合わない柔らかな笑みを浮かべる。

だから俺は少し苦笑したあとに「ありがとう」と告げることができた。

「それは難儀だったね」

悪魔ガーゴイルの石像との一戦を終えた翌朝、俺は奴隷少女をサクヤに任せ、天竺ラクシュミ山へ一人で登頂した。そこで運び屋としての使命を果たし、イリヤ商会へ舞い戻ってきたのである。応接室で事の顛末の聞いたアジド・マクベルは静かに立ち上がり冒頭の一言を発したのだった。

「本当になにも知らなかったんですか？」

俺は一言で話を流そうとする妖精族の青年に詰め寄る。アジドは臆することなく焙煎された豆を挽いて専用器具に投下。空気圧を利用して抽出された黒い液体は独特の香りを放つ。陶器の杯に注がれた高温の飲料は珈琲と呼ぶべき代物だった。

「まあ、一杯」

そう言って妖精族の青年は長机の上に置いた杯を俺の手前へ差し出してくる。砂糖と乳製品クリームは添えられていないので、この世界での飲み方は原液ブラックが主流らしい。俺は気持ちを落ち着かせる意味も兼ねて珈琲を口へ運ぶ。

「ところで風シルフィードの精霊はなにか言っていなかったかい？」

言われて俺は右手の人差し指に填めた宝玉付きの輪を撫でる。透き通るような黄緑色の髪を腰まで伸ばした風属性の魔王から譲渡された代物だ。しかしこれは副産物に過ぎない。届け物と引き替えに風の精霊から受け取った小さな木箱はすでにアジドの手の中にある。

「伝言は受けていません。とにかく寡黙な美女でしたからね」  
「ふむ」

珈琲を一口飲んだ担当官は陶器の杯を長机に戻しながら木箱に視線を移した。特に装飾も施されていない小さな箱だが異様な存在感を醸し出している。もし風の精霊が強大な魔術組成式を仕掛けていたら洒落では済まないからだろう。

「なにも知らなかったと言えば嘘になるだろうね」

ここでようやくアジドは最初の質問に対して返答する。ある程度予想できた結果なので驚きはない。俺は珈琲を再び口へ運びながら次の言葉が紡がれるまで静観した。

「八英傑すべてが約定に従って行動するわけではないということさ」  
「どういうことですか？」

「言葉通りに受け取ってもらえない」  
「では約定とは？」

アーシエス 常闇の魔女がガーゴイルの石像に使用していた言葉だ。単純に考えれば八英傑に特定の条件を課したのだろう。しかしあんな怪物連中に力尽くで無理を強いれる存在がいるとは思えない。つまり飲まざるを得ない状況へ導いた黒幕がいるのだろう。

「僕には詳細を話す権限がない。しかし今回の一件で君にも掴めたことがあるだろう？」

眼鏡の奥から鋭い眼光が向けられた。俺は宝玉の付いた指輪を外して長机の上へ置く。

「気になるならマクベルさんに譲渡しますよ」

「遠慮しておこう。他者が指に填めた途端に発動する魔術組成式が施されているかもしれないからね」

「この指輪が意味することも不明なんですか？」

「ああ、それについてはなにも知らない。風の精霊が君にくれた贈り物なんだろうさ」

「最後に一つ聞かせてもらってもいいですか？」

「構わないよ」と担当官は小さな肩をすくめる。

「奴隷商の存在も把握していたのですか？」

わざとらしくアジドは長い沈黙を挟む。無言の回答を出してから青年は言葉を紡いだ。

「僕には詳細を話す権限がない」

魔導都市ファルガントにある飛空艇護衛団の宿泊施設。

俺が部屋に入ると黒髪の奴隷少女は可愛い笑みを浮かべて寄り添ってくる。この瞬間は命の恩人に対する感謝と認識していたのだが、すぐさまそれが別の感情に支配されている行動だと理解した。少女は俺の前で膝立ちになると下半身の服を脱がし始める。意味不明な展開に反応が遅れると少女は笑顔のまま両手を俺の腰へ回して股間へ顔を近付けてきた。大慌てで少女の口撃を回避した俺は下げられた服に足を取られて派手に転倒する。その音を聞き付けて仕切りの向こう側にいた白銀髪の少女が顔を覗かせた。

「ロンを倒すのは案外簡単かもしれないな」

「馬鹿なことを言っていないで止めてくれよ!」

俺は服を穿き直しながら立ち上がる。その様子を見ていた奴隷少女はなにを勘違いしたのか服を肌蹴はたけさせた。弾力性の高そうな白い肌と成熟していない二つの乳房が露になる。視線に困った俺は顔を出したままのサクヤに説明を求めた。

「なにかの嫌がらせか？」

「そうではない。おそらく奴隷としての暮らしに馴染み過ぎたのだろう。植え付けられた恐怖は簡単に拭い去れるものではないからな。要するに元主人にそういう風に出迎えるよう躰けられたのではないか？」

「つまりその……どういうことだ？」

本当はある程度予想できたが、それを口にする勇気がなかった。そんなことが現実にあるとは思いたくなかったからだ。こんなときでさえ俺は誰かに甘えてしまっている。

「性奴隷として主人に奉仕するよう調教されているのだ。喜ばすことができれば酷い目に遭わされる。しかも飽きられれば新しい買い手に売り払われてしまう。売られる度に商品価格が下落して奴隷の待遇は悪化していく。基本的に性奴隷は使い古された劣化品より新品に分があるからな」

絶句する俺にサクヤは苛烈な事実を紡いでいく。

「主人が転々と代われれば扱いが酷くなる。そういう環境を本能的に理解しているのだろう。あるいは奴隷競売場で底辺まで墮ちた性奴隷の待遇を見せられたのかもしれないな」

「……………」

俺は無言のまま半裸の奴隷少女へ視線を戻した。恋人へ向けるような満面の微笑みが逆に痛ましい。心からの喜びではなく今よりも不幸な状況へ陥らないための演技だからだ。

「ロン、席を外そうか？」

「冗談なら笑えないぞ」

俺は予想以上に低い声で白銀髪の少女を断罪していた。しかしサクヤは気にする様子もなく残酷な事実を告げてくる。これまで発したことのない冷淡な口調だった。

「性奴隷は性行為でしか価値を証明できないのだ。ロンが拒否すれば、その子は救われない。なぜ拒絶されたかを考えて苦悩するだけだからな」

ふらふらする足取りで俺は黒髪の奴隷少女に歩み寄る。服を正してから俺は微笑みを絶やさない黒髪の少女を抱き締めた。昨日の血と涙に濡れた少女の死に顔が脳裏に蘇る。悪魔を前に恐怖で顔を引き攣らせる少女と主人の前で意に反して微笑まなければならぬ少女。どちらもまるで報われない地獄だ。そう考えただけで涙が止まらなくなる。

「私の助言を聞き入れなかったことへの抗議はこれで終わらせてやるぞ」

そう言い残して白銀髪の少女は部屋を出ていく。数分後、俺は涙を拭い黒髪の奴隷少女を寝台へ座らせた。寝室とはいえ一通りの設備が整えられている。とりあえず感情の昂ぶりを抑えるために熱い煎茶を淹れて一口飲む。次いで二人分の湯飲みを乗せた盆を寝台の傍らに置いておく。それから俺は奴隷少女の横へ腰を下ろして性行

為が不必要であることを力説する。

「つまりそんなわけで性行為は必要ない」

しかし黒髪の少女は扇情的な姿勢や蠱惑的な仕種で誘惑してくる。俺を欲情させないことを責任に感じているのかもしれない。ともあれ俺は両手で少女の肩を押さえて視線を合わせる。もし言葉が通じないのなら身振り手振りで伝えるしかないだろう。

「俺の話していることはわかるか？」

黒髪の少女は柔和な笑みを浮かべたまま首肯する。しかし俺の間から手を離さないところを見ると理解しているとは思えない。俺は性行為を再現する動作を演じてから両腕を交差させて否定の意を示した。

「……………」

妙な沈黙が生まれる。ともかく俺は少女の反応を待つことにした。

黒髪の少女は懇願するような視線をこちらへ向けてくる。それまで見せていた蠱惑的なものではなく、まるで捨てられた猫が立ち去る主人へ向ける視線そのものだった。

「心配しなくていい。君はもう奴隷じゃないんだ」

そう発して「君」という言葉に違和感を覚えた。俺はまだ目の前にいる少女の名前を知らない。奴隷を買うような連中は所有物であることを明確にするためにも名を付けそうだし、なにより主人と奴隷の関係でもなにかしら呼び名がないと不便だろう。

「名前を覚えてくれないか？」

俺は少女を指し示しながら「どう呼べばいいか」を身振り手振りで表現する。もちろん偽りの笑顔と沈黙しか返って来ない。次の対応を思案していると不意に扉が開いた。

「ふむ。やはり性行為には及んでいないらしいな」

「サクヤ……俺はお前がなにを考えているのかさっぱりわからないよ」

扉を開けたまま突っ立っている白銀髪の少女に俺は辟易しながら突っ込みを入れた。

「失礼な奴だな。ロンが天竺山<sup>ラクシュミ</sup>へ登っているときに私は奴隷少女を専門の魔術士に診てもらっていたのだ。その結果を知らせにきたというのに酷い言われようではないか？」

反論するより先に俺は憤慨するサクヤへ駆け寄る。手にした羊皮紙を確認しながら診断結果を催促する。黒髪の少女は寝台の上で不安そうな表情を浮かべていた。

「逃げられないよう足の腱を切ったり騒がないよう声帯を潰したりする例もあるみたいだが、あの子に関しては肉体的損傷は一切見られなかったらしい」

「つまり喋れないのは精神的な事情か？」

「さすがはロンだな。専門の治療系魔術士によれば、虐げられるうちに精神が壊れたらしい。あるいは環境に適應するために脳が陵辱されることを苦痛に感じなくさせたのだろう」

凄惨な事実には俺は唇を噛み締める。白銀髪の少女は端的に診断書を読み進めていく。

「再生ということに限れば肉体損傷のほうが百倍簡単らしい。精神の治療は長期的に行う方法しかなく、無理に短期間で行えば様々な弊害を引き起こすそうだ」

「完治までどれくらいかかる？」

「わからないそうだ。劇的に回復することもあれば永遠に完治しない可能性もあるらしい」

サクヤの言葉に俺は語を継げなくなる。永遠に完治しないなんて冗談でも笑えない。

「あの子　ふむ。代名詞で呼ぶのも面倒だな」

思案顔を作りながら白銀髪の少女は腕を組む。奴隷少女の呼び名に苦勞していたのは俺も一緒なので一つ提案しておく。

「本人が呼ばれていることを自覚できるような名前ってないか？」  
「よくある可愛い名前からララやサラであるかな」

俺は不安そうな黒髪少女へ向き直り告げた。

「今日から君はララだ。俺はロン。以後よろしく頼むよ」

サクヤにララを任せ俺は混浴の大浴場へ足を向ける。本来なら荷物を置いて直行する予定だったので、随分と長い時間風呂へ入るのが遅れてしまった。脱衣所に数名の男女、浴場にも数人の先客がいた。俺は視線を壁へ一点集中させながら移動する。混浴なので女性の裸を見ても構わないのかもしれないが、拳動不審な反応をしてしまうことが目に見えているので、それなら最初から見ないように工夫しておくのは当然のことだろう。

「おお、常闇カルナバルの魔銃士ではないか！ 不審者にしか見えない動きをするから誰かわからなかったぞ！」

俺の努力を台無しにするな。しかしまあ、その通りなのだろう。

「ベイリツクさん、本日もご厄介になります」

「サクヤから話は聞いている。なにやら面倒な子を連れ込んでいるそうじゃないか？」

「ええ、まあ」

俺は板に腰を下ろしながら相槌を打つ。それから桶に湯を溜めて身体にかける。大柄の熊系獣人も隣に座り身体の汚れを洗い流して

いく。直後にベイリックは後ろの湯船に向かったが、俺は髪と身体を綺麗に洗ってから湯船へ向かう。

「常闇の魔銃士を気に入っているのか単独行動を好むサクヤが随分と饒舌に語っていた」

「どうせろくでもないことでしょう?」

湯船に身体を浸しながら俺は愉快そうな表情を浮かべる団長へ視線を向けた。

「いやいや」どんな料理を作れば食べてもらえるかな?」とか「後ろで縛るより髪を下ろしたほうが可愛く見えるかな?」とか他愛のない話さ」

「恋する乙女か!」

「冗談だ」

言いながら熊系獣人は巨軀を震わせて豪快に笑う。周囲から迷惑そうな視線を集めても一切気にしていない。まあ、いつものことなのだろう。俺は嘆息を漏らしながら形式的な突っ込みを入れておく。

「死ぬほど似合わないからそういう冗談はやめてください」

「ならば早速本題に取りかかるとしよう」

切り替えの早いことだ。俺は肩をすくめて先を促しておく。

「サクヤは自身と対等あるいは上回る力を持った奴としか親しくならない。おそらく過去の因縁が関係しているんだろう。自身を守ることはできて仲間を救うことはできなかった。それくらいしか一人を好む理由がわからないからな。旅先での出来事を詳しく聞くつもりはないが、やはり簡単に払拭できるような因縁ではなかった

みたいだな」

「……………どうのことですか？」

「奴隷少女を専門家に診せると言っていたとき、お前もついでに診てもらえという状況だったからな。送り返されたことに腹を立てているわけじゃないことくらい察するさ」

「……………」

俺は絶句することしかできなかった。迂闊な行動が少女の傷跡を決ったのかもしれない。

「まあ、サクヤのことはいい。それより黒髪の少女をどうするつもりだ？」

ベイリックの言葉が重く圧しかかる。確かに重要なのはララと名付けた報われない少女の今後についてだ。俺は素直な気持ちを吐露する。

「ガーゴイル悪魔の石像に殺されそうになったとき、奴隷少女たちは恐怖に顔を歪めていたんです。それなのに俺の前では笑顔を崩さない。だから余計にやるせない気持ちにさせられるんですよ。死に物狂いの形相で魔物から逃げるか、安全地帯で男に身体を差し出して笑顔を振る舞う。どちらに転んでも地獄じゃないですか？」

「ふむ」

熊系獣人族の団長は太い腕を組んで口を引き結ぶ。やや間を置いてから提案してくる。

「特殊な環境で培われた習慣を矯正する施設がある。もし利用するなら俺が手続きしておくが？」

「専門家に任せるのが確実なのは理解ですけど……………うーん」

煮え切らない俺にベイリックは訝しげな表情を向けてくる。

「なにか引つかかる点でもあるのか？」

「それで本当に救われるんでしょうか？」

「俺に聞くなよ」

団長は両手を上げて首を左右に振る。反論の余地もない正論だった。俺は顔の半分を湯に沈めて一考する。自分で蒔いた種くらい自分で回収すべきだろう。ぐるぐると堂々巡りの繰り返し返す中で、不意にある人物の顔が頭の中に閃いた。

「少し考えさせてもらってもいいですか？」

「ああ。それは構わないが、どこか当てがあるのか？」

「ええ、まあ。頼りにしていいのかよくわからないんですが、こういうとき頼りになりそうな人がいるんですよ」

応じながら俺は故郷の孤児院の保育士を思い浮かべる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9510x/>

---

常闇の魔銃士

2012年1月13日21時48分発行